

樓の上(上)

梗

概

兼雅、一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す、
 俊隆女之を仲忠に謀る、仲忠石作寺に參籠して宰相上とその子
 とに邂逅す、仲忠邂逅の趣を父に告げて先づ文を贈らしむ、
 仲忠宰相上を訪ふ、父に自ら宰相上を迎へんことを勸む、
 自ら行きて宰相上を三條に迎ふ、宰相上腹の小君兼雅に懐かずして
 仲忠を基ふ、兼雅梅壺を三條に迎ふ、俊隆女に對する他の妻妾
 たちの嫉妬、俊隆女兼雅に愛を他の女に分たんことを勸む、仲
 忠小君を携へて參内す、東宮小君を携へてあて宮の許に至る、
 俊隆女、太宰大貳の贈物を人々に分つ、仲忠、犬宮に琴を教ふべき
 心構を女一宮に語る、母を訪ひて同じ事を語る、兼雅來合せて夫婦
 古を追懐す、犬宮の美しくし、仲忠の祕藏、仲忠京極の舊
 邸に犬宮に琴を教ふべき樓を造る、人々の噂、俊隆女の琴を聞きに京極
 邸に仲忠、朱雀院及び嵯峨院に參る、嵯峨院、俊隆女の琴を教ふべき由を
 の邸に御幸あるべき事を約す、仲忠樓上にて琴を教ふべき由を
 犬宮に告ぐ、涼、仲忠を訪ふ、樓の噂、涼、犬宮を陳見す、歸りて
 妻今宮に犬宮の美しさを語る、女一宮、犬宮の修業中は一切人に逢
 はすまじき由を女一宮に告ぐ、犬宮、京極に移る、行列、女三宮の
 の京極に移るべき日の準備、到著、饗宴、仲忠、母及び犬宮と京極に
 感傷、見物人の評判、兼雅、兼雅夫婦の懷舊、
 院より女一宮及び俊隆女を訪はる、
 居す、兼雅京極を訪ふ、兼雅夫婦の懷舊、

兼雅一條西の對に遺題の歌を見て宰相上の行方を尋ねんと志す。俊隆女之を仲忠に譲る。

〔語釋〕

- (一) 兼雅
- (二) 兼雅の妾の一人也
- (三) 兼雅の妾の一人也
- (四) 兼雅には「年をまちわびて」とあり
- (五) 三途の川
- (六) 多くの妾たちが居られしに
- (七) 兼雅がかくく仰せらるる故
- (八) 兼雅の女御也
- (九) 兼雅がかくく仰せらるる故
- (一〇) 兼雅の女御也

まことや、三條の右の大殿の、かの一條殿の對どもに居給へりし御方々、宮、むかへられ給ひて、今は限なめりとして、思ひく々にわたり給ひにし中に、西の一の對に、源宰相の君、

宰相上ふるさとおほくの年は住みわびぬわたりがには訪はじとやする

と書きつけ給へりしを、殿おはして見つけ給ひて、兼雅心ふかくをかしう、容貌などもことに難なかりしを、いかでこればかりをば、在處を聞かましかば、尋ね

てしがな」と宣へば、内侍のかみ、俊隆女いとよき事なり。宮のおはしける所に、

あまた然てもものし給ひけるを、女子もなく、さうくしき。處は、廣うおもしろ

う、めでたきに、元のやうにて物し給はど、聞え交してあらむ」とて、右大將の

參り給へるに、俊隆女こと宣ふめる事なほ御心とどめてたづね給へ」と聞え給へ

ば、けにながくと思す。

かよる程に、朱雀院の御同胞、承香殿の女御と聞えし御腹の齋宮にておはしつる

(一) 兼雅の妾の一人也

(二) 兼雅の妾の一人也

(三) 兼雅には「年をまちわびて」とあり

(四) 三途の川

(五) 多くの妾たちが居られしに

(六) 兼雅がかくく仰せらるる故

(七) 兼雅の女御也

(八) 兼雅がかくく仰せらるる故

(九) 兼雅の女御也

(一〇) 兼雅の女御也

(一一) 兼雅の女御也

(一二) 兼雅の女御也

(一三) 兼雅の女御也

(一四) 兼雅の女御也

(一五) 兼雅の女御也

(一六) 兼雅の女御也

(一七) 兼雅の女御也

(一八) 兼雅の女御也

(一九) 兼雅の女御也

(二〇) 兼雅の女御也

(二一) 兼雅の女御也

(二二) 兼雅の女御也

(二三) 兼雅の女御也

(二四) 兼雅の女御也

(二五) 兼雅の女御也

(二六) 兼雅の女御也

(二七) 兼雅の女御也

(二八) 兼雅の女御也

- (一) 伊勢より京に
- (二) 誤あるべし。右大臣殿
- (三) 我が親族故
- (四) 齋宮を
- (五) 誤あるべし
- (六) 齋宮になりて伊勢に
- (七) 齋宮に通ひたし
- (八) 女一宮が不快に思はるべし
- (九) 誤あるべし
- (一〇) 宰相上
- (一一) 誤あるべし
- (一二) 宰相上
- (一三) 誤あるべし
- (一四) 宰相上
- (一五) 誤あるべし
- (一六) 宰相上
- (一七) 誤あるべし
- (一八) 宰相上
- (一九) 誤あるべし
- (二〇) 宰相上

仲忠石作寺に参籠して宰相上とその子とに邂逅す。

大將殿に物せられなば大將殿だにものせられずば大將の侍りしけに物せられなば

が、其の御母女御のかくれ給ひぬれば、のほり給はむとす。右大將殿宣ふやうこの宮の御母方も、離れ給はねば、はやう、ちかうて時々見奉りしに、御かたち清けにて、をかくおはせしが、折々に聞えかはしよに、何かは思し契りしを、俄に下り給はむとせしに、又かく見つけ奉りて、他事おほえでなむ」大將殿、仲忠「けに物せられなば、忍びてたまさかにさやうに有りなまし。まだ御年も若うおはすらむかし」兼雅「何かは。今も然おはせかし。宮いかどおほさむ。忝、けれども、こよには、大將の年の程見給ふに、今にあらねばこそ」と聞え給へば、仲忠「いさや。なほすさめ事なり。今の一條西の對の君は、尋ね侍らむ」と聞え給ふ。かくて、石作寺の薬師佛現じ給ふとて、多くの人まうで給ふ。大將殿御物忌し給はむとて、いと忍びて一所、御供に人多くもなくて参り給へり。けにいみじう騒がしきまで人まうでたり。曉には、皆出でぬ。この御局のかたはらに留まりたる人、いとあてはかに故々し

(語釋)
(一) 仲忠の心

(三) 仲忠が此兒を見れば
兒が目を見合せて

(考異)
(二) 男子の「の」ナナレ

き聲して、上に人二人ばかり、下仕なめり、人にいたうも隠れで、几帳のほころびより見えたるも目やすし。大徳の、御堂のうちより來たれば、乳母なるべし、さやうの大人々々しき聲にて、「此の君の御事よかんべく祈り給へや。親におはする殿に知られ奉り給へと申し給へと、いと心苦しうなむ、おほし歎くを見奉る」など言ふ。逢ふ期あるにやあらむ、哀なる事なりや。親子と見ず知らざらむよ、誰ならむと聞き給ふ程に、八つ九つばかりなる男子の、髪も鬘ばかりにて、かいねりの濃き袴一かさね、櫻の直衣のいたう馴れほころびたるを著て、白う美しけにて、あてに美しけなるが、假粧もなく、たゞ見に立ち出でて、外のかたに立ちたり。よう見給へば、宮の君の顔に似たり。聲はいとあてになまめかしう愛敬づきて幼げに物など言ふ。いと美しけに、み給へば見あはせ給ひて、扇して招き給へば、うち笑みて、ふとおはしたり。内に、いとあてなる聲にて、「かれ呼び給へ。かの君は、何方ぞ。あな見苦し」と言へば、「おはしませく」と言へど

(語釋)
(一) 仲忠の心

(二) 兼雅が

(六) 宰相上が

(考異)
(三) 承りにしー承り給ひ
にし

(四) 近くー近う

(五) 賜うてー賜うとて

(七) なりーなめり

(八) おもひーおぼえ

も肯かず。大將、膝にすゑ給ひて、仲忠「母君は此處にか」と宣へば、見おはすめり」仲忠「誰が御子ぞ」見「知らず」仲忠「御父は、誰とか人はきこゆる」見「右の大殿とかや人は言へど、まだ見え給はず。呼ぶなり。まうでなむ」とて立ち給ふ。あやしき事かな、「西の對の君にこそ見ありしを、たゞ一目見ずて、伯母君なむ、かなしうして取り籠めてし」と宣ひしにやあらむ、あはれにもあべきかな、其にやあらむ、なほ氣色見む、とおほして、硯召し寄せて、仲忠わたり川いづれの瀬にか流れしと尋ねわびぬる人を見しかな、おはしまさせ給へや。まめやかには、いかでか承りにしがな。しるべは、いと善うこゝに。

とかき給ひて、上に近く使ひ給ふ童して、奉り給ふとて、仲忠この御返賜うてなむ、わか君を」と聞え給ふ。取り入れさせて見給へば大將の御手なり。いといみじう恥かしう、いかに見給ふらむとおもひ給へど、佛の御驗もあらむと、嬉し

うおほす。白き色紙に、

(語釋)
(一)仲忠の心

宰相上いとおほつかなく思おもう給たまへらるれど、

(二)兼雅が

わたり川がはたれか尋たづねむうき沈しづみ消きえてはあわとなりかへるとも

(四)出家などして居給はずは

え覺おぼえずぞ侍はたる。

(五)私を

とかき給へり。思おもひあてに、かの見たまひし手てよりは、いとなまめかしう、あてに書かきたれど、それなめり、けにまがへる心こころかな、と思おもす。たちかへり、

仲忠こころ心憂うれく、もてはなれては思おもされじものを。今いまよりは親おやなどこそ頼たのみ聞きえ

(考異)
(二)思おもう—思おもひ

させむと思おもう給たまへらるれ。いとまめやかに、年頃としごろ「いかで物ものせさせ給たまふら

む」となけき聞きえ給たまひて、「思おもひの外ほかならぬ御おんさまにて物ものせさせ給たまはゞ 御迎ごむかひも

いかでか」などなむ聞きえ給たまひたる。心細こころほそく思おもひ給たまふに、いと嬉うれしく見み奉たまる

も、いと頼たのもしくなむおほえ侍はたる。殿どのをば、忝かたじけなけれど、然さる方かたに思おもひきこえ

給たまひて、心こころやすく思おもさば、とりわきてとなむ、君きみには語かたらひ聞きえさする。



樓の上(上)

(語釋)
 (一)宮の君に似たりといへる見
 (二)小君の目より見たる仲忠の様
 (三)宰相上より
 (四)仲忠が
 (六)兼雅が
 (九)小君の身上につきては兼雅はあてにならぬ故
 (考異)
 (五)御上―御壁
 (七)今は三人にて―常に
 (八)見苦し―見苦しう

と聞え給へり。小君には、仲忠「まろが弟におはしけれど、子の様に思ひ聞えむ」
 などいとよう語らひ聞え給ふ。いと思ふやうに、めでたき様に、かう宣へば、
 見ならひ給はぬ幼き心にも、いと嬉しくて、小君「まろも思ひ聞えむ」など聞え給
 ふに、「おはせ」とあれば入り給ひぬ。御乳母など限なく喜ばしう思ふ。日暮れ
 て、屏風のもとにて、對面し給へり。いとあてに、けはひなども、式部卿の君よ
 りも心にく恥かしげに物し給へり。院の女御の御上におほえ給へり。若君の御
 事も、おいらかに宣ふさま、恥かしげなり。仲忠「今必ず御迎侍りなむ。しかぐ
 なむ常に聞え給ふ」と宣へば、宰相上「なにか。自らは今は隠るひたる人にて、侍ら
 むも見苦し。心苦しう見給へる人は、かの御心は頼もしげなくおほえ給ふを、け
 に御心留めさせ給はむこそは、たのもしう侍らめ」大將、仲忠「いかど」など聞え
 給ひて、仲忠「やがて奉て奉らむ」と宣へど、宰相上「今まづ、然る人など聞え給は
 むに、けにとおほし出づる事侍らばこそ」と宣ふ。

(語釋)
 (一)小君を仲忠が
 (三)小君が
 (四)仲忠が
 (六)宰相上が
 (七)仲忠の
 (八)宰相上に
 (九)宰相上の隱家が
 (一〇)宰相上が

(考異)
 (二)給ひて―給へど
 (五)來べき―候ふべき
 (一)美しうて―うつく
 しげにて

●仲忠遠近の趣を父に告
 げて先づ文を贈らしむ。

又の日も、呼び奉り給ひて、御菓物などまゐり給ひて、遊をのみし給ふ。大將
 の詩誦し給へば、聲いとをかしうて、諸共に誦し給へば、仲忠「いと美しう。誰か教
 へ奉りしぞ」小君「母君」と聞え給へば、をかしかりけりと思す。
 三日果てぬれば、出で給ひなむとす。仲忠「何處より参り來べき」と聞え給へば、
 宰相上「言ひ知らぬ山里のやうになりたるはべり。御覽せむにも、いと怪しけにな
 るむ侍る」と聞え給ふ。同じ程に出で給ふ。此の君の御供に、ことに人もなし。御
 迎に参り給へる、然るべき人、睦まじき人を、仲忠「まるれ」とて添へ奉り給ふ。
 西の大宮なりけり。一町なれど、いとみじう荒れて、いと幽なり。伯母君も、
 斯くなむと聞き給ひて、限なく喜び給ひ、入どもに菓物など清けにして出だし給
 へり。
 大將は、やがて殿に参り給ひて、仲忠「物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍り
 つるに、しか此の人なむ、いと美しうてこそおはしけれ。はや、今日明日にても、

(語釋)
 (一)宰相上の居處として
 (二)「ぐさ」に古本「具者」と註せり
 (三)多くの子どもを
 (四)仲忠は只一人の子なれど
 (五)正頼の子どもを懸倒する位に
 (六)今更よい加減な子どもを外に儲くるは異な物ならん、なまよるしくての上「いかで」などあるべし
 (七)「大將」衍文歟。一本「殿は」
 (八)その子がさ程よくなくとも
 (九)仲忠の
 (一〇)宰相上の
 (一一)兼雅
 (一二)宰相上の父なるべし
 (一三)外に立派な妻を設けたりとも
 (一四)給はめー給ふべかめれ

むかへ奉らせ給へ。東の一の對の、南かけてこそはよく侍らめ」など聞え給へば、兼雅「いさや、心などの思ふ様によくもあらずば、御爲にも面目なくこそは。左のおとどの、ぐさのやうにて、ゆらくとひき連れてありき給ふに、一人なれど、彼をおし伏すばかりに物し給ふこそ、世中の人も、なかく辛しと思ひたるを、なまよろしくてあるべき」と宣へば大將、かんのおとども聞え給ふ。俊隆女「すべて御心せばく思ほせばなりけり。たとひ、人の同胞、なま悪くても侍らむからに、それにつけてや、覺の劣らむ。思ふやうに物したまはずとも、それにつけてこそ、いとどかの勝れたる様は、見聞え給はめ。いと心憂き御物言なりや。はや迎へ奉り給へ」と聞え給へば、兼雅「今ははや、ともかくも」と聞え給ふ。大將、仲忠「今朝の御おくり、人奉りつるに、かの住み給ふなる所は、いみじう荒れて心ほそけになむ侍るなる。まづ御文なども、只今は物せさせ給ひてや、よく侍らむ」殿、氣色いとすがくし、兼雅「昔、あはれ、源宰相の、ゆく末やんことなき人

(語釋)
 (一)誤るべし
 (二)物の入りたる盛宰相上へ御贈りをなされて然るべし
 (三)班絹歟
 (四)小君をいふ
 (五)見給へー見奉ら
 (六)心はへはーは「は」ナシ
 (七)三重がさねの御衣また人に賜はむとてー三重がさねにもき給はむとて

おはすとも、なほこれ心苦しう見給へ。さらむ、心ほそく物はかなき様にて散り侍らむは、いと悲しかるべくなむ。容貌は、世にもいと多く侍らむ。心ばへは、え憎ませ給はじ」と言ひしものを。何をかは遣るべからむ」と宣へば、仲忠「かく心深かりける御心を、いかにさて頼もしかりける。いでや」とて、仲忠「尾張より奉りたりし辛櫃あらば、入物ながらや、よからむ」とて召し出でたり。片つ方にきぬ廿疋、あや十疋、いま一つ方には、内侍のかみ、俊隆女「こよに物入れむ」と宣ひて、かいねりの綾のきぬ一かさね、薄色の織物のほそなが、はかま一くだり、山吹のあやの三重がさねの御衣、また人に賜はむとて、またらきぬなど入れ給ふ。御文は、兼雅あさましう、年頃になりけり。おほつかなさ、心より外にてなむ。何處とも知らせ給はざりけるも、理なれど、よろづ心憂く。大將聞えられければ、哀なる人もあやしう。又も見せ知らせ給はざりしかば、いと覺束なき

(語釋)
 (一)「サコシ」は「サメシ」
 (二)人よりの買物なるが
 (三)「珍らしく見給へつ
 るは」
 (四)此子を可愛そうと思
 召すなればよき様に御計
 ひありたし
 (五)誤あるべし

(考異)
 (一)「よあしかむひ」よく
 (二)人のものし「たど今
 人の一人の
 (三)給ひつー給ふ
 (四)つたへむーつたへて
 (五)「あひなきにやーあ
 ひなき方や
 (六)「よりはよく書きた
 れーよりよく書きぬれ

を、今然てのみは。まで給ひなば、いとよろしからむ。心安くてわたり給ひ
 ぬべき所なむ侍る。御むかへ、すこし、心苦しき人の戀しさも、
 すみなれし垣ほ離れて年ふれどわがとこなつはいつか忘れむ
 さりとともとかや。さて、これは、人のものし給ふめる。何にかあらむ。
 とて、早くかの御方に心寄せにてありし、大和介なる人を召し出でて奉り給ひ
 つ。殿人出であひて、珍らしがり、御返り、
 宰相上めづらしよくみ給ひつるは、けに覺束なき程になりけるにや。
 (六) もろともになれにし中の床夏を露とおきふしわれぞ忘れぬ
 心苦しき思すなるは、ともかくも持てなさせ給へかし。これはまたやつたへ
 (七) むと見給へるも、今更にあひなきにや。
 (八) と聞え給ひつ。御返、かんの殿に、兼雅「これ見給へ。手こそ、この氣ぢかく見し人
 (九) 人よりは、よく書きたれ。見所ある様にをかしく書きたるや」かんの殿、俊隆女「け

(語釋)
 (一)我が宰相上を愛した
 (二)「仲思は
 (三)俊隆女が死後の事を
 らよを思みたる也
 (四)「考異」
 (一)「こゝには同胞など言
 ひーとりわきて思ひ
 (二)「なりととりわきて
 (三)「こもーこと
 (四)「明の夜ぞおはしたり
 ーあすの夜とておはした
 (五)「横にをりにけりー様
 なりけり
 (六)「音せずー音もせず
 (七)仲忠宰相上を訪ふ。父
 に自ら宰相上を迎へんこ
 とを勤む。

に、いとをかしけなり。こゝには同胞など言ひ睦まじき人もなし。心細きに、心
 ざまなども、思ふやうにおはすなより。とりわきて思ひ聞えば、大將をも同胞の
 やうに思ひ給ふべし。怪しく、大人々々しくなられたれども、まづはかなき事も、
 己と言ひあはするに、亡くなりたらむ世にさうぐしと思ひ惑はむもいと哀なり」
 と殿にも聞え給へば、兼雅「ゆよしき事はうたてあり。大將あひ思ひ、互にうしろ
 安く思ひ給はむには、いとよろしき心様ぞ。あはれ宮の君こそ、やんごとなく思
 ひ聞えし効なく、物はかなく、いふかひなけれ」など宣ふ。
 (六)

畫詞 こゝは東の一の對。大將の御物忌などに、時々わたり給ふ所なり。
 さるべき様にしつらはせ給ひ屏風どもなど立てさせ給ふ。

大將殿明の夜ぞおはしたり。木ども、前裁などは、數あまた有りけれど、けに山
 里の様になりにけり。對ども、廊などかたぶき、怪しき様なり。人の音せず。東
 (九) の方によりたる格子の、二間ばかり明きためり。坤の戸より見入れ給へば、中

- (語釋) (二)これ宰相上也
- (四)小君
- (七)給ひつゝは「給ふ」歎
- (八)仲忠が
- (九)宰相上が
- (一〇)小君

の障子も壞れたり。南の隅より上りてのぞき給へば、東の妻戸の簾あけて、人々物めしむたり。母屋の方の柱に、いと濃きうちぎの艶やかなる。一かさね、薄き縹のあやのはりわた重ねて著て居たる人のかみ、絲をよりかけたる様に艶やかに長けなり。額にかよれる程、いと美しけなり。そびやかになまめかしき容貌、内侍のかみの御様躰かたちに覺えたり。ありし君、かいねりの濃きうちぎばかり著給ひて、鶴脛にて、いと小くをかしけなる琵琶かき抱きて、前に居給へば、いと美しと思ひ給ひて、髪かき遣り給ふ手つき、いと美しけなり。此の君、琵琶をいとをかしくらうくじく弾き給ひつゝ。君、宰相上今さへ、この小き琵琶をひき給ふは、いと見苦しからむは」と宣へば、小君然ば御膝に居てひき侍らむ。たゞは倒れに侍り」とて大なるを弾き給ふ。いと上手なり。これを弾き給ふを、殿に見せ奉らまほしくおほえ給ふ。大將うちしはぶき給へば、驚きて、几帳ひき寄せ給ひて、此の君して、御褌出だし給へば、仲忠おはせ。忝し」とてかき抱き

- (考異) (一)濃き一こごき
- (三)長けなり一なまめかし一ナシ
- (五)思ひ一思う
- (六)をかしくらうくじくをかし一こごき
- (一)給へば一給へり

- (語釋) (二)宰相上
- (六)「あらむや」とも歎
- (七)近々迎取るべしなど
- (九)父が晩年に我身の上を氣遣ひしを今は父も死したる事なれば假令どうなりても苦勞はなしの意歎
- (一〇)私が別に父に勤めたる譯でもなし
- (二)宰相上の方では俊隆女を何とも思はずとも

て、仲忠いで、その御琵琶持ておはせよ。たゞ今なむ参り來つる。今は、なにかは恥させ給ふらむ。やがてや参り侍るべき」と聞え給ふ。仲忠「御迎は、明日なむ侍るべかめる」など聞え給ふ。母君、いと恥かしく、あさましかりけるわざかな、然ばかり心恥かしけにおはする人の、いかに見給ひつらむ、と思す。御返りは、宰相上「承りぬ。只今自ら聞えさす」とて母屋の障子のもとにて對面し給へり。「今は世にあらむやうも思されで歎みにしを、いかに聞えさせ給へれば、ちかき程に」などまで宣ふらむと思ひ侍れば、聞えさせむ方なく、なほも何とも思ひ給へ侍らで、明暮もことに見給ひ入れざりしを、ほれなくしくなられたる人、残少くおほえ給ふ、さらにいと歎かしきことに宣へるを、今は後安くなむ」と聞え給へば、仲忠「それこそはいと理に侍るなれ。ことには、殊に聞ゆる事も侍らず。まことに、年頃覺束ながり聞え給ひつ。仲忠が母ものし給へど、いと心細く、ただ一人物せらるれば、あまた物せさせ給ひける御中に、何とも思されずとも、と

- (考異) (二)明日なむ侍るべかめる一明日なむ侍るべかんなる一明日となむ侍る
- (三)心一心ばへ
- (四)見給ひつらむ一見給へらむ
- (五)は一ナシ
- (八)思ひ一思う
- (一)給へど一給ふも

(語釋)
 (一)母の性質をさよ
 (五)あて宮
 (六)御心にもすこし歎
 (七)戀慕の情をもほのめ
 かしたりれど
 (九)いと便なき事」歎

(考異)
 (二)御心劣もやと思ふ給
 へる一御心劣るやと思ふ
 給ふる中に
 (三)聞えさせなむと一聞
 えさせむなど
 (四)めてたく一めてたう
 (八)べりれど一べりれど
 (二〇)一くだり一つに

りわきて思ひ聞えさせむ。睦ましく思さるべきものなり。いま近くても見給ひて
 む。古めかしく、いと心安く、御同胞などのやうに思されむに、いとよくなむ侍
 るべき」など聞え給へば、宰相上いと嬉しきことにも侍るべきを、近くては御心劣
 もやと思ふ給へる。ことにも、いと心苦しうてもものし給へば、「小き人は、添ひた
 る人も侍りなむ。餘所ながらも、今は頼み聞えさせなむ」と聞えさせ給へ」など
 宣ふ様の、いとめでたく、限なき人の御けはひにも通ひたれば、いとまめやかな
 る御心、すこし僻言も聞えつべけれど、有るまじく便なき事、と思ひかへし給ひ
 つ、然も聞え給はず。仲忠「いとなき事。時々はわたらせ給ふとも、此度は、いか
 でか渡らせ給はざらむ」宰相上「今それは此頃過してなむ」と聞え給へば、仲忠「いと
 あしき御事に侍るなり。かの御本意なく侍らむ」など聞え給ひておはしぬ。
 夕つけて、衣箱一よろひに、唐綾の翟麥のうちぎ、濃紫の織物のほそなが、三重が
 さねのはかま一くだり、若君の御料に、いと濃きうちぎ一かさね、薄き蘇枋の綾

(語釋)
 (二)「母君」は「伯母君」の
 誤なるべし

(二)宰相上の氣安き様
 と仲忠が心配するものと
 見ゆ
 (四)仲忠の歌の戀を含め
 るを答めたる也
 (五)御返事だけ頂戴すべ
 しとて

のうちぎ、櫻の織物の直衣、躑躅の織物のさしぬきなど入れ給ふ。女のはかまの
 腰に、あかき薄様に、
 仲忠人知れぬむすぶの神をしるべにていかどすべきとなけく下紐
 とて御文もなし。いと小き小舎人童「御返賜はらむ」といふ。宰相上いと恥かしく、
 あやしき有様を思しはかり給ふ事」と宣ふ程に、これを見つけて、あさましく覺
 え給へば御返も聞え給はず。母君、「いとあはれに忝く、何事も思すまじく、
 萬に、此の御心の斯うもてなし給ふにこそあれ。なほしるしばかりは宣へ」と切
 に宣へば、たゞ斯く、
 宰相上うちとけてうらもなくこそ頼みけれ思の外に見ゆる下紐
 様々にも見給へられて。
 など聞え給へり。童に、躑躅のこうちぎ、若君の御今やう色のうちぎ一重添へて
 かげ給へるに、使童「御返のかぎり」とて取らねば、強ひて取らすれば、歩み避り

〔語釋〕
 (一) 世の常にも「歎」
 (二) 宰相上が来られなげれば不都合なるべき由

て、お前の村薄の上にも懸けて走り出でぬ。「いとされて、くち惜き童かな」と言ふ。御返参らすとて、眞云々なむして、逃けて参りつる」と申さすれば、仲思いとをかしくしたり」と仰せられて、御袖一かさね賜はす。御文見たまひて、「さればこそ、悔しう、何せむに、世の常もこそ思ひ給へ、かよる氣色を見えぬらむ、と恥かしくおほえ給ふ。
 又の日、殿に参り給ひて、仲思昨日かしこにまうでて侍りき。いかゞ物し給ふ、見給はむとて、聞えしかば、自らはおはすまじけにこそ宣ふなりしか。度々、さらずば便なかるべき由聞えしかば、しかゞ宣ひしを、おはしましてなむよく侍るべき」と申し給へば、兼雅「怪しき事かな。などか然はあらむ。恐ろしげに、頭もなりにたらむ。容貌もめでたかりしが、あはれ今まで物し給ひける。琵琶は今の世に、さばかり弾きたる人はあらじはや」と宣へば、仲思「そよや。わか君こそ、しかゞ物し給ひしか。理にこそ侍るなれ」殿、兼雅「をかしき事かな。らうたく

〔考異〕
 (一) さらば—さらば—さらば
 (二) さらば—さらば—さらば
 (三) さらば—さらば—さらば
 (四) はや—をや
 (五) らうたく—らうたう

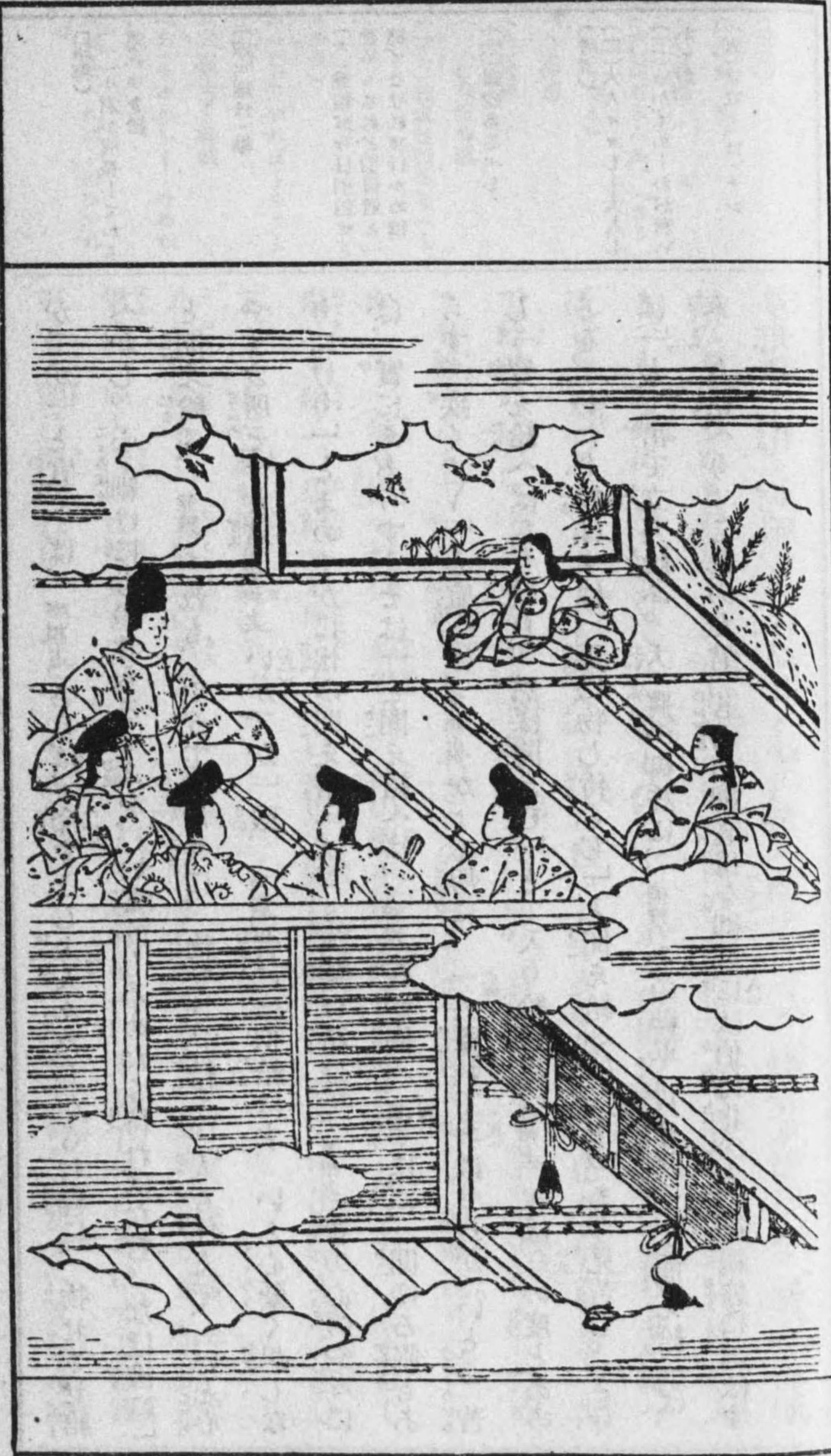
〔語釋〕
 (一) 兼雅を宰相上の所へ
 (二) 兼雅に懐かずして仲思を慕ふ
 (三) おとど—との
 (四) おはせめ—おもはせめ
 (五) 兼雅自ら行きて宰相上を三條に迎ふ。宰相上服の小君、兼雅に懐かずして仲思を慕ふ

して教へ給へるなめり。母君もいとよく弾きき」と宣ふ。かんのおとど、俊隆女「日暮れたらば、早うおはして、なほ一度にわたし奉り給へ。いでや、あやしく心憎き人、さまざまに集め給ひける程よりは、なまめかしくをかしくこそおはせめ。左のおとどは、いと愛敬づき、をかしくこそ見え給ふめれ」殿、兼雅「いでや、その大殿こそ、目につきて覺え給ふらむな。身の上めでたく、今めかしくおはしますを見奉り給ひて後こそ、己をも思ひおとして、かく恥のかぎり宣ひ出だせ」と宣へば、俊隆女「例の事よ。さりとて、病したる理なれば。口ふたけ」とて薰物などよくせさせ給ひてやり奉らせ給ふ。
 御車にておはしたり。昔見給ひしよりも、いみじうなりにけり。几帳などは、いと清けなり。たど入りに入り給へば、燈よき程にて、母屋に、いとなよよかなる桂に、柳の織物のうすき、織物かさねて著て居給へり。わか君は、いと清けに装束かして直衣のかぎり著給へり。御髪は臙すぎ給へり。さがりば、いと清けなり。

- (語釋)
- (三)兼雅を
- (四)小君を
- (五)小君を
- (六)宰相上が
- (七)兼雅が
- (八)我も行かねばならぬか

- (考異)
- (一)小くして「て」ナシ
- (二)きらやかーきよらーきよらか
- (九)何せむにかーなぞふにか

燈の下に立ち寄りありき給ふ。見給へば、おとな四五人ばかり、小くてをかしか
なる童などあり。いと目やすし。昔いときらやかなりし人の、いとめでたくてし
つらひ、掣取り給ひしを、思ひ出で給ふも、いみじう悲しうおほえ給ふ。兼雅「わか
君はや」と宣へば、大人しくつい居給へり。兼雅「此のわらは、その燈取り寄せよ」
と宣へば、持て参りたり。見奉り給へば、大將の兒なりし時、かくやありけむと、
美しげに恥かしき顔の笑み給ふは、けに愛敬いとはひやかなり。女君に、兼雅「い
と怪しく、またも見せ給はで、ひき隠し給ひてこそ」など年頃の物語など聞え
給へど、人のやうにも恨み聞え給はず、たゞいとおいらかに恥かしう、いらへ聞
え給へば、なかく宣ふべき事もなし。いと哀に昔思ひ出でられ給ふ。しばし打
臥し給ひて、兼雅「夜更けぬらむ。いざ給へ」と聞え給へば、宰相上「こよにもや、さら
ば」兼雅「さて参り來つるぞかし」と宣へば、宰相上「何か、心静に。かつぐ、然ば
早う」と聞え給へば、兼雅「怪しき事。さらば、何せむにか。また幼き一人をばい
(九)



樓の上(上)

(語釋) (一)小君が成長してから連れゆき給

(四)「理は」歟

(六)兼雅が今日引越せと勤めらるれど伯母君と一緒でなければ行かぬ積

(七)誤脱あるべし

(考異)

(二)大人々々しー大人し

(三)いかでかーわが君いかでか

(五)「は」は「ナシ

かでか」と宣へば、宰相上さらば、今すこし大人々々しからむ程に、物せさせ給へかし。心細けにものせらるる人を、いとうしろめたく侍ればなむ。なほ後に」と聞え給ふ、兼雅「それも、やがてもろ共に、物せさせ給へ。人も住まで、いと心やすき所ぞ」女君、宰相上「いかでか」殿、兼雅「昔には似給はず、いと心憂く思しなりにけり」とまめやかに恨み聞え給へば、うち笑ひ給ひて、宰相上「昔の心のやうには、實にえあらずこそは」と聞え給へば、兼雅「吾が佛理には、聞ゆる限もあらず。疾くく」と宣へば、宰相上「かよる所に、一人離れておはせむが、いと心苦しう覺え給へばなりけり。然ば聞えむ」とて入り給ひて、宰相上「なほこの度とあめるを、わたり給はずば、更に物し侍らじ」と聞え給へば、伯母「あな見苦し。さらば」とて出で立ち給ふ。大將の御許に、兼雅「その御車、只今賜へ」と聞え給へば、奉り給へり。これの女君、若君の御乳母を御車には伯母北の方、御親族におはする大輔の君、少將などいふ乗りぬ。次におとな三人、童二人乗りぬ。さるべき御

(語釋)

(三)女一宮

(四)兼雅

(六)誤あらんか、「さち一本「さち」

(八)仲忠

(九)兼雅

(一〇)兼雅の處

(一一)此處誤脱あるべし

(考異)

(一)ありつればーありしかば

(二)御方ー御前

(五)今めかしくー今めかしき

(七)給へればー給ひつれば

供十餘人して、いときら／＼しくてわたり給ひぬ。大將、仲忠「などか、曉がたにはなり侍りぬらむかし」と申し給へば、兼雅「いとうたて、渡らじとありつれば、若人も、もろ共に、とて強ひてなむ物しつる」とてかんの殿の御方へおはせむとし給へば、仲忠「早しづまりて人も寝入りて侍らむ」とてみな思ふやうにおろしおきて、出で給ひぬ。宮に、仲忠「あやしく夜更け侍りにけり、おとど、今めかしく古事あらためさせ給へるとて」女「何事ぞ」仲忠「さらの人なり」など聞え給ひて御殿籠りぬ。かくて、参り給へれば、若君の、此の殿をば「父こそ」とて、睦まじうまとはし奉り給ふ。居給へる所にも、いと近う睦れ居給へり。殿をば「殿」と聞え給ひて、ことに睦れ聞え給はず。小弓射給ふ日、大將殿の君たち、大殿へあまた参りたり。梨壺の宮の君、此の若君の、いと清けに装束きておはする。人々若君を「いと美しけにおはするは誰ぞ」と問ひ聞ゆれば、「おとどの子少く、さう／＼しとて物しためる」と聞え給

(語釋)
 (三)「なご」として「なるべし」
 (六)小君を
 (七)琵琶を請求して

(考異)
 (一)似給ふゆりーわたらせ給ふゆり
 (二)おはすめるーおはすめるは
 (四)大將殿「大將」ナシ
 (五)宮の君もかやうにこそー宮の君もわがやうにぞー宮の君にもさやうにこそ

へば、「かの御子か。いとかしこう似給ふゆり。宮の君はらうくじく、これはなまめかしくおはすめる」などと呼び奉り給へれば、おはしたり。御髪も、なかに長く清らなり。大將殿、宮に、仲思、参り給はむには、指貫著てこそ」と宣へど、宮も、女「宮の君もかやうにこそ」とて著せ奉り給はぬなりけり。案内も知らぬ人は、「大將の」つ御腹なめり」と聞ゆ。宮笙の笛、宮の君横笛、皆いとめでたく吹き給ふ。「此の君何かし給ふ」と聞え給へば、「琵琶ひき給ふ」と宣へば、「いとをかしき事かな」とて大殿の侍従大納言の御太郎、藤宰相の御弟四位の少將、大宮の御方に琵琶聞え給ひて、「これ」とて弾かせ奉り給へば、小君「人に抱かれでは弾き侍らず」と宣へば、「おはせく」とて抱き給ひて、弾かせ奉り給へば、いとになく面白くひき給ふ。笛にひきあはせて、三所あそび給ふ。人々、「いと珍らかにをかしき御有様どもなり。内裏などに御覽せさせばや。いみじき物の上手は、またも出で給ふべき所なめり」と感じあはれがり給ふ。大殿も、さ

(語釋)
 (一)兼雅の心
 (二)小君
 (四)兼雅が
 (六)北山の空洞の住居の時、事をいよなるべし

(考異)
 (三)あなれーあんなれ
 (五)見捨ててーうち見捨てて
 (七)心憂しとー心憂くぞ

まぐにうつくしう見給ふ。御遊の具によかめり、大將子すくなう物し給ふに、かたみに行末を思ひ後見るも善かりけりと思す。入り給ひて、兼雅「對の子を人々のをかしと言ひつる。あやしきは、大將見つけて侍りし、宮などにも睦れあそび給へるゆり。我をば親とも思はず。子は、誰とも言はで、つきたればこそらうたけれ」と宣へば、俊隆女「理にこそあなれ。小き人は、たど思ふ人に睦るよものなり。一日見奉りしかば、對の簀子にて、宮をいただき奉り給へりしに、宮の君「まろもく」とありしをいただき給ひしに、打見あけて立ち給へりしを、小き心地に見捨てておはせしかば、一人勾欄にながめてなむおはせし。などか、この君も、時は抱き奉り給はざらむ。すべて、かゝる御心のあればぞ、月を経しかど、物の思ひ出でもなくて、おはして、いみじき目の限見しぞかし。涙落ちぬべく、つらき氣色みえ給ひしか。大將は、宮をも誰をもわかず、さまぐにこそ思ひ聞えたれ。かの伯母君などの見給はど、心憂しと思ひ給ひなむ。人の歎負ひたまはず

〔語釋〕
 (一)誤あるべし
 (二)俊隆女の侍女の侍従といふ女
 (三)宰相上の侍女の少將といふ女
 (四)伯母君等のいふ也
 (五)「御心のし」の「衍文なるべし」
 (六)母俊隆女の
 (七)兼雅
 (八)小君が
 (九)宰相上を兼雅が迎へて己を迎へざるを
 (一〇)今「りうのひげ」といふ草
 (考異)
 (一)たとしへなく「し」ナシ
 (二)「こそ」こそは
 (三)「つとみてかうの」たぐみてかうの

普く情あり、世に久しくおはせばこそ、己なくとも、大將の御爲にも頼もしう善からめ。顔容貌の、さ思ひ給へらむに、物しく心も見ゆるもなし。いとたとしへなく思し給はむをこそ、人はうたてなむ見奉らめ」などうちくに聞え給ふ事を、かの御方の侍従の君、對の御方の少將の君とは、從姉妹どちらなれば、往きあひて語れば、伯母君も母君も、「嬉しき事」とよろこび給ふ。「大將の御心の有様かたち、よくおはするは、この御心ばへの斯うおはすればこそ有りけれ。この殿の御心は、いでや。心深からざらむ人は、人のいはで思ひたらむ心ばへなどこそ思ひ知り給はね。うべたど大將殿をのみ思ひ聞えたりけり」など宣ふ。かくて後、梅壺の更衣と聞えし、怨み聞え給ひて、山菅をつとみてかうの扇、薄様の中に入れ給ひて、梅壺うらやましおなじ麓の山すけもわきてぞ人はおもひかさぬる思ひ出づること多く。

〔語釋〕
 (一)女三宮付の女どもは
 (二)兼雅
 (三)俊隆女の方に
 (四)女三宮

〔考異〕
 (一)安からぬ世の中かな
 (二)安からず世の中あぢき
 (三)給ひて一給うて
 (四)よろしきに一よろし

など宣へば、御かへり、兼雅餘所ながらおもひかさぬる山菅をひとつにつらき例とやする目もたどくしく、今は覺え侍るを、なほ昔のやうに、近き程にやはものせさせ給はぬ。さて、後にむかへ奉り給ひて、東の二の對の、北の廊かけておはす。なかにも宮の御方の人々は、「安からぬ世の中かな。あはれ古を思ひかへせば、わが君かよる御住居をせさせ給はむとや思ひし。品にもよらずや」など言ふを、かの殿の人々聞きてまねび聞ゆれど、俊隆女「あなかしこ。ゆめ聞き入るな。下人は然ぞあなる」とていと清らにもてなさせ給へり。殿は、一月を、二十五日は此方に、いま五夜をば宮の御方、この對などには通ひ給ひて、晝も此方にのみおはするを、かんの殿、俊隆女「なほこれなむ、いと見苦しく見奉る。今は心しづかに、時々は行もしてあらむ。宮の思すらむこともあり。これよろしきに聞え給へ」と大將に聞え

(語釋)
 (一)兼雅が
 (二)仲忠が
 (三)背き給ひ「なるべし」
 (六)兼雅が俊隆女の處にのみ居るは
 (一一)外の女の許へ兼雅が通ふを俊隆女が不満に思はゞ遠慮もあるべけれど意歟

(考異)
 (四)給へるを取り給へるをなは取り
 (五)見給へるを見給ひつるを
 (七)十日一十夜
 (八)十日一十夜
 (九)給ふ人も給ふも給はむも
 (一〇)ものしたる事はまた一またものしたる事は

給へば、仲忠いとよう仰せられたり。爰にかくて、わが御儘にておはします。仲忠侍り。今は人とかく申すべきならず、聞えにくきを、宣はせむ序に、申し出でむ」と宣ふに、入りおはしたり。いとをかしと見奉り給へり。仲忠人々の、あるは世を背き給ふ、所々に幽にてもものし給へるを、取り申すまよに、目やすく斯くものせさせ給へるを、いと嬉しく見給へるを、一方にのみおはしますは、いとものしき様に侍り。此方に十日、宮の御方に十日、いま十日を三所におはしますさせむ」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、兼雅いとあやしく、果は有るまじき事をさへ物せらるよ。昔若かりし時こそ、さまよひありくも目やすく、見まほしく思ひ給ふ人もありけめ。今は身の覺えも花やかならず、腰も痛ければ、え歩くまじ。一所にもものしたる事はまたいとをかしう、いかど人も思ふらむ、とてこそあめれ。あるまじき事なり」と宣へば内侍のかみ、俊隆女「否や。御心さりとていかどなど思はばこそあらめ。人々もつれぐにながめ給ふらむ。さてうち通ひ給ひておはせば、

(語釋)
 (一)かく俊隆女一人を守り居りても手柄でもあるまじ
 (二)宰相上
 (三)兼雅が
 (七)梅壺
 (考異)
 (四)十五夜は一十八夜は一二十日をば
 (五)外は一外をば
 (六)などには一にも一に

よくなむあるべき。左のおとどは、宮、大殿、いとうるはしくこそ、十五夜づつおはしつよ、子どもいづれともなく思ひかしづき給へ。かくて添ひおはせむからに、かしこくやは有るべき。そが中にも、宮の御方は、院のとりわきて思ひ聞え給ひて、をりくも聞かせ給ふらむ、いと忝し。對の君などは、御心さまなどもあはれに見え給ふ人なめり。そればかりには、なほこゝに聞えむまよに、人よりは殊にもてなし給へ。大將も「伯母君の、泣くくよろこび給ふなる、おのれ一人して思ひ聞ゆるも、ゆよしくのみ覺ゆるに、心深からむ人には、思ひおかれ給ふらむぞ嬉しき。行末に行きあふ事もあるものなり」など切に聞え給へば、十五夜は此方に。その外は、宮の御方などには「など宣ふを、兼雅さばその程に、思ひくにおはせむ」と宣ふ。兼雅「更衣の方は、らうくじく、くせくしう物し給ふ。式部卿の君は、心おきなくて、乳母の物言なめし。對の君は、おいらかなれど心深ければこそ人々の御爲にも心安けれ。そればかりは、けに宣はむに隨はむ」など

仲忠、小君を携へて参内す。東宮小君を携へてあて宮の許に至る

〔語釋〕
(一) 仲忠の男の子

(二) 誤あるべし

(八) 東宮腹

〔考異〕

(三) 御装束し給ひびづら
結ひ給へれば―御装束は
し給ふびんづら結ひ給へ
るは

(四) 仕うまつれ―つかま
つれ

(五) 給へば―給ふ

(六) 宣はずれど―宣へど

(七) いて―いでて

宣ふ。

かくて、内裏東宮にも、若君見まほしうせさせ給ひて、度々宣へば、おのれは、若小君ゐて参らせよとて、参らせ奉り給ふ。かんの殿の御方にて御装束し給ひ、びづら結ひ給へれば、いま少しをかしけに、めでたくおはす。率てまゐり給へれば、内裏、東宮も一所におはしまして、「いと美しき人なりけり」と宣はす。有様らうたけにをかし。琵琶召して、「弾け」と宣はす。しばし御答もし給はねば大將、仲忠「なほ仕うまつれ。まだいと幼く侍り。大なるは、人に抱かれてなむ弾き侍る」と奏し給へば、女房たちあまたさし出でて見る。源中納言、遠「この聞きつるはこれか。いと美しかりける人を、今まで見奉らざりけるよ。この膝にを」と抱きて弾かせ給へば、少しばかり、いとになく弾きてさし置き給ふ。上も宮も、「やがて留めむ」と宣はずれど、仲忠「まだいと幼く侍りて」と奏し給ふ。中納言忍びやかに、遠いで、その宣ふ宮とて、かたじけなけれども、此の若君にはまさり給はじ。如

〔語釋〕

(三) 若宮を

(四) あて宮が

(五) ずは。一本「よく」又「人々」

(六) 「向き給へば」の意歟

(八) 誤あらんか。一本「まことはまことけさのたとひもあれば」

〔考異〕

(一) ちあらざめり―ちあらざりけり

(二) 仲忠ちが―ちナシ

(七) 給へば―給へれば

何に」と宣へば、仲忠「さらに、いと見苦しう。たゞ宮の御真似をして、さがなう心強く、なまめかしきけも侍らす。されば、宮にも、あからさまにも率て参れば、見給ふとて、「生れし時より心恐ろしきものと見き。大宮の同胞にはあらざめり。率て去ね」とぞ宣ふ。おとどはたゞ心にまかせて見給ふ。不用のものなり。此の君、仲忠らが教へむことも聞きつべし。手などもいと美しう書き、聲もいとをかしうぞ侍る」東宮、「藤壺の御方にいざ」と率ておはす。大將参り給ふ。内にたゞ呼びに呼び入れ給ひつ。几帳ばかりひき寄せておはす。いみじうつくしがり給ふ。大將孫王の君に、仲忠「いと幼き人参り給ひにけり。呼び入れ給へ」孫王の君、「いと美しきは、誰に奉らせ給ふにかあらむ」とて隠もあらせ給はざめれば大將、仲忠「あらじものを、くは、見給へかし」とてむき給へば人々笑ふなり。仲忠「まことはけさのたまひもあなれば、物のはじめにゆよしきを、いかでか」とて、仲忠「まかでさせむ」と宣へば、あて宮「あやしの事や」とて忍びやかに笑ひ給ふけしきも聞ゆ。

(語釋)
 (一)東宮
 (二)仲忠が
 (三)小君の様子
 (四)あまり東宮と違はぬ
 (五)小君が頂戴して
 (六)兼雅
 (七)人によりて等差を
 つけて贈れと宣へどの義
 歟

(考異)
 (一)と宣へば一とのみ宣
 へば
 (二)小君は一宮は
 (三)父こそ一はこそ
 (四)かくて一ナレ
 (五)二人は一人の

俊隆女、太宰大貳の贈
 物を人々に分つ。

仲忠「疾くく。と宣へば、孫王さのみやは。まことは、いと美しき御有様を、つ
 ねに参らせ給へ」とと宮もろ共に出で給へり。見くらべ奉らせ給ふに、うつく
 しけに、あてにけだかき事の、いとことの外にもあらぬを、子にひき連れて見む
 ぞ、面だたく覺え給ふ。銀、黄金のわらはの、相撲とりたる形を得給ひて、ま
 かで給ひぬ。

かの殿に、仲忠「云々なむ」と聞え給へば、いと嬉しとおほす。宮の君は、殿
 をば「父君」とてむつれ奉り給ふ、大將をば餘所に見奉り給ひて、「大將参り給
 ふめりや」など聞え給ひてことにさし離ち給ふ。小君は大將をば「父こそ」とつ
 け給ひて、いとようし奉り給へば、をかしがり美しがり奉り給ふ。

かくて大貳のほり来て、殿に銀の透箱二十、唐綾、沈のみねに螺鈿すりたる櫛な
 ど奉りたり。内侍のかみ、宮の御方に七つ、我が御方に四つ、御方々にも二つ三つ
 づつくばり奉らせ給ふ。殿は、人の御次第に宣へど、俊隆女「然べき事なれど、人は

(語釋)
 (一)とて奉り給ひつゝ歟
 (二)誤あるべし
 (三)末詳。一本「を」はの
 (四)俊隆女が宰相上に逢
 ひて

(考異)
 (一)ことを一ものを
 (二)給へば一給ふ

仲忠、大宮に琴を教ふ
 べき心構を女一宮に語
 る。母を訪ひて同じ事を
 語る。兼雅來合せて夫婦
 古を追懐す。

心こそ恥かしけれ」とて給ひつ。かれらの透箱一つにはからあや五疋、いま一つ
 には沈紫壇の櫛あるを、對の御方に奉らせ給ふとて、かの殿、
 俊隆女思ひやる心をつけの櫛ならばおほつかなさを嘆かざらまし
 とて奉り給へば、御返、

宰相上そのかみにふりにしことを改むるこれこそつけの小櫛とは見れ

おいのと思ふ給へらるよ。

と聞え給へり。さまざまに心にくく申しかはし給ふ。いと忍びて然べき折には、
 此の御方には對面し給ひて、かたみに心ふかう、哀に聞え契り給ふ。

大將は、院内裏、東宮など、おほつかなからぬ間に参り給ふ。また、動すれば召

され給へば、心地さへ世に心しづかなる折なくおほえ給ふ。宮に聞え給ふやう、

仲忠「身に思ふ事侍りし時、かくて侍りてば、心のどかに思ひなり侍りしを、大宮
 うまれ給ひて後は、いよく命も惜しう思ふ事あるまじと思ひ侍りしを、よく思

(語釋)
 (一)わが人に勝りたる心地すといふのが御分りなさらぬは犬宮を何とも思はれぬからの事
 (二)犬宮が物心つかば
 (三)「人々だにこそあれ」なるべし
 (四)仲忠は心静に犬宮に教ふる暇はあらじ

(考異)
 (一)何を「を」ナシ
 (二)心ナシ
 (三)事かんのあとどは「事となむ歌き侍るかんのあとどは」事となむ歌かしう侍るかんのあとどは
 (四)心ナシ

ひ侍れば、世の中に物思ふにこそなりぬべけれ。身に限りては、人にまさりたる心地こそし侍りつれ」宮、女「何を」と宣へば、仲忠「犬宮などをおろかにおほしたるにこそ侍るめれ。まだ這ひるざり給ひし時だに、此の琴を見たまひて、いと弾かまほしうし給ひき。此の年頃は、月日も疾く過ぎなむ、ものの心も知り給はば、心静にて然るべからむ所をつくりて、率て奉りて、習はし奉らむ、と夜は目をさまし、晝はこれを思ひめぐらし侍るに、本意のごと、静なるべし事の、難かべいをなむ、如何様にせまし、と思ひ侍る。來む年は七つになり給ふ。今までこれを教へ奉らぬ事。かんのあとどは、四つよりこそ弾き給ひけれ。御袴著の事急ぎ侍りしに、ことにもあらざりけり」となけき聞え給へば、女「けに、身にも思ふ事なり。然しもあらぬ人々にだにこそあれ。世の常ならむは、いとこそ効なかるべけれ。そこにこそ、え心静に物し給はざなれ。かんのあとどこそは」と宣へば、仲忠「獨り離れてもえおはせじ。又下れる手よりこそ習ひ給ふべけれ。昔

(語釋)
 (一)俊隆
 (二)俊隆

(考異)
 (一)時には一時にこそ
 (二)こそナシ
 (三)はのかに鳴くはの
 (四)思ひあはせし思ひあはれみ
 (五)弾き出づればこそひき侍れば

の朝臣は、七人の山人の中の劣りの手よりこそ、勝れたる極の手をば弾きとり給ひけれ。仲忠が弾き侍るを、院の上などはよしと仰せらるれど、かんのあとどを同じう宣へむとも覺えずこそ侍れ。かの弾き給ふ時には、治部卿いかに弾き給ひけむとこそ、昔戀しく思ひやられ侍れ。かんのあとどは、如何は。一所におはして、まづ仲忠が覺えむ限をこそは、習はし奉らめ。春は霞ほのかに鳴く鶯の聲、花のほひを思ひやり、夏のはじめ、ふかき夜の郭公の聲、曉空のけしき林の中を思ひやり、秋の時雨、夜の明かなる月、思ひくの虫の聲、風の音、色の紅葉の枝をわかると折のけしきを思ひ、冬の空さだめなき雲、鳥獸のけしき、晨の雪の庭をながめ、高き山の頂を思ひやり、したる池の下の水をあはれび、深き心たかき思ひも、諸の事を思ひあはせ、世の中の、すべて千種にありと見ゆるものの覺ゆるもの、又時に隨ひつよ、色衰へ、久しくなり、又むなしくなりぬるものを、心に思ひつとけて、琴の音に弾き添へむと、思ひをなして弾き

(語釋)
(一) 女一の彈くやうに

(二) 「など」衍文なるべし

(六) 誤あらんか「みはし」一本「みはら」

(考異)

(三) あしうぞーあしく

(四) 侍らずーあらず

(五) 出てーナレ

(七) べかりきかしーべかめりきかし

出づればこそ、琴の音も弾くに随ひてひどき、萬の折にはあひ侍れ。遊ばすやうに、たゞ弾きにやは弾くものならむ」と聞え給へば宮いと哀に、疎ならむ心を思ひて弾きならすことにはあらざりけりと、恥かしく聞き給ふ。かよりける事どもを、さても、などて一つをだに教へらるまじき。など、犬宮のをりこそ聞き習ふべかなれ」など宣へば、うち笑ひ給ひて、仲思今いとあしうぞ聞召してむを。まめやかに、此事を思ひ侍るに、獨寝たまはらまほしきを、如何にさても侍らむ、然るべき所を思ひめぐらし侍るに、こよはいと騒がしくて、然るべきにも侍らず。かんのおとどの京極を、然るべき様に、まかり出でて造らせむ。此の頃、伊賀守辭するを、「明年の院の御給を、今年申させ給へ」と女御殿の御前に聞えさせ給ひて、さるべき屋どもは、一歳つくらせて侍り。對などなむ造らすべきやう侍る」とて「みはしにや侍らむ」とてかんのおとどに参り給へり。御物語聞え給ふ。おとど、俊隆女「小君に千字文ならはし奉り給ひしかば、やがて一日に聞きうかべ給ふべかり



〔語釋〕
 (一)小君を
 (二)「ちとマの」の「の」の衍文なるべし
 (三)今までなぞ大宮に教(せ)ざりしぞ
 (四)母を請じて
 (五)「愛らしくも」の意歎一本「あやしく」
 (六)犬宮が

〔考異〕
 (一)には「は」は「ナシ」
 (二)までは「は」は「ナシ」
 (三)おもひひ「覺え」
 (四)人「い」と

きかし。大殿の誦じ給ふ御聲にはまさるなめり。いとおもしろう哀になむ」仲忠いとをかしう侍る事かな。犬宮の御事をこそ、何事にもまづは思ひ侍るに、妬く疾くもおとなしう教へなさせ給ひてけるかな」かんのおとどの、俊隆女「心憂くもわきまへ給へるかな。よくぞ、私のものにし給ひてける。いかど御琴は、今までは」と聞え給へば、仲忠いと弾かまほしう物し給ふを、いかどとのみ思ひ給ふる。公にも院にも、御氣色賜はりて、暇申して、よろづを棄てて靜にこもり侍りて、忝くとも、おはしませせて、おほつかなき所々も承りてとなむ、夜晝なけき思ひ給ふる」かんのおとど、俊隆女けに、その御事をなむ、こよにも思ひ給ふる。いとあいしくもなりにたるを、さらば、早う思し立てかし」仲忠いと恐ろしうも物(七)の心よう思ひ知りたる様におはすれば、いとよう弾かせ奉り給ひてむ」と宣ふ。忍びやかに聞え給ふやう、仲忠「この事おもひ侍るなむ、多くのこと侍る。かの宮は、いと人騒がしく、不用なり。此の殿も、さるべきにも侍らず。京極を、然

〔語釋〕
 (一)京極の舊邸
 (二)兼雅
 (三)仲忠の言ふに隨ふべし
 (四)故俊隆の追善
 (五)「こころあはし」は「こころ」の誤なるべし
 (六)兼雅存生中は出来がたかるべし
 (七)佛事なるべし
 (八)造り造らし
 (九)いかでとーいかでかと

るべき様に造りしつらはせ侍りて、となむ思ひ侍る。萬の處よりも、かの殿をなむ、然ものせむに本意のごと侍るべき。殿や便なしと宣はせむ。仲忠、これこそは一生の大なる大事に思ひ侍れ」かんのおとど、俊隆女「更なる御事なり。便なしとありとも、それにやは。たど宣はむにのみこそ。彼處はいと世に異なり。年頃思ふに、なほ聞きわたり、住まよほしう思ひ侍り。心のどかに昔を思ひ出でて、然べき尊きことをもせさせ、行も彼處にてせむとなむ思ひ侍る」など宣ふに、涙もとどめ難う落ち給ひぬ。大將も、かなしき事や思ひ出で給ふらむ、泣き給ふ。仲忠「よく思し仰せらるゝ事なり。仲忠も、世の中といふもの、常なきものなり、しづかに、時々は籠り侍りて、見給はまほしき法文、書どもも侍り、然るべき昔の御爲の事どももいかでと思ひ給ふるも、公「私こころぐの暇なく侍るになむ。しづかなる御行、殿の御世の間はせさせ給はじ。尊きことはしも、思ふやう侍り、犬宮の、思ふやうに物し給はじ、さやうの折にも、猶かくてこそは御覽せめ。い

(語釋)
(二)女三宮、「御事」は「御方」の誤なるべし

(三)「思ひ出でつるなり」歎

(四)自分が俊隆女を棄て置きしを思出さるべければ也

(五)兼雅の關係なき時分にも

(考異)
(一)思ひ一思ふ

かで、世にあらまほしく珍らかなる事を御覽せさせむ、となむ思ひ給ふる」など
哀なることども聞え給ふ程に殿、兼雅前おふ聲して、久しくなりぬるは、こと
にもものせらるよにこそありけれ」とて、御子いただき奉り給へり。宮の君、「まろ
も」と聞え給へば、宮をば、肩にかけ奉り給ひて、いま一所をば、たどにかき
抱きておはす。若君もおはしたり。いづれとなく、様々に清らに美しけにおはす
る、うつくしう見奉り給ふ。かんのおとども、大將の御氣色も、泣き給へりけ
るを、兼雅など例ならぬ様に見え給ふ。もし、宮の御事、對などの人々の中に、便
なき事言ふやあらむ」と、大將思すらむ事恥かしくて宣ふ。かんの殿、いとよう笑
み給ひて、俊隆女「あな物狂ほし。京極つくらむとあるにつけて、哀なる事思ひ出づ
るなり」殿、兼雅「それこそは、思し出でむにいと苦しけれ」とまめやかに宣へば、
俊隆女「怪しく、それより前にも、いみじう哀なる事どもは無くやは」と聞え給へば、
兼雅「そよ。それにつけて、物思はせ奉りけむを思ふに、いと苦しうなむ。いかで、

(語釋)
(三)宰相上の方

(四)兼雅夫婦の贈答の歌

(考異)
(一)今めかしき—いまはしき

(二)あはれに覺え給ひて—や—哀とおほえ給ひて—や—哀におほえ給ひて—いとしく—あはれにおほえ給ひて

昔の世の中の事をかけじ」と宣へば、俊隆女「たど、今めかしきことの限もおほえ
給ふなるかな」とて、斯く書きつけて居給へり。
俊隆女いにしへのちどやちぐさの物思ひを今もかなしといかど忍ばむ
と書き給ふにも涙落ち給ふを、殿もあはれに覺え給ひて、兼雅「いでや、
兼雅ちぐさには涙ぞ露とむすびけむかよるこの世に思遂けなむ
おろかなる御守か。
と書きつけて見せ奉り給ふ。大將、これを取り給ひて、出で給ふまよに、對に
おはして、仲思「久しく参らず」と聞え給ふ。御裾まるらせ給ひて、るざり出で給
へり。宰相上「けに、覺束なき程になり侍りにけるかな。いとうれしく宣はするに、
萬の事みな慰まれ侍りてなむ、明け暮らし侍る」と聞え給へば、仲思「あやしき故
郷の侍りつる、ついでに、今めかしき御中に宣へる事」とて、ありつる物御懐
より引き出でて見せ奉り給へば、いと哀におほえ給ひて、かたはらに、

(語釋)
(二)女一宮

(三)犬宮の

①犬宮の美くしき。仲忠の秘藏。

(考異)
(一)如何にぞー「ぞ」ナシ

(四)いみじうーいみじき
(五)斯くはえーかくばかりにて

宰相上故郷はいづくともなく忍草しけき涙の露ぞこほるよ
とてさし出で給へれば、見給ひしもけに如何にぞと、哀におほえ給へば、御筆の
おろしにて、

仲忠住み来しも見しもかなしき故郷を玉のうてなになさばなりなむ
など聞え給ひて出で給ひぬ。

大將は、御徳もいといかめしう、大殿に次ぎ奉りては、この殿を、天下世の人
もかしこう頼み奉り、参り集ひ、何事も物宜へなど思へり。一の宮は、犬宮と
雛遊し給ふ。御かたち日々に光り勝るやうにおはす。いみじう腹立ち、恐ろし
きものの心にも、見奉らば萬の事わすれて笑まれぬべし。あて宮も、今のほど

斯くはえおはせざりけむと、思ひ竝ぶべき様ならず見え給ふ。御乳母五人、宮の
君、源氏の君と、御乳主。乳母子六人、おなじ程にて、長五尺なる裳を、結び籠
めに著せ給ひて、御遊の具にてさふらはせ給ふ。これより外の人々には、見せ奉

(語釋)
(三)仲忠が
(六)藏開の時の事
(八)治部卿...は勝れ
たるなり」は傍註の撰入
せるなるべし。一本「うつ
ぼの巻に見えたり其の後
大辨」なし
(九)「いひ」は「いと」歟

②仲忠京極の舊邸に大宮
に琴を教ふべき樓を造
る。人々の噂。

(考異)
(一)給はず祖父一給はず
た二宮ばかり女御殿と
は見奉り給ふ
(二)かくて一ナシ
(四)木草一草木
(五)山なる一山中
(七)一歳はあはよそに一
歳はいたくもはよそに
(一〇)ごろ一ナシ

り給はず。祖父大臣、ゆかしがり聞え給へど、更に見せ奉り給はず。公も、か
の讀みさし給ふ文聞かまほしうし給へど、とかう免れ申し給ひて、おほろけなら
で参りにくくし給ふ。

かくて京極におはして、靜に見めぐらし歩き給ふに、世の中にありとある木草、
花紅葉、數をつくしてあり。唐土にもありけるものの、實をかしく、花紅葉めづ
らかにする木草どもの種をさへ、植ゑおき給へりけるも、山なる所々に、いとお

もしろく、何とも人知らぬ、生ひたり。一歳は、おほよそにこそ面白しと見給ひ
しか、のどかに今見給ふに、かよる所なし。年経たる巖の、いろいろの苔生ひ様
もいとをかしう珍らかなるを、立て置かれたりける。さらに取り動し直すべきに

もあらざりけりと見給ふ。治部卿は、うつほの巻に見えたり。其の後大辨滋野の
親王の掣なりしかば、この家もと名高き宮とて、今の世のおもしろき所にはいひ
勝れたるなり。この三月十餘日ごろより造るべき由を、修理頭、宮の乳母の同胞

- (一) 未詳。一本「かきのま」
- (四) 格子敷
- (五) 仲忠は
- (一) 「側よりは」の「は」衍文歟

- (考異)
- (二) べかめりーべかんめり
- (三) ならべてーならびて
- (六) えせじーよせじ
- (七) 中にーなにがし
- (八) 方分きてーかたはなる事なく
- (九) 仰せかきせ給ふー仰せ給ふー宣はせ給ふ
- (一〇) 長高き繁ければー長の高きをそれよりは南なる木し繁ければ

なるにおほせ給ふ。北の對、西、東の對、ことにうるはしくよかりけり。四面にかきのくに、白き壁塗らすべかめり。この西の對の南の端に、坤の方かけて、昔の墓ありける迹のまよに念誦堂立てたり。南の山の花の木どもの中に、二つの樓、長よき程に、こちたからぬ程に、たちまちに造るべし。西、東にならべて、樓の二つの中に、いと高き反橋をして、北、南には、かうしかくべし。それに、我は居給はむとす。仲忠「これ造らむには、なべての工はえせじ。修理職の中に、勝れたらむもの二十人を擇りて、方分きて、心殊に造らすべきなり」とて、畫師召して、造るべきやう仰せかよせ給ふ。東の對の南の端には、廣き池流れ入りたり。その上に、釣殿立てられたり。その水のさま洲濱のやうにて、御前の南には中島あり。それに、樓は建つべきなり。「御殿の長高けれども、外よりは南なる木ども繁ければ、透きて僅に見ゆべし。西、東の側よりは見えたらむは、柳の木どもの中より、木高くおもしろからむこと限なからむ」など人々興じ申す。樓の勾欄な



樓の上(上)

(語釋)
(一)造作

(七)女一宮に仕ふる宮の君

(八)孫王君があて宮に

(考異)
(二)あしがねしるかね

(三)黄金一ナシ

(四)給ひ給ひて

(五)給ひて給うて

(六)あるべからむあべからむ

ど、あらはなるうち造りなどには、かの開け給ひし御倉に置かれたりける、蘇枋、紫檀をもちて造らせ給ふ。おろしがねには、銀、黄金に塗り隠をす。櫃子すべき所には、白く、青く、黄なる木の沈をもちて、いろくくに造らせ給ふ。さるべき所々には、銀、黄金の筋やりたり。まづ門さして、大將殿おはし給ひて、御覽じて造らせ給ふ。中に勝れたる上手、いどみかはして、有り難うめでたう造る。此の事を内裏、院にも聞かせ給ひ、殿ばら聞き給ひて、「珍らかにをかしき事なり」とて、涼の中納言、行政の中將、これかれ行きあひ給ひて、「いかで見む。あやしう、絶えず珍らかなる事出で来る所にてこそあれ。定めて有る様あるべからむ」とゆかしがり給ふ。藤壺の方の孫王の君の同胞の四の君、犬宮の御方の宮の君といふに、物詣に行きあひて、宮の君殿の、犬宮に琴教へ奉り給ふべき事なけき給ひし有様、ほのかに聞きしは、少々の琴の音聞かむよりもめでたかりしものかな。「今まで教へ奉らせ給はぬこと」とてぞ歎かせ給ふや」など語りけるを聞えけれ

(語釋)

(五)仲忠の手を傳習し置きたらば

(七)あて宮の機嫌あしく

(考異)

(一)上わたらせ給へり
わらはせ給ひて

(二)なりぬるを一なりに

(三)給はめ給ふらめ

(四)犬宮のうつし傳へたらむは
犬宮にうつし傳へたらむは
犬宮にのこし傳へたらむは

(六)つけて一つけて

新築の樓の結構。

ば、上わたらせ給へり。あて宮、「一の宮何事を思すらむ。この造りのよしる樓は、いみじうおもしろきことあるべかなり。内侍のかみもろ共にむかへて、犬宮に琴教へむを、一の宮聞き給はむに、世にさる事はまたあらじを。年頃聞かまほしうし給へど、こよに聞かせずなりぬるを、惜む手を、かの折にこそは、残なく聞き給はめ。羨ましくこそあれ。よろづの事よりは、面白きことを、明暮聞きてあらむことより外の事あらじ」と宣ふ御氣色むづかしければ、上にも、けに、いみじう有りがたき事ならむかしと思せど、物宣はで、今上、犬宮のうつし傳へたらむは、東宮の御世に、さりととも飽くまで聞き給ひてむ。こと様にはたあらじ。心のどかに物思ふこそよけれ。此の大將の事につけてこそ、度々氣色あしう苦しけれ。いたう腹立ち給はぬさきに」とてわたらせ給ひぬ。かくて、樓にのほり給ふべき程の吳橋は、いろくくの木をませくくに造りて、下より流るゝ水は涼しく見ゆべく造る。樓の天井には鏡がた、雲のかたを織りたる高

- (語釋)
- (三)も座所したりし敷
- (四)帳盤の中の床
- (一〇)此處設殿あらんか
- (一一)「給よ」なるべし

- (考異)
- (一)張らせさせ一張らさせ
- (二)薄らかなるを一筋うちたるを
- (五)手づから一ころにて
- (六)天井には三尺の淺香を一天井に三尺のからかみを
- (七)四方に薰りわたれり
- (八)たる一たり
- (九)言ひ一ナシ
- (一二)聞きつぐ一聞きつ

麗錦を張りたり。板敷にも、錦を張らせさせ給ふ。わが御座所には、たゞ唐綾の薄らかなるを、天井にも、張りたる板にも敷かせ給ふ。西の樓にかんのおとどの御座所、東の樓には、犬宮の御座所なり。溜床をのみぞ、犬宮の御料は、さよやかにせさせ給へる。その溜床には、紫檀、淺香、白檀、蘇枋をさして、羅鈿すり、珠入れたり。三尺の屏風四帖、唐綾に唐土の人の畫かきたりけるを、手づから大將の張らせ給ひて、一雙づつ、二の樓の溜床の後に立てたり。樓の天井には三尺の淺香を、かんのおとどの御にも、これにもかけ給へり。いといみじき香の匂は、四方に薰りわたれり。此のしつらひ、細なる有様、造りはてたる。照り輝き、珍らかなるを、工匠、造物所の者ども、「また斯かる事あらじ」と言ひ思ふ。大將は、しばしにても、思ふやうにて珍らかなる様にて、かんのおとどをわたし奉りて、見奉るべきも、犬宮のし給ふと、いとど美しく、すぐろにてはいかで見ましと、思ひ奉り給ひて、此の事を聞きつぐ人々ふかき心を知らぬは、「いか

- (語釋)
- (三)朱雀院なるべし
- (八)相模節會の時に俊隆女の琴を

仲忠、朱雀院及び嵯峨院に在る。嵯峨院、俊隆女の琴を聞きに京極の邸に御幸あるべき事を約す。

- (考異)
- (一)「し給よべきし給へる
- (二)人々一人
- (四)犬こそ一犬宮
- (五)べかなり一べきなり
- (六)かはし一はナシ
- (七)厭なき事にはあなれ
- いとびんなき事にはあなれ

なる事し給ふべきならむ」とゆかしがり給はぬなし。一二町を経て行く人々の、此の樓の錦、綾の、許多の年月、さまざまの香どもの香にしみたる。風吹くたびごとに芳しきをめで怪しむ。大將、院に参り給へるに、朱雀古き所、珍らかなる様に、樓など造るべかなるは、如何なる事あるぞ。男ども、「いとをかし」などところ言ふめれ」と宣はすれば、仲忠「何でふことも侍らず。犬こそ、しづかなる所に侍れば、彼處にて琴習ひ給ふべかなり。内侍のかみ、「いまはやうく身あつしく侍るに、此の手傳へ留めむ事、今は誰にかは」と侍るを、昔のやうにも侍らざめれば、仲忠、おほやけに暇賜はりて、心しづかにて物し侍らむ」と奏し給へば、いと御氣色よろしくて、朱雀「けに然るべき事なり。それこそ厭なき事にはあなれ。相撲にいとつかに聞きて、えまた聞かずなりにしこそ、いとくち惜しけれ。はじめには、うたて心あわたしき様ならむ。かならず、かの末つかたに、行きて聞かむ。思ひのやうに教へら

〔語釋〕

- (三) 仲忠の心
- (五) 侍りてむ歎
- (六) 年ふかく参りしは「年若く思ひ入り」歎
- (七) 誤あるべし
- (八) 犬宮

- 〔考異〕
- (一) いと一ナレ
- (二) こかむの事おほえて一ころむの事もほくて
- (四) 給ふに一給へば
- (九) 行幸一みゆき

しを、今ほのかに思ひ出づるに、いと哀にゆかしき所になむあるを、如何なる業をせらるべきぞ、然るべき事あらばこかむの事おほえて、交らまほしくなむある」と仰せらるゝを、常に古のこと思ふにも聞くにも、哀にのみ物おほえ給ふに、^(四) 覺束なかりつる事も、明らかに宣はするに、面白う忝うおほえ給ひて、仲忠あなかしこ、御念佛にもなどかは、必ず参り侍りて。昔がたは、年ふかく参り侍らで、思ひ給へ憚りしを、今は快く、何かの事のをりにも、^(六) 仰言のまよにこそ、背かずは侍らむと思ひ給ふるに、仲忠こそはへだてあらためられめと思ひ給ふるうちに内侍のかみ本意ありて、今ほかの所には侍らむ。ついでに、一の宮の若君の、今はおよすけて、琴弾かまほしうし給ふに、教へさせ侍らむとてなむ、大方にては、静ならず侍れば、すこし離れて高き様なるもの建てさせ侍るを、然こ^(八) とくしく人の奏するにや侍らむ」院 大におどろき興せさせ給ひて、^(九) 嵯峨行幸よりは、それこそ天下に面白きことはあなれ。朱雀院は、内裏にても、相撲のをり

〔語釋〕

- (一) 琴の
- (二) 俊隆を遣唐使にやりし譯なるに
- (三) 俊隆の恨を
- (四) 餘命幾許もなき身に
- (五) 俊隆女に

も聴き給ひけり。俊隆朝臣の、唐土よりのほりて、琴を奉りしに、その音、例の琴にも似ず、響よくおどろしくかりしかば、弾きとどめてともせしにも肯かず、聞かまほしかりしかども聴かせず、斯かることなる事を好みし間に、「文の道をばさる方にて、この方の師にせむ。女宮たちにも教へ奉られよ」と度々言はせしにも肯かで、かの内侍のかみを、父母のかなしがる人にて、限なく勞はしう、またなきものに思ふと聞きて、心もありしかば、女方よりも度々ものする事ありしにも、いと心強う、心深かりし人にて、公を恨み、世の中を知らでなむ、身をも心づから沈めてし。その折の大臣どもの、「この國の爲の、限なき面目を弘めむ」と言ひ出だし立てし事を、此處には惜しむ思ひしかひなく、我一人に怨を留められしになむ、今に飽かずあはれに思ふ。「この御世にだに、かの勘事を、今はかく残なき身に許されなば、如何に嬉しからむ、となむものしつる」とかならず傳へられよ。それを聞かむには、^(五) 琴の聲を、あくまで弾きてきかせ給はどこそ

(語釋)

(一)母が

(二)嵯峨院が京極へ御幸あるべき事

(考異)

(三)あるべからずーあるべきならず

(四)未詳

(五)父君ー父官

(六)兵衛などー兵衛かれと

●仲忠樓上にて琴を教ふべき由を犬宮に告ぐ

は、けにと心安く覺えめ」大將、仲忠、昔の事は、委しうもえ知り給へず。仰せごとは、いとよく物し侍らむ。今はほれぐしうなりて侍れども、そのうちにも参りて、いとよく聞召させ侍りなむ」院、うち笑ませ給ひて、嵯峨「否。それはえあるまじき事なり。公私となくなれば、かの兒に教へはてられむ末つ方なむ、いと聞かまほしき」などさまぐに、古の哀なる事も、いさよかほけくしからず仰せらる。おはしまさむこと、免あるべからず宣はす。院のうちしつらひておはします。年高うならせ給へる様ならず、いと清らにめでたし。月の十五日には、僧あまた召して、御念佛、殿上人、上達部あまたして、それに堪へたる人しては、さうがうせしめ給ふ。院のうち、儀式いとなし。かくてまかで給ひぬ。

犬宮の御方には、同じ母屋の西に、けに小き几帳立てて、しつらひ給へり。小き人、さよやかなる碁盤にて、碁うち居たり。御手の、綾のひとへの黒きよりさし出で給へる、いと美しけにおはす。父君、仲忠、兵衛など、犬宮といかどうち給へる」とて

(語釋)

(四)仲忠が

(五)女一宮

(六)誤あらんか

(考異)
 (一)これら見つけてーこれら見つけて
 (二)いふがひーいひがひ
 (三)美しとーうれしと

見給へば、恥ぢ給ひてうち給はず。これら見つけて走れば、「いといふがひなき御供人かな。裳著たる足音にはあらずや」と宣へば、大人ども「けに」とて笑ふ。大將は、犬宮に聞え給ふ、仲忠「彈かまほしくし給ふ琴習はい奉らむ」と宣ふよりいと嬉しとおほして笑み給へり。いと花やかに、見まほしう、愛敬こほるばかりにておはするを、いと美しと見奉り給ふ。仲忠「琴習はせ給はど、宮には聴かせ奉らでなむ習ひ給ふべき。いと面白うをかしき處に率て奉りて、かんのおとどはおはしなむや」と宣へば、犬宮「さりとも、宮おはせではいかでか」と宣へば、仲忠「いとくち惜しく。さては不用に侍なり。人に聞かせで、仲忠、かんのおとどなむ、人に教へ侍る。しばし念じ給ひて、おはしませ。さてよく弾き取り給ひてむ程に、宮はおはしなむ」と聞え給へば、犬宮「さらばよかりなむ。なとて宮には隠し給ふぞ」仲忠「みな人の聞くにも弾き給ふは、この侍る琴をなむ、さは弾き給ふ。これは異なり。人に聞かせつれば、聲もせず、みならず侍り。宮も二の宮もおはせぬ所

(語釋)
 (二)犬宮が氣に入りの乳
 (五)仲忠の心、女一が犬宮を寵愛せらるるに
 (六)子どもの方は馳されてもあるべけれど
 (九)前に「見つけて走れば」とありし童ども也
 (一)女一宮に語る也
 (考異)
 (一)ちやはは—ちやははは—ちくはは
 (三)久しくや宮は—久しくやは宮
 (四)が程—ナン
 (七)宣はむずらむ—宣はナラむ
 (八)いづら—いづこにや
 (一〇)暮方—くれ方
 (一一)さふらはて参りて—さふらひて
 (一三)物仰せ—物を仰せ

なり。いと面白くなむ侍る」と聞え給へば、犬宮「さてちやはは」と宣ふは、中に思す御乳母なりけり。仲忠「それは近う候ひなむ」犬宮「さば、宮、羨ましと宣はむな」仲忠「されど、聲きかぬ程にこそは。侍りて、御乳ほしうおはしまさむ程は、ふとおはしまさせてむ」犬宮「さてなほ久しくや、宮は見奉らざらむずる」仲忠「などてか。たどしはしが程なり」と聞え給ふにもいと哀に、まつはし奉り給へるに、兒におはするは、こしらへてもおはしなむ。宮いかに思し宣はむずらむ、といとほしけれど、然るべき事ならねばと思す。仲忠「御前に乳母たちさふらひ給ふや。いづら、この駒競の音しつる人々も参れ」とておはしぬ。暮方になりけり。

仲忠「朱雀院に久しくさふらはで参りて、まかでつるまよに、嵯峨院に召ありつれば、参りて、今まで侍りつるを、いと恐ろしう、御年の程よりはさかしう物仰せらるよ君にこそおはしませ。此の院の御前にさふらふは、恐ろしう、萬に宣ふ事

(語釋)
 (四)未詳、畏あらんか
 (五)當方より御尋ね申さんと
 (六)同じ都に住む事となりては

のらうくじく愛敬つき、いかなる様をか御覽じつけられむ、とこそ思ひ侍れ。まことや 此の樓作らせ侍る事を、今よりはいとことごとくしう聞召しつゝ尋ね問はせ給ふに苦しくなむ。御幸あるべく仰せられつる。本意なく騒がしくやあらむ。果て方になどは、面白き事はあらむかし」など聞え給ふほどに、涼の中納言おはして、遠久しく對面の侍らねば、参り來たる。嵯峨院に参りて、まかで侍るなり」と聞え給へば、仲忠「あな苦し。何事ならむ。院の、琴を興せさせ給へば、來給へるなり」と宣ひて、仲忠「そのことのはひにやあらむ」とて、仲忠「それへだにこそ参り侍らめ、と思ふ給へれ。たど今かく侍り」とて、直衣著かへ給ひて、西の對と渡殿の南の間にて、對面し給へり。涼一所にては、覺束なからず承りなむ、とこそ思ひ給へしを、本意もみな違ひにけり。いにしへ契り聞え侍りし事どもは、皆ぞ思し忘れたりける。遙なる程に住み侍りし折にも、とりわきて、いかで對面もがな、と思ひ給へしに、たまくの對面の有りがたくて侍りしかば、極

(語釋)
(三)我と同じ都に

(考異)
(一)心安く心安き
(二)給ふを給ふと
(四)一所に思ひの一所に
あらず思ひの一所に
よくもあらず思ひの
(五)思ひ一思う
(六)殿一ナレ
(七)吹上の吹上が

なくこそ嬉しく思ふ給へしか。何時しかも、一所にて、思ふやうに聞え承りて
心安く遊をも、とこそ思ひ給へしか」など聞え給ひて、遠先は、いみじき大事の
事を思すなるこそ。涼には隠し給ふを思ふ給へれば、如何つらしと思ひ聞えぬ」
大將、仲思いと怪しく。けに一所に思ひの外の住居にてさふらはせ給ふ心慰め
には、けに明暮きこえさせ承らむを、慰めにせむ、となむかねて思ひ給へしを、
何の、いふらむやうに、心静にも侍らすなむ。昔の心ばへ、たと思すらむ心のや
うに。今は、いま少し睦まじうなむ、思ひ聞えさする」中納言、遠いでや、かの
京極殿を、世の中ゆすりて、珍らかなる様に樓などつくらせ給ふと承るを、う
とき人々に、定めて有るやうあらむと物し侍り。行政の中將、左兵衛督なども
のせられしと侍りしも著く、になく面白き事侍るめるを、などか、昔の御心ばへ
の名残あらば、けしきばかりも聞かせ給はざらむ」とて恨み聞え給へば、大將殿、
仲思紀伊國の吹上のはまの濱へにて契りしかひはなぎさなるかは



樓の上(上)

中納言、涼いでや、

(語釋)
(一)これかくしの詞

(二)「なごり」は「なごり」
歟

(七)所々にて「歟」一本
心々にとて

(考異)

(二)聞えむ…なごり—聞
ゆらむともおぼえずなり
て侍るなごり

(四)心安く行をもと—心
安くもと—心安くと

(五)白き—白

(六)ころちぎ者—ころち
ぎを者

涼吹上の濱への契りなごりなくかひあることは見せじとぞ聞く

御物がくし、なほあらしの御詞などは、琴などの音よりも勝れてこそおはすれ。

萬の事、いかで、かくしもみな具し給ひけむ」と笑ひ給へば、大將もいと快く

うち笑ひ給ひて、仲思「何事をかは隠し聞えむ。物覚えすなりにて侍るなごり、京

極は、然御耳とまるべくも侍らぬものを。高き物おもしろくば、朱雀門、旗鋒な

どを、いかに絶えず見る人侍らまし。静なる處なれば、時々もまかり移りて、心

安く行をもと思ふ給ふるなり」など聞え給ふ程に、入日のいと赤くさし入りた

るに、大宮白き羅のほそながに、二藍のこうちぎ著給ひて、長は、三尺の几帳に

足らぬ程なり、御髪は、絲をよりかけたる様にて、細脛にはづれたり、扇の小ささ

さけ給ひて、兒、大人ども三四人添ひてあれど所々にとて、簾のもとに、何心な

く立ち給へるに、風の簾を吹きあけたる、立てたる几帳の側より、傍顔の透き

て見え給へる容態、顔いと花やかに、美しげに、あなめでたのものと見え給ふを、

え念じ給はで、笑みて見遣り給ふに、大將あやしと見おこせ給ふ。あらはなれ

ば、仲思「いと不便なりや」とて立ち給へば、萬何の不便なるぞ。若き時は、うち

はえて、ほのかに人に見え給へるこそ美しけれ。世の中のよしり給ふ人も、む

けに見ぬは、心地むづかしき時は、いでや、如何ありけむと見ゆるものなり。い

みじう、世に物思出で来ぬべき世なめり」とて飽かず美しくおほえ給ふ。仲思「ま

たこそ見え給ふ」とて入り給ひて、御乳母たちに、仲思「いとあさましう、云々な

む有りつる。いみじきわざなり。近うあらぬわざ、いと悪し」と宣へば、乳母「蝶

の、御簾のもとに飛び侍りつるを、この幼き人々の、われも捕らむくと騒ぎ侍

りつるを、御覽じつるならむ」と申せば、仲思「いと、此おとなども、いはけなし

や」と出て給ひぬ。仲思「かた思ひはとこそ言ひ侍るなれ。くち惜しきわざかな」

と宣へば、涼「まめやかに、いとみじう、美しうおはしつる様かな。何を思すらむ。

(語釋)

(一)涼が

(三)汝等が大宮の側につ
きて居らぬが悪い

(四)「た」は「た」歟

(五)引歌未考

(考異)
(二)ころちはえて—ころちは
づれて

(六)侍る—る「ナシ

〔語釋〕
(一)涼の子をいふ

彼處におはする兒は、この御同じ程ぞかし。いと醜く物し給ふに、思ひわづらひ侍りぬるものを」など宣ふ。仲忠「氣色をかしけなるべし。内侍のすけ知り聞ゆめりき」とてゆかしう、如何ならむとおぼえ給ふべし。中納言殿、大將殿に宣ふ、涼「あが君く、かの御手の限をつくして、教へ給ふらむは、さる事はありなむや。人に實になべて聽かせ給はじ。たゞ、片時の程、いと聽き侍らまほしきを、必ず聽かせ給へ」と慫に聞え給へば、仲忠「あが佛、隠し聞えさせず。いと面白き事は、あるべきことにも侍らず。兩方の院の上も、怪しう聞召して、仰せられつる。この侍る所は、いと騒しく、宮たちもあわたしうおはしまして、人繁けれど、たゞ、犬宮一人を、かしこにわたして、仲忠が教へ奉るべきなり。内侍のみも、身もあつしう物し給ふうちに、あわたしき人の扱などせられて聞ゆとも、心靜にも物し給はじ。犬宮も、いといはけなくおはすれば、はかぐしくえやは習ひ給はざらむ。今は、昔のやうに、聞かまほしき様も、え彈きなされずや」

〔考異〕
(二)あが佛―あが君佛

(三)にも―も」ナシ

(四)「えや」ナシ

〔語釋〕
(一)仲忠が樓へ移ること

(二)誓いま宮

(三)巨勢氏曰、「少しの事は」にて多少の風情はあはるもの也との意なるべし

〔考異〕
(一)思ひ―思ふ

(四)こそ―こそは

涼「さて、何時かわたり給ふべき」仲忠「相撲のこと、國々騒がしき事ありて、今年はあるまじとか聞き侍りつる。もし然あらば、立たむ月の間にやとなむ思ひ給ふる」近く侍るなるは、さば必ずく」と聞え給ひてわたり給ひぬ。
中納言、御方に、遠いと美しきものをも見侍るかな。大將の御方にまうでたりつるに、犬宮、しかぐなむ。天下のあて宮、さらに今の程よりはかくものし給はざりけむ。すべて、斯ばかりの容貌は、此の世に又はあらじとなむ見えたる。いとをかしかりける君かな」今宮「あさましく、今に見せ給はぬこそ。いかどもものし給ふ」遠いで、更にめでたう、聞えむ方もなしや。大人の世には、用意などしてもてなしすれば、少しのことあり。これは、いと美しくこそおはしけれ。髪の様など、まだいと幼けなる顔の、けだかく美しけなるに、髪をつやくとよりかけたる様にて、懸かりたり。たゞ兒にかづらをうち懸けたる様にて、何心もなく、蝶にやありつらむ、物の飛びつるを、扇さよけてうちあふぎ給へるこそ。それに、

(語釋)
(三)「あちむ」の下脱文ありし

(四)涼の娘

(七)格別の御用の外は

(八)母に

仲忠、犬宮の修業中は一切人に逢はずまじき由を女一宮に告ぐ。女一宮、犬宮に名残を惜む。

(考異)

(一)姿にぞ物し給ひつる―かたちぞ物し給へる

(二)疾く―とう

(五)何事にも勝れたりける―何事もすぐれたる

(六)殿―ナシ

恥かしう、なまめかしき顔姿にぞ物し給ひつる。側より見るだにあり、向ひ居てあらむは。大將、いと疾く見つけて、いみじと思ひて、乳母を言ひつるにやあらむ。今年は、琴習はさむとて、内侍のかみもろ共に、京極に移るべきなめり。此の姫君、容貌はいとこよなうは劣り給はじを、何事にも勝れたりける上手の筋にて、今より、何事にも世の中を響かすこそいと妬けれ。小き子どものいとをかしけなるを、大人につくりてぞありける。萬の事、あやしく珍らかにものし給ふ人にこそあれ。女兒も、いかに見るかひありと思すらむ」など宣ふ。

大將殿、宮に、仲忠「中納言の、この京極の事にて物し給へるに侍り。斯く、上下かねてより、事々しう、公私ともものし給ふを、思ふやうに弾きつたへ給はず

ば、如何にくち惜しからむ。生れ給ひし時よりだに、如何ならむと、安からず人はものし給ひしを、「異なる事なくば、公事をものせず侍らむ」とて院に暇申し侍りしを、來む月よりとなむ思ひ侍る。犬宮は、いとよく「離れ奉り給ひてあら

(語釋)
(一)女一が犬宮に逢ひに來たらば

(三)女一を來させずに

(六)誤あるべし

(七)俊隆女在世中に

(考異)

(二)お前に見に―御前の見給へに

(四)見させ―見せ

(五)給ひぬれ：いとよく―給ひけれ七つになり給ふ犬宮いとよく

(八)御世―御ナシ

む」と宣ふ。お前におはしまさば、院、宮たち、また誰も騒がしう侍らむに、本意なかるべし。おはしませで、たゞ一所をなむわたし奉りたる、とて門もあけ侍らじとす」と聞え給へば、女一「いく久しさかは」と宣へば、仲忠「いかでかは。いと疾くは、みな習はせ給はじ。物の心くはしく見させ給ひてこそ。内侍のみ、四つより三歳こそ、他遊せられて習ひ給ひぬれ。これは七つになり給ひぬれば、いとよく、然りともいと疾く弾き給ひてむ。今まで習ひ給はぬ、いと心もとなき事なり。院、内裏の御書などの事により、徒らに年月を過し侍りにたり。世の中もいくばくかなき物か、なほ一歳ばかりとなむ思ひ侍る。内侍のかみ、心細くあつしく物し給ふ。この御世に、これを覺束なからず習ひ給はむこそよからめ」宮、女二「いかで、いと然まで、戀しく見ではあらむ。時々は渡りてこそは見め」と宣へば、仲忠、仲忠も、おほつかならず、夜などは参り來なむ。それを御覽せば、慰ませ給ひてむ」など聞え給へば、女二「それは、やがて見ずともありな

(語釋)
①大宮の供して京極に
行くべき人々の

②大宮の京極に移るべき
日の準備

(三)女一も同行して

(四)女一宮

(五)女一宮へ

(考異)
(一)うすもの—うすもの
など

ほえ給ふべきを、うちまもり奉り給ふに、涙のこほれぬべければ、今少しも聞え給はず、苦しと思すまじき事を語らひ給ふ。
大將わたり給ふべき人々の装束、宮にもかんの殿にも分たせ給ふ。御渡の料とて、人々にも奉りたり。内侍のかんの殿にきぬ百疋、綾二十疋、織物、うすもの、染草などは、ことに奉り給ふ。尾張守に料を賜ひてせさせ給ふ。宮の皆あり、綾同じ數なり。同じ日、宮にもわたり給ひて、三日過して還り給ふべし。大人、かんの殿に三十人、わらは四人、宮の御方も同じ數なり。女御殿のみぞ、これは數勝りたるといふべきなり。宮の御方のおとなは、皆還り参るべければ、この數へのうちには入らず。容貌ども勝れてめでたし。かんの殿の御方に、少しねびたるが交りたりしも、なほ人に勝れて、もてなし有様心憎くめでたし。この御方の宮、はじめの時に整へられたりし、なほ心有様目やすくよしと、女御殿の御方に見給ふ人(五)ば、此處に賜ひなどもし給ふれば、いと類なしと見えたり。

(語釋)
(一)唐松に孔雀を縫は
せ給へり(歟、一本「唐とり
くさく」を縫はせ給へり)

(五)「二條」は「三條」歟

(考異)
(一)かんの殿—ないし
かみ

(三)かたをうつし—かた
くさむら

(四)虫鳥—むら鳥

(六)左右の—左の右の

(七)参り交らざらむは—
まじらざらむは—まら
ざらむは

彼處にわたり給ふは八月十三日なり。大將、かねてよりも心殊にてわたし奉らむと思しければ、内侍のかみの御車、新しく調せさせ給へり。かんの殿のは、濃紫の絲毛に唐松にくさくを縫はせ給へり。宮の御は、二藍に雲襷、秋の野のかたをうつし、薄、虫、鳥のかたを、いろくに縫はせ給へり。いとなまめかしう、様々にをかしう、鞆にも唐草のかたを縫はせ給へり。下簾も、かうの地に羅かさねて、小鳥、蝶などを縫ひたり。右大殿も、もろ共におはして、三日過して還り給ふべし。右大將殿も、御前いかめしう調へ給へり。左の大殿の御方にも、人の容貌よきを仰せられ、院よりも四位、五位、六位、かたちよく年若き、内裏の藏人經たるも擇びて、かの一條京極なる所にわたり給ふなるに、仕うまつるべきよし仰せ給へれば、我もくと、賀茂の祭はさるべき限こそあれ、これは左の大殿、院ととのへさせ給ふに、世の中に物のおほえある人々、「この中に参り交らざらむはいみじき恥なり」と申し、装束を調へまどひたり。馬鞍よりはじめ

〔語釋〕
(一)未考

(二)海邊の櫓を模倣にあらはしたる装

〔考異〕
(三)上藤車四つには一上藤四車あるには

御犬宮京極に移る、行列、女三宮の感傷、見物人の評判。

(四)給へり給ふ

て、ひよきて急ぎたり。大將、仲忠「かんの殿の御前どもは、若やかなる、女郎花色の下襲を著よ」と宣ふ。仲忠「宮の御方のは、うすき二藍を著よ」と宣ふ。女房車ども、かんの殿の上藤三車は、紅のうちあはせに、はしの織物、つぎくのは朽葉、かうのかさね色の地摺の大海の裳なり。宮の御方のは、上藤車四つには、紫苑色のうちぎに、赤色に二藍のからきぬ。次々のは、薄二藍、をみなへし色などのを著て、青摺墨摺の裳なり。童も、おなじく著せたり。夏の縁の上のはかま著たり。

〔畫詞〕こよは大將殿の御方、中のおとど。人々参り集まれり。

酉の時なり。殿の中、宮たち、殿ばら、いだし車し給ふ。居集まれり。大將殿は出で居給へり。院より人々参り、また「出で給はむ、見奉れと仰せられつる」とて左馬頭源宗良さふらふ。やがて、宮の御方の女房車の、次第立てて、寄すべき事おこなふ。同じ時に、かんの殿も出で給ふ。車の次第定めにくければ、

〔語釋〕
(一)「給はむとす」なるべし。一本「給はむも」
(二)此方の車の数を多くして二十五にせむと也

〔考異〕
(二)どもは一ナシ

(三)いと一ナシ

(四)巴の一ナシ

(五)右の大殿一右大臣殿

(六)いかめし伯父のいかめしうちも

(七)仕うまつりつかまつり

(八)子ども一子どもの

(九)かけ給へばし給へ

(一〇)及ばざらめ、及ば

ね
(一一)こそこそは

樓の上(上)

六六三

大路をわかれで入り給はむと、西の御門より、内侍のかんの殿、東の御門より、宮の御車参るべきなり。その御前どもは、宮の御方に、院より四位の殿上人十人、五位三十人、かたちいと清けなる六位二十人、殿上わらは二人、日の装束どもいと麗しくしつと参れり。これに右の大殿など、すべていとかめし。伯父の、中納言宰相などにおはするは、車にて仕うまつり給ふ。中納言の君たちは馬にて仕うまつり給ふ。かんの殿に四位八人、五位二十人、六位十五人、六位といふも、受領の子ども、雅樂助、主殿の助、兵衛の左右の尉などいふなり。大將、東宮大夫かけ給へば、帯刀十二人を、中よりわけて仕うまつらせ給ふ。たどの四位、五位もいとかめし。黄金づくり、たどの絲毛、此方のも二十有るを右の大殿、兼雅「これこそ現なる移ろひなれ。左の大殿の、いかめしうて、二方もてかしづき給ふに、己が劣るべきか」とて、兼雅「子どもの数こそ及ばざらめ、車は、いま五つ、此方のはまた添へむ」と宣へど、仲忠「便なく侍らむ。仲忠が、これはわたし奉るにこそ侍

- (語釋)
- (一)女二宮
- (二)「九」は「三」の誤なるべし
- (三)俊隆女が
- (四)仲忠の事はいふまでもなし
- (五)之に比べては
- (六)兼雅の持物たる女三宮
- (七)俊隆女の
- (八)「など」としてなるべし
- (九)大宮、正頼の妻
- (考異)
- (一)あひなし—あいなし
- (二)おはして—おはしぬ
- (三)もてなし給ふ—ナシ
- (四)儀式—けしき

れ」とて制し聞え給へど、兼雅「知りてあひなし」とて、かねてより然思ひ給へりければ、なほ二十五なり。

時なりて、殿は御車寄せさせ給ふ。宮の乗り給ふ御几帳、左大殿、大將、とさし給へり。乗り給ひぬるすなはち、大將、九條殿に馬を打ちおはして、南の廂に出で居給へるを、仲忠「はやく」とて乗せ給ふ。几帳も、殿二所してさし給へり。宮の御方々の人々見て、「殿をば聞ゆるに限もあらずや。斯う言ふばかりもなくめでたき大將のもてなし給ふ御様よ。帝にて子を持たらむも、めでたくも有るまじからむ。この子もてかしづき給ふは、いみじきものかな」とめであへり。次々の車ども、乗りつゞきて出で給ふ儀式、けにいとめでたうあらまほしき様なり。宮見出だし給ひて、女三「いかめしの人の御幸や。一人にても、斯く子を産みけむよ」などと、わが姉宮を思ひくらぶるに、斯う、子孫まで、我がまことに廣ごり充ちてのよしる、かよる中らひにて見るにも、よく物を言ひ思ふべくもあらず、あたを

- (語釋)
- (一)女三の心
- (二)女一宮、仲忠の妻
- (三)仲忠程立派に
- (四)長恨歌の術士が蓬萊宮に到りし故事を幻といふ語によりて思へる也
- (考異)
- (一)なる宮—ナシ
- (二)いらぬ—入りつる—入りぬる
- (三)いはず—いはし
- (四)あらはれの—あらはなる

みるぞ心憂きや、と思せど、もとより怪しきまで御心よくあてなる宮におはすれば、然るべきにこそあらめ、梨壺のみ時々に見聞きてむ、けに言ふとも、まづ一の御子を産み給へらましかば、如何にかはあらまし」とのみ身の憂きのみ思す。殿宮の御方に入り給ひておはす。

大將いと疾う、宮の御車おほく内にいらぬ程におはして、宮の御車ちかう、院の御方ともうちまじり給ふを見れば、夕映して、いといみじく色うるはしう、花やかに清けに見え給ふを、そこばく立てて見る車ども、「宮何を思ひ給ふらむ。ただ人にはさらにもいはず、宮たちと聞ゆるも、更にいと斯ばかりおはするなければ、めでたしと見給ふらむかし」と人々やすからず言ふ。宮の御伯父の、中納言と聞ゆる、御車にさし寄り給ひて、簾おしあけて、中納言「さも幻のやうにも」と聞え給へば、打ほよ笑みて、女二「蓬萊の山にまかりたりつるや」と宣へば、中納言「さても餘にこそ今日は見ゆれ」と宣ふ。一つ車に乗り給へる殿ばら、「あらはれの大な

〔語釋〕
(一)今の東宮の御世には
犬宮が寵を專にすべしと
也

(四)給へれば歎

(七)仲忠が

●到着。雲雲。

〔考異〕

(二)かしづくとーかしづ
くく」と

(三)とぞあらむーにぞな
らむ

(五)ぬざりーナシ

(六)なまめかしくーなま
めかしう

る急とし給ひし、女御殿の宮腹の大將の姫君のめでたき幸の料なりけり。藤壺
のよしり給ふも、かの東宮の御世に、この犬宮の御世の中とぞあらむ。我らが
しづくと思ふ子は、本意もかなはで、皆その折の擇りくづとぞあらむ」など宣ふ。
車の有様よりはじめて、世の中の人々めで騒ぐめり。
おはし著きて、まづ主方にて、かんのおとどの御車、西の御門より入れて、西の
對の南に寄する。殿を二方しつらひ給へれど、西の對におはすべきに、宮の御車、
東の對の南に寄す。それより殿にわたり給ひて、まづ宮下り給ひて、四尺の裾濃
の龍膽の御几帳さして下り給ひぬ。犬宮の下り給ふには、同じ色の三尺の几帳さ
して下り給ふ。大將、仲忠、乳母抱き奉りており給へ」と宣ふに、犬宮「いな。宮
の御様に下りむ」と宣ひて、小き扇さしかくし給ひて、靜にるざりおはする様、今
からいとなまめかしくせさせ給へるを、いと美しくゆよく、覺え給ふ。殿ばら
は、東の對の釣殿に居並み給へり。

〔語釋〕

(一)「三」は「今」の誤なる
べし

〔考異〕

(二)左の大殿ー左大臣

(三)右の大殿ー右大臣

(四)御前にー御前の

●樓上の景色。

三日の御賄は、宮の御前の殿上人までおしなべて左の大殿、二日のは右の大殿
三日のは大將殿。宮の御前の、内侍のかみ、犬宮、浅香の折敷十二、紫檀の高杯、
羅の打敷なり。上達部のお前に、盃度々になりぬ。かんの殿の御方より、心
殊にまうけ給へるかづけ物、南の庭より取續き歩みたる、色々にしかさねたる。
いと清らにうるはしく、薫物の香など匂めでたし。六位の藏人には、織物の三重
がさねの小袿、三重襲のはかま、帯刀には、羅のこうちき、一重襲のはかまな
り。これより下には更にも言はず。上達部、殿上人のさふらひ、御隨身、御前の
人々、皆かづけ給ふ。かんのおとどの御方の御前には、大將殿の御方よりかづけ
給ふ。
又の日樓へ皆おはす。宮も見やり給ふに、聞き給ひしよりも、あなめでたと見ゆ
るに、近うて見給ふ人々の御目には、照りかどやきて、此の世にかよる事またあ
らじと、目もあやに見えたり。南の庭の、遙なる水の洲濱のあなたの山際にたて

〔語釋〕
 (一)「なかし」は「なから」
 歟、一本「なかしま」
 (二)「には」は「は」衍文な
 るべし

〔考異〕
 (三)薄きを皆瓦のうす
 ききばみたるをはしの
 (四)樓の西上り―樓より
 西

(五)尻ひきたる水の流の
 尻をやり水の
 (六)出でて―まいて
 (七)給はむはまの石―給
 はむはまの木―給はむか
 はまの石
 (八)あべけれ―あんべけ
 れ

る二つの樓の、なかみばかりを、いと高き反橋の高さにして、北南には沈の格子
 かきたり。白き所には、白粉には屋久貝を舂き交せて塗りたればきら〜とす。
 樓の上に、檜皮をば葺かて、あをじの濃き薄きを、皆瓦のかたに焼かせて、葺かせ
 給へり。樓の西より、西の對の南の端なる念誦堂に著く程、十五間なり。山の井
 の尻ひきたる水の流の上なる反橋の左右には、勾欄にして、瓦葺にしたり。東
 の釣殿に盡くまでの程は、同じ十五間なり。樓のそばにも、かよる反橋をしたり。
 長は、たどの人の歩くばかりにて、長々と造られたり。水はながくと下より流
 れ出でて、樓をめぐりたり。立石どもは、様々にて、反橋のこなたかなたにあ
 り。めぐり〜人々見給ひて、「言はむかたなく面白き事」とめで給ふこと限なし。
 「見さして歸るべき事なくなむ。これを朱雀院、峨嵋院に御覽せさせばや。如何に
 いみじう興せさせ給はむ。はまの石には、春は花、秋は紅葉の盛などには、かの惜
 しませ給ふ手は、えとどめ難くこそあべけれ」など宣ひて、夜に入るまで立ち暮
 (六)

らし給ふ。月の水にうつりたるを、宮の御伯父の右衛門督

兼澄うべこそはすむ人ありと思ほゆれ雲井の月もうつりける宿

大將

仲思我が宿をすぎすと思へど月影の水のうへぞと見ればかひなし

こと人々も詠み給へれど、騒がしくて聞かず。かんの殿の御方には、大

將の御方よりかづけ物は賜ふ。又の日、かんの殿いにしへ思ひ出だし給ふに、
 年々の草は、八重葎の板敷よりも高う生ひ、くりの木のつまの草は高う生ひ
 たふれて、下様にはびこりて、人影もせずありしを、思ひ出で給ふに、大將
 の、二方にひきつゞきて率てわたり給ひ、つくりなし給へる様、出で入りし
 給ふ勢見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へりし古の御有様、よろづに思
 ひ出で給ふにえねんじ給はず、涙の溢れ給へば忍び給ふ氣色を、兼雅ゆよし
 う、かよる事思みあへ給はじ、と思ひきかし。さりととも念じ給へ。まろが仕

〔語釋〕
 (一)此圖みの中なる文は
 次の六七八頁の文の摺入
 したるものにして現に春
 海本には彼處にありて此
 處にはなし。されば削る
 べきものなれども多少の
 相違あるを以て姑く之を
 存せり
 (二)はびこりて―あひな
 りて
 (三)し給ふ勢―し給へる
 を今
 (四)給へりし―給へる

(語釋)
(一)「なご」とて「なるべし」
(二)女一宮

●朱雀院より女一宮及び
俊隆女を訪はる。

りしは、けしうはあらぬは」と右の大殿聞え給へば、俊隆女「さらすば然あるまじくやは。大將も悪くや」といらへ給へば、兼雅「さて、それは誰が子にかあらむ」なごて戯に聞えなし給ふ。大將いと思ふやうなる心地し給ふ。

三日、院より銀の髻籠二十、銀黄金して毬栗、松の實櫃、棗など作り入れさせ給ひて、宮の御許に、

朱雀院東なき程になりける。騒がしき程すぎて、犬宮の物習はれむ手つきのゆかしきに、いかでかとなむ。この髻籠は、白髪になりける程も哀になむ。

と宣はせたり。かのおとどにも、同じ數にて、

朱雀あさましく忘れにてや。ことには何時となくのみ。

うらやまし明けくれ人と結ぶらむ髻籠のさまはかけも離れで

末の世にこそながるべかりけれ。聞かまほしき事どもあらむかし。

と書き給へり。御使藏人に出であひ給ひて、東の對にて、よき程に酔はし給ひ

(考異)
(三)ながる―なる



(考異)
 (一)戸口にもーとみにも
 (二)よるほひに「に」ナ
 (三)わらひ給ふーわらふ
 (四)みだり脚もーみだり
 心地脚も

て、御返とらせ給ひて、前におし立てて、西の對にて、いとみじく酔はし給ふ。藏人「いかで、かよる御使を召し籠めて、かう懲せさせ給ふ、いと不便に」と申せば、いみじう笑ひ給ひて、仲忠「勘當は、仲忠こそはさいなまれめ」とて物もおほえず酔はし給へり。宮の御方よりは、紫苑色の綾のほそなが一襲はかま添へ給へり。また女の方に、「御使の藏人こなたに」とて、戸口に、朽葉の裾濃の几帳の縫物したる立てて、いとおとなしう宿徳なる聲にて、「なほ此處にこそ」とて裾さし出でて、赤色に蘇枋がさねの織物の唐衣黒むまで濃く清らなるに、紅のはりあはせ一襲著て、色ずりの裳いとあざやかに見ゆ。袖口ながやかにさし出で、土器さし出でたる、見るにいよくいと侘しう、心地あしうなりて、藏人「いかに仕らむ」とて苦みて、戸口にも寄らねば大將、仲忠「例なき事なりや。早う」と宣へば立つに、たゞよろほひに倒れぬ。内に人々わらひ給ふ。取るとて、藏人「唯今は御返は賜はるまじく侍り」「如何なれば」といらふれば、藏人「今日はみだり脚も踏

(語釋)
 (一)「くんだり賜ふ大將御返とりて」なるべし
 (四)誤あらんか

(考異)
 (一)つれどーつれば
 (三)様ーナシ
 (五)わらさめなるをーし
 ぐれなるをや
 (六)夕にー夕日
 (七)なくーなる

み立てられ侍らねば」といふ聲も、片言のやうなり。飲む眞似にてうち溢しつれど、いとほしくてえ又も強ひず。唐綾の翟麥襲のほそなが、二藍の織物の唐衣、うすものの地摺の裳、はかまくんだり、大將の御返、取りて出で給へり。唐の紫の色紙に、豎文にて様よき松につけ給へり。藏人「みだれ脚は動かれず侍り。みきにかづき給ふものは、叢虫のやうにてや、むぐめきまるらむ」といふ程に、内よりふと、
 雨の脚はむらさめなるを叢虫となにむづかしくかけていふらむ
 藏人「物もおほえ侍らすや」とて、
 藏人「朝夕にてりみかどやく大殿になくべきものかけにや叢虫
 ことわりく」とて逃けて、倒れもこよひつゝ往けば、内にもをかしがり、大將も笑ひ給ひぬ。庭の前に、かづけ物を落し往けば、大將、人召して車に入れさせ給ふ。かんの殿の御返、

俊隆女かしこまりて賜はせつる。

老の世にながれてきよきくれ竹の末のよにこそ結ぶ名もたて

とぞありける。

- (一) 女二宮
- (四) 女一宮の歸りを
- (五) 内裏へ

(考異)

- (一) ながれてきよき一な
- (二) ながれてきよき一な
- (三) 六人一六人ばかり

四日の夜、夜半ばかりに、宮かへり給ふ。忍びやかにて、さるべき四位六人、五位十人ばかりして。大將いと覺束なくおほえ給ひけれど、よろづに聞え慰め奉り給ふ。曉にかへり給ひぬ。二の宮は、「いとつれづれに侍るに」とて喜び聞え給ふ。

●仲忠、母及び犬宮と京極に籠居す。兼雅京極を訪ふ。兼雅夫婦の懷舊。

大將、仲忠「召なくは參るまじ」とて、然るべき年老いたる大舍人頭の大ふる、小ふるなどいふものども五六人、番をくりてさふらはせ給ふ。御門守、夜半だにたしかに候はせ給ふべき由、たしかに宣ひつゝ、御門も、ことなる事なければ開けず。

かくて右の大殿、かんの殿の御方におはしまして、兼雅「覺束なからむ事、いと苦

(語釋)

- (三) 女二宮宰相君などが
- (五) 此處誤脱あるべし
- (二) 「聞かじと歎

(考異)

- (一) 宣ひそし給ひそ
- (二) 悉くしづ心なく
- (四) と一など
- (六) ことにも一こにも
- (七) いかゞいかで
- (八) ありむ一ありむもの
- (九) 今二所をがらも一
- (一〇) 事はひき出でむ一
- (一一) 人を一ものを
- (一二) 早々一はやく

しからむ。晝ぞあらぬ、夜々はなほまうで來む」と聞え給へば、俊隆女「物狂ほしく、若々しき事な宣ひそ。夜こそ、まして心靜に習ひ給はめ。宮の御方、悉く心安くは思すべし。さてわたし奉り給ふめる、おほろけには。對などにも、つれづれに人々思すらむに、今めかしく物し給へ」と聞え給へば、兼雅「めでたからむ。またことにも離れ居給ひて、つひに何事ともして給ひてむ」俊隆女「いかゞ今然あらむ。年頃さまづくに集めたりけるを」とていと愛敬つき、恥かしけにうちほよ笑み給へば、兼雅「今やがて琴ひき習はせ給ひなば、院の上たち二所ながらも、御覽せむとておはしまさむと宣はしつる。大將、そこながらも、まろが爲にも御爲にも、事はひき出でむ」と宣へば、俊隆女「かよる耳いかで聞かじ。この程は、すべて門さして、公私ことも聞かじ、他事もなく思ひまどふ人を、かの聞かれむに、かよる事なし給ひそ。あけぬ前に早々おはしね。宮の君、若君、いかに戀しうおほし給ふらむ。それをだに、此のほどはわたし奉らじとあるぞわりなきや」大

- (一) 其方の側を離れては居難し
- (二) 「あらめ」なるべし
- (三) 「たまは」だに」歎
- (六) 兼雅も
- (七) 「たりけれとてむかし歎
- (二〇) 兼雅が

殿、兼雅「紛らはし言なし給ひそ。こよに琴教へむからに親とある人の中をも、みな取り離つ。怪しうこそ宣へれ。片時も、見奉らでえぞあらぬ。宮をも急ぎわたし給へ。我も、たゞ此處にこそあらむ」かんの殿、俊隆女「よし、聞かじ。今しばしこそ念じ給はめ。大將のかしこにたままうでられぬを」と宣へば大殿、兼雅「今おのれは、天下に言ふとも、忍びく〜に時々まうで来む」とて、物憂けにて出で給ひぬ。明くなりけり。

大將殿、大殿の御前に参り給へば、御供にて所々見ありき給ふさま、たゞ兄弟のやうにて、これも、いと清けに、若うなまめかしき御容貌なり。大殿やがてかんの殿の御方に入り給ひて、兼雅「これは、もとの礎のまよか」俊隆女「然侍り」と面白くこそ造られたりけれ」むかし屋どもみな倒れ、所々に葺などの、高き草の中に朽ち倒れて、念誦堂の柱のみ、所々立てわたし、寢殿の瓦はある所なく散り落ちて、いといみじかりし、長よりも高かりし草蓬が中を分けて入りお

- (考異)
- (四) 忍びく〜に時々まうで来む〜忍びく〜は時々まうで来むとす
- (五) にて〜て〜ナシ
- (八) 瓦は〜かうらんは
- (九) 草蓬〜草ども蓬

- (語釋)
- (二) 俊隆女が
- (三) 「折の心地」なるべし

はして見給ひしに、屋のそら、所々朽ち明きたりしより、月の光見て居給へりし程を見つけ給へりしこと、わりなく出で給ひにし折、心地の思ひ出でられ給ふに、いといみじう、胸ふたがる心地し給ひて、涙のつぶくと落ち給ふを、大將「昔おほし出で給ふなめり、と見給ふ。かんの殿も、そこら見出だし給ふに、年々の草は八重葎の板敷よりも高う生ひのほり、軒のつまの草は繁くたふれて、下様に生ひ凝りて人影もせずありしを思ひ出で給ふに、大將のかく二方にひき續き、率てわたり給ふべく造りなし給へる様、出で入りし給ふ勢見奉り給ふに、年頃おもひ忘れ給へる古の御有様、よろづに思ひ出で給ひ、え念じ給はず、涙のこほれ出で給ふをしのび給ふ御氣色を、兼雅「ゆゑしう、斯かることを思ひあへ給はじと思ひきかし。さりととも念じ給へ。うべこそ、まろが仕うまつりしは、けしうはあらぬはや」と右の大殿聞え給へば、俊隆女「さらすば然あるまじうやは。大將もわろくや」といらへ給へば、兼雅「さてそれは、誰が子にかあらむ」など戯に聞えなし

〔語釋〕
 (六) 朱雀院が俊隆女に來上と切に言はるれど犬官がまだ幼稚故參られぬといふ意歎
 (七) 成るべく兼雅に來てもらひたくなしといふ意
 (八) 我が君を思ふ程君は我を思はぬと也
 (考異)
 (一) 忘れ—忘れ
 (二) さぶらふ—ナシ
 (三) 給ふ—給ひつ
 (四) 上侍めり—よくはべなり
 (五) 院の上の切に宣ふを—院にせちに申し給へり
 (九) 辛しや—憂しや

給ふ。大將殿、いと思ふやうなる心地し給ふ。右の大殿は、斯かるにつけても、何事も片時忘れ給ふ世なく、物のおほえ給へば、我も涙のこほれ給ひぬべけれど、さぶらふ人々の見奉れば、よくノ、念じ給ふ。兼雅「いと覺束なかるべし。忍びて時々はものせむ。いかど」と宣へば、俊隆女「よう侍めり。有様にしたがひてとり申させ侍らむ。暇の度ごとにと、院の上の切に宣ふを、只今はおよすけ給はねば、夜もさるべくば、かよる折は如何となむ思ふ給ふる」と申し給へば、兼雅「なほ難かるべきなり。この思には、劣りたりける。辛しや」と宣ひておはしぬ。十七日なりかし。

樓の上(下)

樓

● 犬宮樓上に琴を習ふ。顯悟絶倫なる犬宮。● 女一宮侍従の乳母に消息して様子を尋ぬ。乳母の返事。● あて宮、父と大宮、東宮などの事を語る。● 涼樓の門前を通りかゝりて歌を仲忠に贈る。● 仲忠、朱雀院と女一宮と兼雅とを見舞ふ。● 犬宮母を慕ふ。● 琴に出精す。俊隆女犬宮を勞はる。● 仲忠母子昔を憶ひて感傷す。俊隆女父の菩提を弔はんことを思ふ。● 犬宮の進歩。仲忠の驚嘆。● 雪の日雪山をつくりて犬宮を慰む。● 仲忠涼を訪ひて強ひて其の子を見る。● 歳暮に仲忠節料を慮々に頒つ。● 新年。● 樓上を二月、三月、四月、五月。● 六月の詠。● 七夕に仲忠等星に手向りんとて琴を弾く。奇特。涼庭にありて琴を聞く。● 俊隆女夢に父の告を聞く。● 夢のしらせの珍客を待つ。● 珍客。よしむねの時宗、老婢さかのの孫四人を携へて來る。俊隆女の懐舊。● 四人の孫を留めて寵用す。● 仲忠樓を下りて三條邸に歸るべき準備。● 涼樓院に参りて七夕の夜の噂をなす。● 兩院大后宮以下争つて仲忠が樓を下る當日京極に參會せんとす。● 前夜より京極に集まる人々。● 俊隆院、朱雀院御幸。● 俊隆女、犬宮樓を下る。● 輩の仰言。● さかのの四人の孫人々に愛せらる。● 俊隆女、嵯峨院琴の秘曲を盡さん事を俊隆女に迫る。俊隆女の煩悶。● 俊隆女、うかく風を弾く。● 琴聲内裏に聞ゆ。今上、少將信方をして琴の聲を尋ねしむ。● 信方琴を尋ねて京極に到る。● 朱雀院、俊隆女に迫りて更にはし風を弾かしむ。

概

奇特。人々の感動。● 俊隆女、犬宮をしてりうかく風を弾かしむ。妙なる音。人々の驚嘆。● 嵯峨院の奏請によりて俊隆に中納言を贈られ、俊隆女正二位に叙せらる。朱雀院の奏請によりてさかの孫四人衛門尉になさる。● 兩院以下樓御覽。嵯峨院の懷舊。● 仲忠、兩院以下に贈物を奉る。還幸。

● 犬宮樓上に琴を習ふ。顯悟絶倫なる犬宮。

(語釋)

- (一) 朝飯
- (二) 俊隆女と犬宮
- (六) 俊隆女の
- (八) とて留めおきて

(考異)

- (三) つまきーつまけ
- (四) つまきたりまづーづけたり銀のすき餅袋に御くだ物入れたりまづ
- (五) 奉り給ふ唐綾のー奉り給ふ著給へる唐綾の
- (七) めてたしーめてたう見ゆ
- (九) 皆ーナシ
- (一〇) 宣ひてー宣うて

斯くて、つとめての御臺、こよにて参らせ給ひて、とばかりありて、樓へ(二)所
 わたし奉り給へり。かんの殿のも、犬宮の御方のも、おとな十二人、几帳さしつ
 づきたり。まづかんの殿のほり給ふ。段階は、御手とりてのほせ奉り給ふ。唐(三)
 綾の御衣一かさね、紫苑色の夏の織物のうちぎ、紅の三重がさねの御はかま、大(四)
 將白き綾のひとへ、紅のうちあはせ、脱ぎ垂れ給へり。几帳のさしはづれたる
 よりはつかに見ゆる御容體、七尺餘の御髪、瑩しかけたるやうなる、いみじうめ
 でたし。中納言の君といふをば、「しばしさふらひ給へ」とて、東の樓に、犬宮(五)
 いただき奉りて、仲忠「几帳を高く皆させ」と宣ひて、これも同じごと、長々と人歩
 みつどきたり。御衣、縹色のほそなが、御はかまいと長し。率てのほり給ひて、

- (語釋)
- (五) 音のーの衍文歟
- (八) 我四歳の時父が琴を

- (考異)
- (一) 氣高くー氣高う
- (二) 機程よりはー機は
- (三) 給ふー給はず
- (四) しらべ試みーしらべさせ
- (六) りうかく風ー風ナシ
- (七) 習ひはて給ひつーしらべひ給ふ

琴取り寄せて奉り給へば、犬宮「雖に聞かせむ。いづら」と宣へばわらひ給ひて、
 仲忠「こよに侍り」とて、御前にさしすゑ給へり。内侍のかみ見奉り給ふに、お
 はせしよりもいとこよなく美しけになりまさり給ひけり。氣高う、清らにおはす
 る様、程よりはいとこよなうおはしけり、と哀に見奉り給ふに、靜に、兒の御有(一)
 様ともなく、おほどかなり。まづ、かの治部卿の習はし奉り給ひしりうかく風を
 犬宮の、ほそを風を犬將のにて、弾かせ奉り給ふ。まづかんのおとど、二つな(二)
 がら取り寄せてしらべ試み給ふ音の、限なくおもしろし。大將、犬宮にりうか(六)
 く風奉り給ひて、弾きはじめ奉り給ふに、御手はいと小きに、弾き鳴らし給(七)
 へる音、さらに心もとなからず、いとかしこく心を給ひてひき給ふ。片時に習ひ
 はて給ひつ。次にまた、曲の物一つ教へ奉り給ふに、いと同じく弾き取り給ふに、
 かんのおとど、俊隆女「然べきにて斯くおはすると見奉り給ふに、ゆよしくなむ」
 とて弾きたて給ひかきあはせ給へる程に、涙の落ちつと宣ふ、俊隆女「むかし、四つ(八)

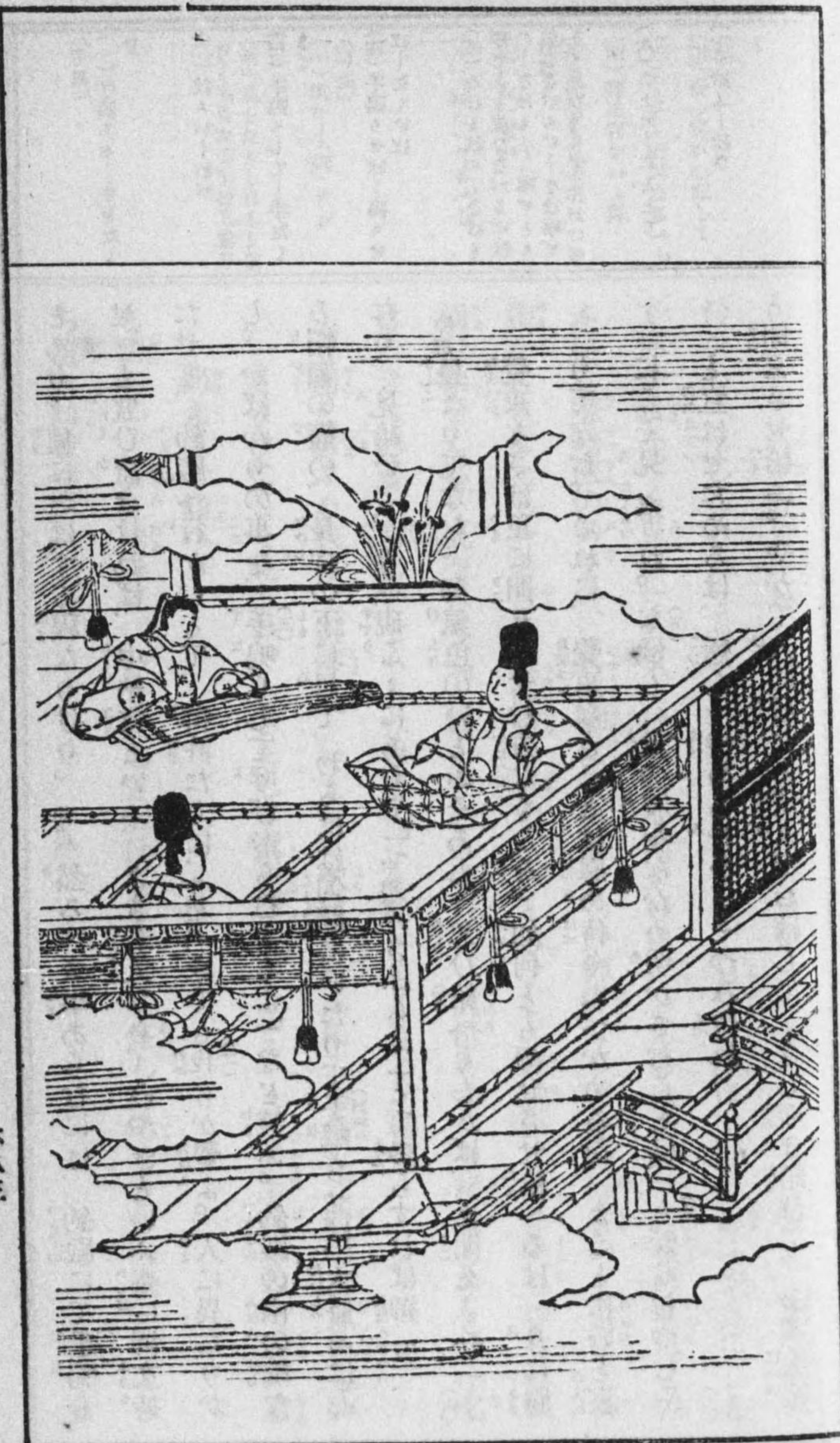
- (一) 語釋
- (二) 父が
- (三) 犬宮は
- (四) 「べかめりと嬉しう」なるべし

- (一) 考異
- (二) ごとくの「ごとの
- (三) 給へらむや「給ひつちむや
- (四) 見聞かぬ「え聞かぬ
- (五) ありけるを「を」ナシ
- (六) 給へらむ「給ひつちむ

●女一宮侍従の乳母に消息して様子を見ぬ。乳母の返事。

にて習はし給ひしに、心には入れながら、程もなくして、乳母の膝に居ながら、手どもは弾きとりて、音をよく弾き傳へたる事は七つよりなむ、大人のごとくの音になりぬ、と宣ひし。これは、大人だに琴の音を、斯くうるはしうは弾き立つることとは得せぬものを」と聞え給ふ。大將斯くおはするを、本意は叶ひぬべかめり、嬉しう覺え給ふこと限なし。俊藤女「まだ弾き給ふべけれど、苦しくもぞおはする。今日はこれを」と聞え給ふ。三度と問ひ給はず、年月を経て、上手に弾きおきたりける人の、今人の弾きをきよて心得るやうなり。年頃も宮の弾き給ふを、添ひるで、弾かまほしうし給ひしものなれば、いさよか苦しくも覺え給はず、御心に入れ給へるさま限なし。

又の日、宮より、侍従の乳母の許に、
 女一とおほつかなく、夜の間は如何あらむとなむ。習ひ給へらむや。見聞かぬもあやしうなむありけるを、夜や弾き給へらむ。いと戀しうなむ。ありさま宣へ。



樓の上(下)

(考異)
(一)手鳴らせ—手をたぐり

(二)我が—わが

(三)手鳴らして—手たぐきて

(四)手鳴らせば—鳴らせば—たぐりば

(五)なほも秋の—なほも事ども思ひながらに秋の—なほも—事ども思ひながらに—なほ事ども思ひならず

(六)ことは—こととて

(七)給ふ—給ひ

とあり。樓におはする程なりけり。仲忠「然るべき事あらむには、釣殿にて手鳴らせ」と宣ひ置きければ、中納言といふ、よき若人なり、みやぎといふ童に御文持たせて、釣殿へ行かむとて、御許たちに、中納言「さても我らが覺よ。人に異なりかし。かばかりの事を、手鳴らして呼び奉らむするよ」など笑ふ。釣殿の南の端なる帽額の簾の、長押の下に居て、わらはは勾欄にいたりて手鳴らせば、大將おはしたり。見給ひて、仲忠「硯ごよにありや」中納言「さふらふ」とて参らすれば御返、仲忠「畏まりてなむ。御氣色のいとおそろしう思ひ給へりしかば、え聞えさせで、覺束なさは更に聞えさせむ方なくこそ。如何ともせさせ給へるは、身に勝りてなむ。これに、覺束なきことは慰め侍りぬべかめるを、まことにいと哀にこそ見奉れ。なほも、秋の夜をながめ明かさむことは、とかなむつむや」と宣はせためるは、戀しう侍める身をこそつみ侍れ。

と聞えさせ給ふ。やがて人の居たる所までおはして、さし覗き給ひて、仲忠「大貳

の君や。人々の御中に、菓物めさせて、ひき散らさせ給へ。碁、雙六、例の打た

(語釋)
(一)女二宮が心配して

(二)「とて」衍文なるべし

(三)彈正宮をいふ歟

(四)乳母といふ名はつけられど

(五)女二宮が

(六)「給ひ」なるべし

(考異)
(一)御中—「御」ナン

(五)乳をたらしはしり参り—ちをたらしはしり参り

むかし。うしろめたうおほえて宣ひたりける、只今の様にては、思ふやうに、とて彈き給ふべく見ゆ」とて、けに御心地よけに仰せておはしぬ。侍従の乳母といふは、嵯峨院の御子の、兵部卿にておはせしが御女なり。此の侍従の、童にて御遊がたきなりし一の宮の御同胞の宮の、いと忍びて、容貌いみじく美しければ通ひ給ひしに、乳をたらし、はしり参りけれど、乳母とすべき様ならずとて、名はつきたれど、宮のいとらうたきものにし給へけるなり。御返、侍従聞え給ふめれば、御琴は、いとよく習はせ給ふにこそ侍れ。殿の御氣色もいとよけにこそ見奉れ。あさましく、雲居遙にてこそ、え承り侍らね。帥の君と聞えつ。宮見給ひて、いと嬉しとおほさる。女二「怪しの心ときめきや」とてうち置き給ひつ。

(語釋)
(三)「つぎに」なるべし
(六)未考

(考異)
(一)いな遊をーひいな遊を

(二)御含嗽取りてー御ぞ
かとりて

(四)居給へるー居給へり
つる

(五)かけそーかけ

(七)ごと面白しーごと
面白し

(八)多くも弾きー多く弾
きも

例の夜さりの御臺は、樓に參らす。大將、仲忠「苦しくやおほえ給ふ。然ばこよに、侍従ばかりは召さむよ」と聞え給へば、大宮「いな。遊をこそあらめ。なほこれを、宮の彈き給ふやうに、月の見ゆるまでこそ弾かめ」と宣へば、いと嬉しとおほさる。御臺下仕四人とり續きて、裳唐衣著てまるる。上藤二人、さきに三尺の几帳さして、樓にのほりて參らす。御まかなひは、例の大將仕うまつり給へば、俊藤「あな見苦し。中納言、侍従を」と宣へば、仲忠「何か」とてまかなひし參り給ふ。中納言は御含嗽取りて參りておりぬ。大宮の御方にも、おなじき、うるはしく裳唐衣著たる御乳母二人あり。大將とりつぎて參り給ふ。御菓物はかりをまゐりて、ことにまるらず。へきに、大將の居給へる所に、かたちよく、髪長くて、髪一もとに結ひたる男童の、よき程なる四人、かけそにして、南の方の山の、木の根に造りかけたる反橋の方より參らす。少し下りたる勾欄に出でて參る。繪にかきたるごと面白し。かくて、多くも弾き習ひ給ひぬべけれど、ことさら

たゞ日に二つ三つを教へ奉りつよ、過し給ふ。
日數添ふまよに、前裁いと面白くなりゆく。大宮、南の方を見出だし給ひて、

(語釋)
(五)ちやが犬宮を

(考異)
(一)日數添ふまよにー庭の山ーこくは庭の山ーナ

(二)たがへるーたがへた

(三)覺えー思ひ

(四)これはーこそより

(六)參りてーさふらひて

(七)給へるなりやー給へるべしや

獨語に、大宮、宮もろ共に、え見せ奉らぬよ」と宣ふを大將聞き給ひて、いと哀とおほして、仲忠今、此の琴いとよく習はせ給ひてむ時に、わたり給ひて、もろともに御覽せむ」とぞ宣ひし」と宣へば、恥かしくて物も宣はず。夕暮、晝などに、内侍のかみも、大將もうち休み給ひて聽き給へば、琴を習ひ給へる、いとになく、いさよか誤りたがへる所もなく彈き給へり。二所ながら、いと悲しくゆよしく覺え給ふ。如何なる時にかあらむ、かんのおとどに、大宮「下仕を召し、ちやを呼ばよや」と聞え給へば、召したり。これは、ことに參らず。されど、うつくしがり奉りて、猶まゐり習はしたりければ、哀とおほして參らせ給ふなりけり。琴ひき居給へる御程のまだ斯かるを、大將「哀に見聞え給ふ。侍従參りて、侍従「御琴は弾かせ給へるなりや」と申し給へば、大宮「弾きつべし。宮などのやうに、側におきて、常に

(語釋)
(一) 仲忠母子
(二) 女一宮

あて宮、父と犬宮、東宮などの事を語る。

(六) それ程にせずともよき事なるに

(八) 仲忠に書を講ぜさせし時は仲忠が、藏開の巻にありし事

(考異)
(二) 調を「を」ナシ

(四) 遊を「を」ナシ

(五) こくばくこくばく

(七) をも「も」ナシ

(九) 千年を「せんねんも

今は彈きてむ」など語り給ふ。夜いとふけたる月夜の、はるかに澄みたるに、
(一) 二所 彈きあはせ給ひて、犬宮に同じ調を弾かせ奉り給ふ。唯同じことなるを、
(二) うれしう大將おほえ給ふ。

あて宮、いみじう妬う、羨ましう思したるに、一の宮おはせぬをぞ、少し嬉しう
おほす。藤壺に左の大殿参り給へり。あて宮、「一の宮何事を思すらむ。女御子お
はせましかば、羨ましからまし」と聞え給へば、うち笑ひ給ひて、正頼「東宮のお
はしますよりほかに、羨ましき事や思すべき。宮、大將をば物とも見給はで、か
の犬宮と明けくれ難遊を起き臥し給ふを、こよばくの日頃いと然しもあらず
ありぬべきを、内侍のかみをもひき離ちて物せらるれば、此處にも彼處にも、怨
じ恨みて、右のおとどは、さらがへり文をぞ書き通はし給ふなる。一日院の仰せ
られし、「わが文讀ますとて有りし程は、一夜も千年を暮らすやうに思ひたりしを、
(八) おほろけにはあらじ。人々しう如何にや」など仰せられし。怪しき心に「など聞

(語釋)
(一) あて宮腹の皇子たち

(二) 「入れたるさて」は「入れたまひて」歟

(四) 東宮が仰せらるる

(五) 「もと」は「本」にて手本の意なるべし

(六) 本人の仲忠が

(七) 誤あらんか

(八) 「ふさい」は「ふさい」にて氣に入る意

(考異)
(三) ひきく「に」かたがたに

え給へば、あて宮さて有り難くて、今より然教へ奉りたらむこそ、いとになき傳
ならめ。此の宮たちの、遊にのみ心を入れたる、さておはする事。かの梨壺の宮
は、いとなつかしう、美しけにもかき給ひ、書も讀み給ふなれば、東宮教へ奉
らば、いとよくさやうにおはしぬべきを、皆人は、ひきくに思ひ挑まれてある
身なれば、宮たち心に入れず、物習はし奉る人もなかめり」正頼「たいくしう
誰か然は思ひ奉らむ。學士こそは、明暮参りて仕うまつらめ」あて宮、「いさや。
まづいと怪しきは、學士には讀まじ。大將、源中納言にこそ、書も讀み、何事も
習はめ。かほ醜き人には向はじ。憎し」とあめる、何でふことぞ。手ばかりは、
大將のもとあめりし、いとよう書き似せ給へるめりとぞ、御主宣ふめり。書も何
も、行政の中將のをぞかし給ふ。いと心こはく、今めかしき人々のをのみふさい
給ふ、心づきなし。源中納言はしも、うちくにきけば、今より哀に宣ふもあめ
り」など聞え給ふ。殿は、正頼「美しうもおはします」など聞え給ひて、正頼「この

- (語釋) (一)「御遊」がたきに参らせむと「御」
- (二)今から御側にちきたらば成長の後入内せしめん折必輕蔑せるべしと
- (三)「こそ」衍文歟
- (四)「持たまひては」歟
- (五)仲忠の櫻を
- (六)「からもり」は古き物語の中の主人公の名

④涼、櫻の門前を通りかかりて歌を仲忠に贈る。

- (考異) (一)なるが「なりし」
- (二)内裏に「の」もちに
- (三)なるが「が」ナシ

人たちは、みな宮をば限なき物にこそ思ひ聞えさせ給ふめれ。中納言も、此の大宮、同じ程の幼き御子うみ給うたるを、いみじうかしづき物にし給ふなるが、「いかで宮の御遊に参らせむと思ふに、目に近きわたりの、内裏に参り給へらむに、定めて、こよなく思とおとさむこと」など宣ひながら、さる財の王の傳にてこそ、世にあり難き笛の御遊の具など、めでたきを持たらひては、「いとうつくしげなるが賜べまろに、といふにも見せじ。思ふ様あり」とぞものし給ふなる」など聞え給ひて、出で給ひぬ。

源中納言祓して歸り給ふとて、餘所ながら、車とどめて見給ふに、けに此の樓、いとみじき見物にぞあるかすと、遠いとらうくじく叩きて、かく聞えて、ふと來ね」とて、涼からもりがやどを見むとて玉ほこに目をつけむこそかたは人なれと思ひ給ふれば、まかり過ぎぬる。川原よりなむ。

とぞおどろくしう叩かせて宣へり。いといたく妬がり給ひて、

仲忠「よのへをいかでわけけむ鹽づつのからき袂のくちをしき身は

よう過ぎさせ給へり。つかせ給ふべき所もなくなむ。まめやかには、今自ら

まゐりてなむ。

とてうつしに乘せ給ひて、走らせ給へれば、御門おり給はぬに聞えけり。

畫詞 ことは内侍のかみの御方に、右の大殿より、白き色紙に、こと多く恨

み聞え給へり。大人、わらは、居並みたり。あざやかなる装束ども、いろく

縫ひたり。大宮の御方には、御櫛匣殿より、縫ひかさねて、九日の御節供にも

て來たり。大人、わらは、几帳をばめつと、物語讀み、遊しためり。佛の御日、

内侍のかみ、御堂にまうで給ひて念誦し給ふ。御前にて、年老いたる人名香と

り散らして、著き居たり。

大將、内裏よりも度々召あれば、参り給ふ。まづ院に参り給へり。朱雀いと覺束

- (考異) (一)「せけけむ」わくらむ
- ⑤仲忠、朱雀院と女一宮と兼雅とを見舞ふ。

(語釋)
(二)さつさと濟まして仕舞ふ譯にもゆかぬ

(三)女御は里にぞ歌

(四)女一官の處へ仲思が

(五)女一が

(考異)
(一)然らば

なしや。國々のなるべき文どもあなるものを。然なる大事あらむ日は、参らるべきものなり」いらへ、仲思「走り参るべく侍る」朱雀「犬こそ、如何に琴習ひつべからむや」仲思「然。いと疾く心得つべく侍り」と啓し給へれば、いとよう笑ませ給ひて、朱雀「うつくしき事かな。内侍のかみのとどめらるゝ手なめるを、皆弾きうつしたらむは、いと思ふ様なるべきかな。さても、何時ばかり習ひ給ふらむ」仲思「心につけてものし侍らば、疾くも果て侍りぬべけれど、幼くものし給へば、心静に物を心得させつゝ侍るべければなむ。時のうつるに隨ひて、曲の物などは、習ふやう侍れば、またさる節會などに参るべく侍るべければ、すがくとも得」朱雀「珍らし。けに然もあらむ。いと面白かんなる。いかで見む」と宣はす。女御の里にぞおはしける。

(語釋)
(一)女一が
(二)序に犬宮に逢ひ給へといふ事歟

(三)「たぢちん」は「たぢども」にて宰相上等を訪ひたるなるべし、「一本」たぢめんに「又」たぢめに

(考異)
(四)家司ども一家司ばら

犬宮母を基よ。琴に出精す。俊薩女、犬宮を勞はる。

かたはらいたがりて入り給ひぬ。むつかるく出で給へり。大將「うらみ聞え給へば、女二逆様なりや。人の見聞かむ事こそ恥かしき。いと戀しきに、見でや無期にあらむ」大將「仲思今、御物忘などの序に。いとむづかし。人々ものし侍り。それに暇の入るべく侍りてなむ」女二「さて如何」仲思「いとうつくしう弾き給ふべかめり」など聞え給ふ。

曉に右の大殿に参り給ふ。宮の君も、わか君も、めづらしがり悦び給ふ。大殿、兼雅「あさましく覺束なく、はては御返もななめり。いと覺束なきをば、九日の物忌しに、いと忍びて物せむ」と宣ふ。仲思「よう侍なり。菊の宴なれば、参るべく侍り」など聞え給ひて、たいらんに、立ちながら「如何に」など聞え給ふ。つれづれに見え給ふ様なれば、殿家司ども召して、菓物、さるべき物など、御方々に参らせ給ひて、急ぎおはしぬ。

かくて、檀の色々、いとをかしくなりゆくを見給ひて、犬宮「宮のも斯くやあらむ。

(一)父七は母上に御逢ひなき一ツ

(考異)
(二)寐て一見て

宮見奉り給へるか。「戀しうとも念ぜよ」と宣ひしを、今は忘れやし給ひぬらむ。
 (二)御文も賜へかし」と宣ふまよに泣き給ひぬべければ、仲忠「な泣き給ひそ。御文侍り。それには「よく習ひ給ふや。今はさらば、わたり給ひて見奉らむ」となむ侍りつる」と聞え給へば、いと嬉しと思ひ給ひて、いとよう弾き給へり。いと心苦しう、理なりとて、おもしろき畫など取う出見せ奉り給へど、ことに例のやうにも見給はで、心にしみて琴を弾き給ふ。月のいと明かに、空澄みわたりて静なるに、山の木蔭水の波、やうく風涼しくうち吹き立てたるに、いととおとなおとなしう弾き合せ給へるを、大將「かんのおととも、折も心ほそくなりゆくに、涙落ちて、琴教へさし給ひて泣き給ふ氣色を、犬宮「まろを宣へど、宮戀しくおほえ給ふべかめり。母君も泣き給ふか」と内侍のかみに聞え給へば、皆いとをかしくなり給ひぬ。俊隆女「苦しう思ひ給ふらむ」とて、俊隆女「下へ」とて聞え給へば、犬宮「月あかきには、なほ寐で久しう弾かむ」とて、夜中までおはす。下り給ふに

(語釋)
(一)空洞の住居の當時

①仲忠母子昔を思ひて感傷す。俊隆女父の菩提を甲はんことを思ふ。

も、犬宮を樓のはしまで抱き奉り給ひて、乳母人々まゐる。抱き移させ給ひて、かんのおととの御手かけさせ給ひつゝ、おろし奉り給ふ。仲忠「人々あるものを」と宣へば、俊隆女「斯くおはしますことだにいと畏きを、他人の兒ならば、斯くもおはしますまじけれど、院の御心ばへのいと忝く、萬におはしますに、効ありて、心ごとと思ひ給ふる程に、いと不便に侍る」と申し給ひて、例の御送り給ひて、俊隆女「物聞食さどめる、いとく悪きこと」とて、手づから然るべきさまに調じて参り給ふとておはしぬ。

かく心得給ふまよに、いとかしこく、いさよか苦しと思したらで、萬の折々に著う、曲の物弾き給ふ様いと悲し。前裁も山の木どもも、紅葉し、櫛の紅葉今色つく、様様に面白く、風やうく荒く、山の中より落つる瀧も、靜なる所にて聞き給へば、よろづ物の音にあひて哀なり。かんの殿、むかし思ひ出で給ふこと多くて、俊隆女「何方ぞや、このはと斯くてあるに憂しと宣ひしは」と宣ふまよに、涙こほれ給ふ。大

將「かの坤の山よりこそまかり歩きしか」と聞え給ふ。御硯ひき寄せて、仲忠山おろしの風もつらくぞ思ほえし木の葉もみちもやくとみしかばと書きつけて、おき給ふ心地もいと悲し。

俊隆女ひきあてて峯だにわけし心には紅葉の關をこととやはせしかたみに哀に思ふこと限なし。犬宮も、楓の琴の上に散りおほひたるを、

犬宮まろが弾くうらやましとや琴の上にかへでもとばかり宣ひて、犬宮「恥かし」と宣ひて、末も宣はぬを、かんの殿、俊隆女「如何にか。なほ宣はせよ」と宣へば、

犬宮かよる音をひかむとかと宣はす。木の葉散る風のあらし音に、いとかしこく合せて弾き給へるを大將かなしう聞きおはす。

十月 時雨に紅葉かきつくし、とどまる木の葉稀なり。大將、かんのおとどうち休

〔詠釋〕
 (一)「なほ」は「せよ」歎

(二)「聞え給ふ」



- 〔語釋〕
- (一)「ふ」は讃歎
- (二)「きくつて」歎
- (三)「とらう」は「とら」とう
- (四)「とらう」は「とら」とう
- (五)「とらう」は「とら」とう
- (六)「とらう」は「とら」とう
- (七)俊薩をらふ
- (八)以下俊薩女の心
- (九)父俊薩が
- (一〇)我國にありて

- 〔考異〕
- (一)「ふ」は「ふ」と
- (二)「きくつて」は「きくつて」と
- (三)「とらう」は「とらう」と
- (四)「とらう」は「とらう」と
- (五)「とらう」は「とらう」と
- (六)「とらう」は「とらう」と
- (七)「とらう」は「とらう」と
- (八)「とらう」は「とらう」と
- (九)「とらう」は「とらう」と
- (一〇)「とらう」は「とらう」と

み給へるやうなる折なり、折にあひたるふの、いと哀なるを遙にうち誦し給ひて、仲思もろこしの山の山彦ひきつけてそよといふまで響きつたへむ
 臥し給へれど、いとどしう聞きつけ給ひて、涙こほれ給ふこと限なし。臥しながら琴に忍びやかに、

俊薩女山彦はそよといふとも調べおきし人なき宿を見るかひもなし
 心に思ひ臥し給へり。世の中を見れば、言ひ知らぬ人しあれば、才も時にあひ人々しければこそ、めでたう効あれ、人より殊に、才ものし給ひけれど、こととして効ある事もなく、知らぬ世界に、年若うして行き傳はり給ひつと、悲しき目のかぎりを見給ひて、多くの年を経給ひて、内裏はじめ、世の中の事、飽かぬことを歎きて、年月をあかし給ひける程に、また頼もしく言ひ傳へおき給はむ人もなく、何事も、我身を入並々になすべきことも及ばず、年高うなり、心ほそくおほし給ひけるまよに、これをまた歎とし給ひて、十六年のあひだ、多くの涙を

- 〔語釋〕
- (一)「ふ」は「ふ」と
- (二)「きくつて」は「きくつて」と
- (三)「とらう」は「とらう」と
- (四)以下また俊薩女の心
- (五)父が今は如何なる世界に轉生し居るならん
- (六)「とらう」は「とらう」と
- (七)「とらう」は「とらう」と
- (八)「とらう」は「とらう」と
- (九)「とらう」は「とらう」と
- (一〇)「とらう」は「とらう」と

- 〔考異〕
- (一)「ふ」は「ふ」と
- (二)「きくつて」は「きくつて」と
- (三)「とらう」は「とらう」と
- (四)「とらう」は「とらう」と
- (五)「とらう」は「とらう」と
- (六)「とらう」は「とらう」と
- (七)「とらう」は「とらう」と
- (八)「とらう」は「とらう」と
- (九)「とらう」は「とらう」と
- (一〇)「とらう」は「とらう」と

落させ奉りて生立ちける報にや、また知らず悲しくいみじき目を見けむ、昔より我がうまれける日より、亡くなり給ふまで、思しけるやう、有りける事どもを、記しおき給へる日記は、肝絶えてかなしきこと數知らず、大將の御ありさま、公、私の天下にて一の才かたち、心有様を見聞くに、すこし思ひ慰む心地すれど、これを免見せ聞かせ奉らぬ、悲しう効なきこと、如何なる人か、帝ご申すとも、さらぬ人も、八九十餘までの命ありて、めでたき末の世をも、あくまで見給ふらむ、心愛く悲しくもあれ、と思ひつづけて悲し。如何なる身とかなり給ひつらむ、一生の間、うたをもよみ給ふ、わづかに請せさせ給ひし法師しても、讀み講せさせ給ひし提婆品取勝王經、此處にして、日々に、かの御爲に讀ませむ、せかいはかくせさせむ、やうく年もねびゆく身に、かぎりては思ふ事もなし、心靜にて、われも陀羅尼念じ奉ることせむ、すべて、萬に尊からむこと、いかで此處にてせむ、など、來し方行末まで、哀によろづ思ひ臥し給ふ。

〔語釋〕

かくて宮に、大將おほつかなく哀におほえ給へど、限なき大事を夜晝思ひ給ひて、
過し給ふ。月に四五日ませなどに、夜おはすれど、宮、女「こひしき人をだに見

(一)「宮を」歎

(二)ませなど

(三)犬宮にさへ逢はぬに

(四)ともすれば

(五)京極

(六)兼雅が

(七)「見參」歎

(八)「考異」

(九)ませなど

(一〇)ともすれば

(一一)獨臥をせらるるに

(一二)ひとりふしものせらるる

(一三)「ち」をかきしき

(一四)「ち」をかきしき

(一五)「ち」をかきしき

(一六)「ち」をかきしき

(一七)「ち」をかきしき

(一八)「ち」をかきしき

(一九)「ち」をかきしき

(二〇)「ち」をかきしき

(二一)「ち」をかきしき

(二二)「ち」をかきしき

(二三)「ち」をかきしき

(二四)「ち」をかきしき

(二五)「ち」をかきしき

(二六)「ち」をかきしき

(二七)「ち」をかきしき

(二八)「ち」をかきしき

(二九)「ち」をかきしき

(三〇)「ち」をかきしき

(三一)「ち」をかきしき

(三二)「ち」をかきしき

(三三)「ち」をかきしき

(三四)「ち」をかきしき

(三五)「ち」をかきしき

(三六)「ち」をかきしき

(三七)「ち」をかきしき

(三八)「ち」をかきしき

(三九)「ち」をかきしき

(四〇)「ち」をかきしき

(四一)「ち」をかきしき

(四二)「ち」をかきしき

(四三)「ち」をかきしき

ぬに、見苦しの様な」と格子もあけさせ給はねば、仲思「あやしき勘當かな」と
て勾欄に居明かしつゝ歸り給ふ。右の大殿、さるべき折やとて、ともすればおは
すれど、かんのとの、俊隆女「わかき人だに、子を思ひて、うちはへ獨臥をせらるるに、
いと見苦しからむ」とて、さらに出で給はず。俊隆女「對面し給ひては、あぢきなく、
大事と思ふことあらむ」とてそのまよに還し奉り給へば、いとまめやかにむつ
かり給へど、俊隆女「大將の思はれむ程もむつかし」とて答へもはてさせ給はねば、
立たしうおほえ給へど、大將の御ことかよりたる事なれば、むつかるゝ歸り給ひ
ぬ。此方彼方の人々見聞きつゝ、「いとをかきしき御中らひかな」といふ。
十一月朔日より、いと遙に、げざんとてわたらせ給ふほどに、便なしとて、寢殿
にて、人けも遙なれば、さて習はし奉り給ふ。風かぎりなう烈しく、日荒れ、

空の氣色苦しげなり。かんのおとど斯かる折にあひし手弾かせ奉り給ふに、い
さよか誤らず。今すこし、もとの御琴の音よりは勝れたりと聞ゆ。大將も驚き給
ふ。大將、かんのとのに聞え給ふ、仲思「大人だに、心には得ながら、え斯うはか
き鳴らさず。院の上、これをいかに限なく哀に見奉り聞召さむ。他人は、源中
納言ばかりぞ聞き知り給はむ」と聞え給ふ。
〔畫詞〕 ことは新嘗の日、大將殿の内裏へ参り給ふとて、世に覺あり、みめき
らきらしき四位、五位、數をつくして参り集ひたり。寢殿と、西の對と、渡殿、
北の廊かけて、居並みたり。
雪よるよりいと高う降りて、御前の池、遣水、植木どもいとおもしろし。二尺ば
かりいと高う降り積みたり。人々、「此の年頃、いとかよる雪は降らずかし。これ
に歩きたるをば、おほろけならずかし」といふを、かんのとの、あはれ昔かよる
年ありきかし、いと然るにはいかでか、と言ふをも肯かで、山へこそ行かざらめ、

(釋語)
一「ちちめ」は「いかめ」歟

(四)「給へば」は「給ふ」なるし

(五)「人よりも」は「ちつより」歟

(考異)
二「君の一まゝ」の

(三)二の宮と一一の宮とは

(六)すくみにて「すくみて其の子を見る」

(七)入り給ふに「に」ナシ

仲忠、涼を訪ひて強ひて其の子を見る

川へこそいらめ、とて、強ひて歩み出でておはせしを思ひ出で給ふに、雨の脚よりの袖に多う、袖に涙の落ち給ふも、ゆゑしう覺え給へど、え念じ給はて、

俊隆女山はさえ川べのこぼり雪しみてなみだの雨とふりし宿かな

とおほえ給ふを、犬宮、「な泣き給ひそ。まろも念じてこそあれ」と聞え給へばおと、俊鷹宮をば、いと戀しうや思ひ聞え給ふ。いかどありし」犬宮、雪の降るま

で見奉らねば、いと侘しけれど、君の「な泣きそ」と宣へば。宮は、雪をぞ山

につくらせ給ひて、まろと二の宮と並びて見侍りしかし」と宣ふまよに泣き給ひ

ぬべければ、他事にまぎらはし給へば、いと黒うつやよかなる御衣に、薄蘇枋の、

唐綾の御ほそながにはえて、清らに、いよく美しけになりまさり給ふ。雪山つ

くらせ給ひて、遊などもろ共にして、見せ奉り給ふ。

大將、人よりも疾く、宮にまかで給へるに、例の入れ奉り給はず。侘びて、源

中納言の方におはして、仲忠身もすくみにて侍りや」とてたど入りに入り給ふに、

(語釋)

(一)女一宮の

(三)帥の君も中納言の君も涼方の女房の名

(四)帥君が

(考異)
二「食まらずや」たばずや

涼けにいみじう侍り。かゝるやうにぞ、しつらひたりけるや」と笑ひ給ひて、涼「まづ、御衣ぬがせ給へ」と取りて、屏風にかけさせ給へば、仲忠、いとあやしう、女房になし給はむや」とて中納言、涼身にあまりたる事したらむ人ぞ、然はあらむ。擇屑の人は「など笑ふく」、御前の長角櫃の火おほくおこさせ給ひて、御衣架にかけたる鞋ども五つひき襲ねて、涼「これは汚れず」とて著せ給へれば、仲忠、例の物狂ほしさ。今大人々々しうおはせむや。さても、いみじき宮の御心かな。さはれ、いとうれしき夜なり。もろ共にあかさむ。など疎くもぞ思す。例のまよにてあらむかし。いづら目安くも、まだ物も食ますや。師の君、日暮るゝなり。御賄せられよ。中納言の君、おそし。いづらく」と宣へば、帥君、いとわりなき世かな。然ば如何はせむ」とて、色掃目などもえならぬ。めでたく装束きて、師の君、三尺の几帳ひき添へてゐざり出でたり。よき童への、はかまいとつやよかにて、燈よき程にとりなさせて、御臺は参らせ給ふ。大將は、恥かしと思ふらむとて、う

- (一)「をつつ」は「せち」の誤歟
- (二)涼の若君が
- (三)若君が
- (四)仲忠が

- (一)とてをつつ、宣へば
- (二)とてをつつ、宣へば
- (三)とてをつつ、宣へば
- (四)見給ひつれ、見給へ
- (五)すこしぞ長に、すこし
- (六)すこしぞ長に、すこし
- (七)すこしぞ長に、すこし

奉りては、また犬宮ならべてゆかしうなむある。行末の人も、今然にぞ聞えむ」と言ひし。かたみに睦まじう見奉らむかし」とてをつつ、宣へば、涼、犬宮は、不意にこそ、たどかたはらの御姿を見奉りし。内侍のすけは人に心傲せさせて物言ふさがな者なり。さても、母君と晝かき給ふめりつるを」と宣へば大將、仲忠「それこそよかなれ。忍びて率ておはしてのぞかせ給へ」中納言うち笑ひて、涼をかしの事や。しれものところ見給ひつれ。さばれ賺され奉らむかし。伯父ぬしたちに、夢にも見せぬものを」とて、おきて、俄に入りおはして、晝かくとて居給へるを、傍より、ふとかき抱きて、燈の程、間半ばかり離りてついする奉り給へる様態、頭つき、けにいみじうあてに細やかなり。仲忠いでく」とておはすれば、いとあさましき心地し給ひて、立ちて、中納言の御方に歸り給ふ程、犬宮の御長にて。髪は今すこしぞ長にはづれ給へる。これは、様態小ながら、大人にていみじう美しく、中々飽かずおほえ給ふ。涼いとほし」とて、抱きて立ち給へば、

- (一)仲忠が
- (二)涼が
- (三)仲忠に語る也
- (四)今官が我を
- (五)「空口」詐の意歟
- (六)「をわたり」は「御わたり歟
- (七)「女」官のも、犬宮をさよ

- (一)給へり君、給よさま
- (二)「は」は「ナシ
- (三)美しげなる、美しき
- (四)御かたち、御様

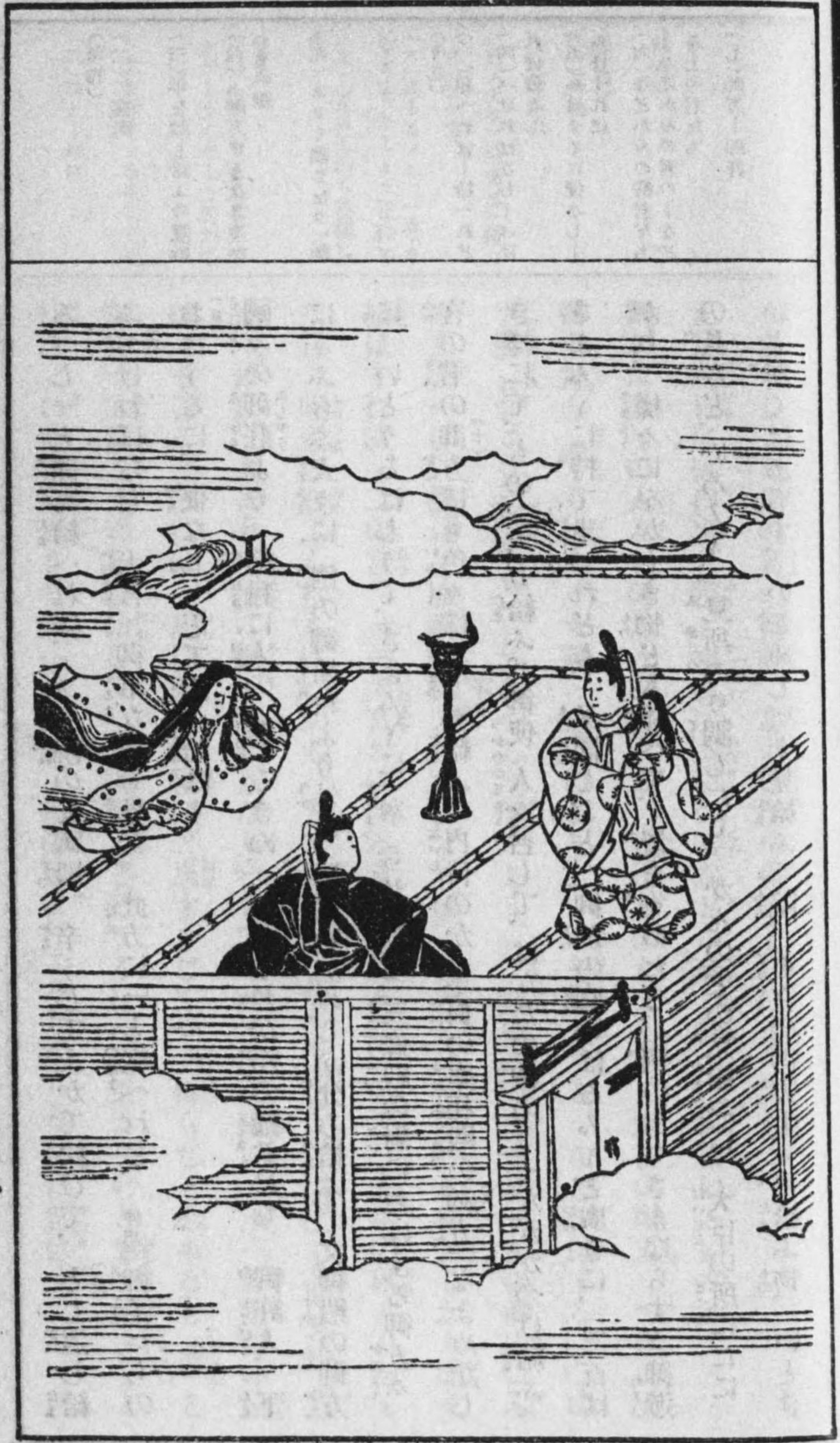
仲忠「燈臺の燈の明きに、その御顔よ」と宣へば、涼いかでか。然までは」とて抱きながら立ち給へる。つやくとして、縹のいと薄き唐綾のうちぎにかよりたる御髪、尾花の末のやうなり。いとなまめかしき容貌なり。燈のあかき方に晝かくとて獨り居給へりける。こともなげなり。急ぎて入り給ひぬ。犬宮のいとをさなけに、兒の顔し給ひて、けだかう優れ給へる。けにこそよなしかしとおほえ給へり。君、今官「いとあさましく珍らかなること」とて腹立ち給へば、ついするて、逃けて出で給へば、今官物に狂ひ給ふなめり。萬の人を集めて見せむよりも、此の大將には、かよるわざはし給はましや。目見合せ奉るや」と宣ふを、涼云々なむ悔りつる。いみじう騒がれなむ。いとうたてし。常にそらぐらもし給へるをわたりにこそあめれ」とてうち嘆き給へば、仲忠「吾が佛、なほおはせよ。けしうはあらじ。さても、美しげなる御様かな。宮のも同じ年にこそ生れ給ひし。御髪長さまさり御かたちも同じ程を、いま少しばかり勝り給へりと、まろは思ふことなきを、

〔語釋〕
 (一)忠澄の娘が器量よしとか
 (二)若宮を見せて下されたる禮に
 (三)誤あるべし。一本「あきらかになる」
 (四)女一宮へ

〔考異〕
 (一)多からじーおぼえじ
 (二)多からじーおぼえじ
 (三)多からじーおぼえじ
 (四)多からじーおぼえじ
 (五)多からじーおぼえじ
 (六)多からじーおぼえじ
 (七)多からじーおぼえじ
 (八)多からじーおぼえじ
 (九)多からじーおぼえじ

誠善に仲忠節料を處々に願つ。

誰にかは、かくばかりめでたき女持給へる。多からじかし」左衛門督の、いとよしとか」大將、仲忠いで、さりととも、え人知らじ」など物語りあかし給ひて、あけぬ。仲忠「この祿に、何事をか、まことは仕うまつらむ」其他事もなし。たどに、内侍のかんの殿の手のかぎり弾き盡し給へらむ、大宮の習ひはて給へらむぞ、いと聞きあはせまほしき」仲忠「いと易きこと」と宣ひて、遠しはし」と聞き給へど急ぎおき給ひて、宮の御方におはして寝給へる間に當りたる格子をうち叩きて、仲忠「すもりこのかへらぬ程は冬の夜の鴨の浮寝ぞわびしかりける。聞き給へどさても生憎き目を見るかな」とをかしき聲して詠みかけておはしぬ。聞き給へど女「憎し」とて返も宣はず。まめやかに、月日に添へて、古こひしう宮もおほす。中納言、いかどあさましとて、物も聞え給はず。十二月、すこしあきらかなる折ありて、懲りすまに大將わたらせ給ひつ。仲忠年のはじめに獨り侍る、あしかるべし。其方にと思ひ給へるは、うしろめたく聞え侍



- (一) 給へれば給へれど
- (二) 仁壽勅
- (三) 三年を越し給ふの意歟
- (四) べければなむべければ便なし
- (五) おはするに便なし
- (六) などかんの殿君たち
- (七) 御方一御許

るべし」と聞え給へれば、女二院の女御殿、辛うじてまかで給ひて、とし返し給ふべければなむ。犬宮、御車ながら見む。此方に」と宣へれど、仲忠「御子たちのおはするに、便なし」とて聞き給はず。

(五) 國々の御莊より、節料に人の奉るきぬ、わたなどかんの殿君たち、御許人、下にさふらふ人々に、例の御節料より外に、いとかめしう分ち給ふ。女御殿の御方に、いとうるはしうて、さまざまに奉らせ給ふ。三條殿の對におはする御方々、宮の君の御方にも色々に奉り給ふ。内侍のかみ、對の宰相殿の御方、なまめかしき様にて、もの奉り給ふ。御使人々召して、はなだの綾のほそながかづけ給ふ。さまざまに持て出づれども、又同じごと、御前の庭のはるくと廣きに、三百ばかり、様々にをかき物ども添へて、置き集めたる、例のありさまならず。御遊の具など、いろいろ、見所あり調じたり。かんのとの見給ふに、大臣の所にだに、いと斯くはあらず、いかめし、と見給ふ。院、東宮の御方より得給ふ物、いと

新年

- (一) 仲頼
- (二) 仲忠が
- (三) 「する」は「ある」歟
- (四) 女一宮
- (五) 誤あるべし、一本「えしも」を「えし」ともに作る
- (六) 「よろしからぬ様」に
- (七) 生憎に「あやにくく
- (八) 理と一理に

らきらし、入道の君の御許、忠君僧都の御もとに、奉り給ふ。

正月朔日には内裏、院、東宮、大后の宮などに参り給ふ。御前いとかめしう、御かたぐの人人ものしうみ奉る。宮におはしまして、大宮の御方、つぎに女御君拜し奉り給ふ。女御、仁壽わかうより帝を見奉る、なかはする。この大將見るこそ哀ならねど、あやしう恥かしう、命延ぶる心地すれ」宮の御方に入りたまへば、逃けて女御の御方におはすれば、仲忠「こは何ぞ」と見苦しかり聞え給はすれば、二の宮、女二犬宮おはするまでは見えじ。とて、去年の秋より斯くなむ。藤壺に宣ふらむもはづかし、とて如何にえしも聞え給はず」と聞え給ふ。

女一「けに、あまり生憎に怪しきわざなり」とて、かく聞え給ふ。女二「身をつみ給はどとこそ。みには、思ひ聞えむ程は、思すまじくや。侍らじとあめるも理となむ」大將うちわらひ給ひて、仲忠「仲忠こそ、うれへ聞えさせむと思ふ給ふこと侍れ。いかに聞えさせ給へればか、年の始に、よろしからむ様に宣はすらむ。ゆ

(語釋)
 (一) 歸り給へ
 (二) 仲忠が
 (四) 中の「沈の」を「ちうの」と書けるより誤れるなるべし
 (六) 女一に
 (一) 正頼の一族は
 (二) 女一が
 (三) 「など」としてなるべし
 (一五) 忠雅兼雅も大變を見合せたる也

(考異)
 (三) 女御の君より女御より大將殿に
 (五) 三つ四つして一三まゝにして
 (七) なりナシ
 (八) ちれずちれて
 (九) はなたれはなれ
 (一〇) 思しおぼえ
 (一四) 大殿の厄年におはするとして大殿は思み給ふ年におはするとして

ゆしう侍るを、二日はなほわたらせ給ふべく聞えさせ給へ」とあれば宮、女二世の常ならず心ある人ならば、さりともみな思ふ給ふやうあらむ。なほ早わたり給へ」と聞え給へど寄り臥し給ひぬ。女御の君より、御菓物を中の折敷三つ四つしてまゐらせ給へれど、まゐらず出で給ひぬ。

中納言、立ちながら對面し給へり。遠く女御の君おはすれば、如何に、さりとも御對面はありつらむな」仲忠「さも侍らず。腹立たしければ、急ぎまかづるなり」中納言、遠くやしき事をして、その儘にまた目も見あはせられずかたことにとりはなたれにたり」仲忠「あやしかりける事を、うたてこそ憎き御心なれ」中納言、遠くかの國讓のこと思し給はずや。帝をだに、事ともせられぬ、かのわたりは」と宣へば、仲忠「いでや、かの御心に似給へるこそは、いと憎きことなれ。あなかまや。まろがならむ様に、なほあるばかりぞ」などて出で給ひぬ。

左の大殿の厄年におはするとして、大變せられねば、いま二所も「何かは」とてあ

(語釋)
 (一) 正頼の一家と忠雅兼雅の一家なるべし
 (三) 未考誤あるべし

●櫻上の二月、三月、四月、五月。

れば、「さうぐししかるべき年かな」と人言ふ。晦がたに、「子日せよ」とて、かたの人々あまた、山にありかせ給ふ。日のどかにて、樓より見おろしたれば、色々にわかき人々、わらは、下仕、装束き、つほよりもありて、此方彼方の人々歌詠みたらむかし。

二月、晦がたよりは、猶樓にてならはし奉り給ふ。山のけしき、色づく見るもいとをかし。とて。三月節供、例のいと清らにて参り給ふ。櫻の花、樺櫻の花、いとおもしろし。樓はたど櫻の花の中につままれたり。犬宮、一所まめやかにておはすればにやあらむ。いとこよなく大人々々しうなりまさり給ふ。鶯の聲いと近う、花に居て啼くを、いとのとやかに、その聲にあはせて弾き給ひつと、

犬宮、鶯の花にむつるよ聲きけばこひしき人ぞ思ひやらるよと弾き給ふを、大將いと哀に聞き給へど、かしづき給へば、いと恥かしげに物恥をし給へば、たどにおはす。

〔語釋〕
(一)君だちとは「御たち」歟

(四)俊隆女、仲忠、犬宮

〔考異〕
(一)殿の「の」ナシ

(三)降りくちすー降りて
くちす

四月祭の日、葵かづらいといつくしう麗しき様に、禰宜の太夫、かんの殿の御方に持て参りたり。かづけ物し給ふ。大將清けなる四位、五位して、かんの殿の御簾につけさせ給ふ。あをき薄様に書きて奉り給ふ。

俊隆女玉すだれかよる葵のかけそへば心のやみもなかりける世を大將御返、

仲忠雲井なるかつらにかよる葵にもむかはぬ程ぞくれ惑ひける
掛けさせ給ふにつけて、つきせず思ひ給ふる。あなかしこ。

と聞え給ふ。かたみに哀におほえ給ふ。

五月節供、右の大殿よりあり。宮の御方の女御にも贈り給ふ。この殿のも、心こ
とになくて参らせ給へり。君だち、下仕までも、衝重いと清けなり。例もかんの殿の御節供は、藏人ぞ参り給ひける。今は長雨がちなり。しづやかに降りくらす日、時鳥かすかに鳴きわたり、月ほのかに見えたり。三所ながら、静に弾きあ

〔語釋〕
(三)調あるべし「給よ」と
一本「給よ」に

●六月の談。

〔考異〕
(一)中にもいとよく一中
にもとよく

(二)給へば一給よ

はせ給へる、いとおもしろし。此方彼方の人、泉殿に出でて聞く。殿の人々の中にも、いとよく琴習ひたる数多あり。いづれと聞き別き奉らず。今、手の限をつくして、弾きとどめたる折につけつゝ、琴をかへて弾き給ふ。静なる音、高うひとき出で、土の下までひびく音す。哀に心すこきこと限なし。

六月暑けれど、樓の上は、山高き木どもの風、いみじう涼し。犬宮、白き羅、ひとへがさね著給へり。晦に、御祓し給ひに、二所ながら、御前いかめしうて、河原に出で給へり。右大殿の梨壺の御子も奉て出で奉り給へり。大殿の御孫もまうで給へる程に、平張いと近し。御子君、若君と遊び給ひて、梨壺皇子「いざ、かの平張に往かむ」と宣ひて、御簾ふと掲げて入りおはします。犬宮、かんの殿の御傍に、三尺の几帳立てて居給へるに、さしのぞき給へる、うち見合せ給へば、ふむ後とき給ふに、内侍のかみうち驚き給ひて、胸ふたがり、いみじきわざかな。大將の給ふと思ひ給ひて、遠くわれるざり出でて。俊隆女「いふかひなきわざかな」

〔語釋〕
(三)有の儘にもの意歟

(五)梨壺腹

〔考異〕
(二)なればし

(二)おはしませばありありしうも宣はず―おはすればありしう上宣はじともばす

(四)御子に我―御子には我

とて、え荒く聞え給ふべき方もなければ、俊隆女「此方おはしませ」とて御座うち敷きて、する奉り給ひて、俊隆女「何か御覽じつる」と聞え給へば、いと靜に、皇子物やは見つる」と聞え給ふ。いみじうつくしけに心深く、大人のやうにおはしませば、ありくしうも宣はず。幼き心地、小き人々を見るに、まだかよる人は見ず、いみじう美しう、また見まほしきかな、もろ共に遊ばよや、と心にしみて覺え給へど、物も宣はず。犬宮は、宮の君にだに見えぬものを、あさましきわざかな、と恐ろしきまでおほえ給ふ。御子に、我、とりするて、御菓物まるり給へど、ことにまるらず。宮の君、若君、いと美しうて、「宮こそ、おはしませ。鳥の水に下るよ見給へ」と聞え給ふに又や見えき、と氣色見給へど、さるべくもあらず。大將おはすれば、おはしませぬ。仲思「あなかしこ。騒がしう。宮や入りおはしたりつらむ、と思ひ給へつる」と宣ふもいとほし。夜さりまで、鶉飼などして歸り給ふ。大將は、殿の御送しておはしぬ。

〔七〕夕に仲思等星に手向けんとして琴を弾く。奇特涼、庭にありて琴を聞く。

〔語釋〕
(一)歩陣歟

七月七日、犬宮御髪すませせ奉り給ふとて、樓の南なる、山井の尻ひきたるに、溜床水の上に立てて、内侍のかみもろ共におはす。それもすましたためり。人も見えぬ方なれど、ほうせうひかせ給へり。乳母の君も、二人して、粕ばかり著て、童べ取り次ぎたり。御髪、心もとなしと宣ひし、長になり給ひにけり。御容貌も、變化のものの様に、なりまさり給ふ。棚機祭、かなたこなたとせさせ給へり。内侍のかみ、棚機に、今宵の御供のもの、少しひきて奉らむ、靜なる所なり、とおほすに、二方に、君たち人々、反橋に几帳ばかりを立てて出で居給へり。宵少し過ぐる程に、源中納言、狩の装にて、馬にておはして、南の山の籬の外におはして、御座敷かせて、傘、かの木の空洞におき給ひ、頬杖つきておはす。氣色だつ風冷やかにうち吹く程に、かんのとの、俊隆女いざや、御供彈き奉りなむ」とて、はし風を我彈き給ひ、ほそを風を犬宮、りうかく風を大將に奉り給ひて、曲の物たど一つを同じ聲にて彈き給ふに、世に知らぬまで、空に高うひど

〔語釋〕

(一)涼が

(三)涼の心

〔考異〕

(二)給ふべくはたあらず
一給ふべきわざにあらず

(四)わりなくとも一て
ナシ

(五)あたりて耀く一あた
りてり耀く

(六)三所…彈き給ふなり
けり一ナシ

(七)見おろし一見いだし

く。萬の鼓、樂のものの笛、琴、彈物、ひとりしてかき合せたる音してひどき上
 る。おもしろきに、聽く人空に浮むやうなり。星ども騒ぎて、雷鳴らむするやう
 にて、ひらめき騒ぐ。かつは、如何にせむとおほえ給へど、聽きさし給ふべくは
 たあらず。御供なる左衛門尉なるものに、太刀を抜かせて聽き給ふ。様々におも
 しろき聲々の哀なる音、同じ聲にて、命延び、世の榮を見給ふやうなり。わりな
 くて、斯くて聞かざらましかば、如何にくち惜からまし、と覺え給ふ。左衛門
 尉は、天を仰ぎて聽きむたり。夜いたう更けぬれば、七日の月今は入るべきに、
 光たちまちに明かになりて、かの樓の上と覺しきにあたりて耀く。雷はるかに
 鳴りゆきて、月のめぐりに星集まるめり。世になう芳しき風、吹き匂はしたり。
 少し寐入りたる人々目さめて他事おほえず、空に向ひて見聞く。樓のめぐりは、ま
 して様々に珍らしう、芳しき香満ちたり。三所ながら、大將おはする渡殿にて彈
 き給ふなりけり。下を見おろし給へば、月の光に、前栽の露玉を敷きたるやうな
 (七)

〔語釋〕

(一)涼の心

(二)俊隆

〔考異〕
(三)主の書一集

(四)知らぬ一ありて

り。響澄み、音高きことすぐれたる琴なれば、かんのおとど忍びて、音の限もえ
 かき鳴し給はず。色々の雲、月のめぐりに立ち舞ひて、琴の聲高くなる時は、月、
 星、雲も騒がしくて、靜になる折はのどかなり。聞き給ふに飽くべき世なう、曉
 までも聞かむとおほすに、夜半おほく過ぐるほどに、彈きやみ給ひぬ。
 大將、次に横笛を聲の出づるかぎり吹き給ふ。おもしろき折にあひて、哀にすご
 う、これも世になく聞ゆ。聞き驚き給ひて笛は、昔、われと等しうこそありしか、
 ことに好み給はずと聞くに、いとこよなうまさり給ひにけり、とあさましう覺え
 給ふ。曉になりゆく。空しづまり長閑なるに、治部卿の主の書の中に、唐土よ
 り知らぬ國に到りて、知らぬ道を行き給ひけるに、いみじう哀におもしろき所々
 に、四季の花咲きみだれ、ある所には恐ろしくいみじき容貌したるもの集りてあ
 るわたりを過ぎ給ふとて、道のまよに長く思ひつゞけて、哀なる聲を出だして誦
 し給へる、また歸りて後、家のさびしきを眺めて、時につけつゝ作り集め給へる、
 (三) (四)

(語釋)
(二)涼が

(三)大將の歎

④俊隆女妻に父の告を聞く。慶のしらせの珍客を待つ。

(考異)
(一)なきに―なきを

(四)只今―今

詩を誦し給へる。聞きしらぬ人だに、涙落さぬはなきに、まして大將の、此の所にて誦し給へるは、聲よりはじめておもしろう哀なるに、御直衣の袖、まして絞るばかりになる。琴の聲、かくの聲、もろ聲にしみたり。盡きずおほえ給へど音せずなりぬれば、あかで歸り給ふ。道のまよ、世の中いとはかなくも哀にて、紀伊國に年經給ひしなど、よろづ思ひつゞけられ給ふ。

大將もうち臥し給ふ。かんの殿も、琴に手をうちかけて、いさよか寐入り給ふともなき程に、見給ふやう、「昔のものの聲の、さも哀に珍らしく聞き侍りつるかな。大將も、おほん樂の聲も、哀にかなしうなむ。さて今日、御門に參らむ人、必ず召し入れて見給ふべき人なり」と治部卿の御聲なり。いらへ聞え給はむとする程に、醒めて、いみじう泣き給ふ。大將、まだ寢給はねば、あやしと驚き申し給へば、俊隆女いと哀なることをなむ見つる。かくれ給ひて後、「夢にだに見え給へ」と心細う侘しかりしまよに思ひしかど、絶えてなむ見え給はざりしに、只今かくな

(語釋)

(四)今日尋ね来る人あるべしと俊隆が告げし人

(六)今住める大將は俊隆の子孫か

(考異)

(一)給ひつる―給へる

(二)かの―木の

(三)給ひしも聽き給ひけるよ―給ひけるを聽き給ひけるにこそ

⑤珍客、よしむねの時宗老婢さかの孫四人を携へて来る。俊隆女の懷舊、四人の孫を留めて寵用す。

(五)具したりつる―こしたれたる―むしたれたる人

む見え給ひつる。此のなん風は、中に勝れておもしろき物にし給ひしを、かの空洞より出でむとせし時、さては昨夜こそ、いさよかかき鳴らしつるを、聞き給ひけるか。哀なる詩を誦し給ひしも、聽き給ひけるよ。いみじう悲しうなむ覺ゆる」とて泣き給ふ。大將も聞き給ひけることと、悲しくて泣き給ふ。理なり。仲思人の事、如何なることならむ。斯かるを見給ひける、と、思ふなむ、効はなけれど、いと哀に嬉しう」など聞え給ふ。御門には、つとめてより、然べき人々に宣ひて、仲思「如何にもあれ、人の來む、斯くなむと申せ」と宣ひて、今日は寢殿におはす。

酉の時ばかりに、東の御門に、馬に乗りたる男、童四人具したりつる人來て、下りて、向なる御厩にて、御門に居たる人に問はす、此の殿をば何とか申す」といへば、門番「大將殿となむ申す」といふに、此の殿に昔より住み給ふ人や聞き給ふ」と問はす。門番「治部卿の殿となむ申し侍りし」と言へば、此方に物し給へ」とてみづから逢ひて、男吾が佛いと嬉しう、いらへ給へる」とて、男か

(語釋)
(二)かく申上ぐるると申上
げて下され

(六)主の男も

(八)此男が

(考異)

(一)といちふ然ばとい
ふさるべきとこたふさ
ば

(三)とりナシ

(四)はど一程に

(五)齊しく一齊しう

(七)筋に取りて一さしか
さして

(九)せられつるぞ一せら
るぞ

の御末すまの後のちか」といへば、門番かど然しか。此この御後のちのおはします」といらふ。男おとこ然しかば、
「ふるき家司けいし、御厨子所みづしよらに、切せちにうれへ申まうすべきこと侍はべるとてなむ、昔むかしこの殿どのにさ
ふらひし、下人しもびなむ参まゐりたる」とこれ申まうすととり申まうし給たまへ。一生しやうきみの君きみと仕つかうまつ
り、悦よろこび申まうさむ」といふ。門番かど斯かくなむ」と申まうせば、大將たいしやう聞き給たまひて、仲忠ちゆうちゆうある
やうあらむ」とて、まづ寢殿しんでんなる人對ひとたいにおろさせ給たまひて、我われ出いで給たまひて、仲忠ちゆうちゆうた
だ此處こゝに参まゐれと言いへ」と召めし入いる。悦よろこびて、いとをかしけなる童わらわの、長たけ四尺しよふちに足た
らぬほど、髮かみ鬘まげばかりにていと齊ひらしく整ととのひたる、いと清きよけに、装束しやうそくかせて、四人
後しりに立たてて参まゐりたり。これこゝれもいと清きよけに装束しやうそくきて、扇あふぎ筋きんに取りて具ぐしたるさま、
いとゆゑくし。年とし四十よじばかりなり。北きたの廂むすしにかんのおとど、大將たいしやうの君きみもおはす。
大將たいしやうを見み奉たてまつるに、けに恐おそろしきまで清きよけに氣高けだかうおほえて、上のほらず。いと氣けな
つかしう、仲忠ちゆうちゆう此方こゝちや」と宣のたまへば、上のほり参まゐりたり。仲忠ちゆうちゆういづこより物ものせられたる
ぞ。誰たれに逢あはむと、ものせられつるぞ」と宣のたまへば、男おとこまづ、仰おほせられむ事こと承うけたまはり



樓の上(下)

(一) 俊隆女が仲忠を産む時に世話せし老婢
 (二) さがのが
 (三) 姉は時持の妻になりし妹は右馬允の妻になりし也
 (四) 連れて来たるが即ちその子どもなりとの意なるべし
 (五) 私
 (六) 御殿をまづかりて長門の椽か目などを兼任せる也。「少まや」一本みや
 (七) 姪は即ちさかの女ども也。この男はさかの弟と見ゆ
 (八) さかの一族にて「さかのせき」とさふらひしかの者がさかの子にて
 (九) あるとありと

てなむ、委しくは申し侍るべき。かく申し侍るは故治部卿のおとどのおはしましし世に、さかのとてさふらひし、かのさかのが族にてさふらふ」と申す。かんの殿、御几帳のほころびより見給ふに、十ばかりにて、けに見給ひし者なり。哀に、けに當時おほゆる人なり。さかのといひしぞ。末の世に、年いたく老いて、哀にたど一人、大將の生れ給ふべきこと、急ぎありきしなりけり。俊隆女いと哀に思ひし人の子なりける。此の年頃、この人の年若くてあらましかば、と思はぬ時なくなむ。女などのあると聞きしは、ありや「男三人侍りし大あねは、なくなりさふらひにき。今二人さふらふは、近江椽よしむねの時持といひ侍りし、その同胞の右馬允にて侍りし、姉妹、年頃すみ侍りしを、一昨年、いとあやしく、二人ながら亡くなり侍りし。男子二人づつなむ生ませて侍りし。此の参りて侍るぞかうと申す。男は、嵯峨院の御殿の、長門かけて侍りし者の弟の時宗といひ侍る。攝津國にぞ侍る。かの近江に侍りし姪ども、いとかう侍れば、去年より子どもひき

(一) 國分寺に召使ふ童子に缺員ある由囁あり
 (二) さかのをいふ
 (三) 俊隆
 (四) 考異
 (五) さかとなくしく「もとなもとなくしく
 (六) 法師はしがり侍りつるに法師のほりし侍りつるを
 (七) 言ひなどし何かとむつかしう言ひなどし何かとむつかしう
 (八) 勤じりてうで

連れて携み侍り。その子どもの童べ四人、いときたなけには侍らぬ、そこに侍るものども、身の程の程などおとなしく、程につけては、京の殿ばらに奉らむと申すを、去年までは親の服に侍りしかば、籠めするて侍りしを、國分寺の童べのあきたる事のさふらふなど申しき。此の童べを法師はしがり侍りつるに、親侍りし時、俗になさむと、母にて侍る者どもの申しき。これらが事を國の守に言ひなどし、何かとむつかしう申して、僧の方よりも、公がたにつけて、責め勘じ、家を亡し侍り。これらが母の申すは、「おのづから、某侍らむ。此の母、若くより宮仕を仕うまつりし、身の程あやしきをも知らず、故殿の御はての世までさふらひて、子どもの顔をも、終にはかなくしく見侍らで、みまかり過ぎ侍りにき。我等のみ、殿をもえ知り奉らず、かく佗しくうれはしき事」いともくかしこくて、數多の世の御榮おはしましてなんと申すもの侍りしかば、泣くく思ひ給へ悦びてなむ、斯くさふらひつる」と申す。かのさかのといふ女、いと哀に、

(語釋)
(一)俊隆女

(二)病氣がもう直るか
直るか

(三)俊隆女が

(五)尋ねて来たる女等を

(六)我々に對して窮屈に
思ふな

(考異)
(四)人とは一人にも

(七)物一ナシ

病つきにけるに、子の許に往かまほしけれども、此の殿の、たゞ一所幼き子を
 持給うておはしける、え見捨て奉らで、心地今や歇む、と思ひ居りける程に、
 京にてはかなくなりけり。申しけることども、今日聞き給ふにつけても、思ひ
 出でられ、胸ふたがり、悲しくおほえ給ふまよに、つくぐと涙のみこほれ給ふ。
 大將にも、昔聞え知らせ給へりければ、然なりと思すに、いと嬉しとおほす。し
 ばしためらひ給ひて、俊隆女、盡させず哀なる、昔の人のことを物し給へば、いと悲し
 くなむ。何かは、昔の人のこと、覺束なからずものし給へばなむ。委しき事は人
 にはな宣ひそ。たゞ、かの人の代とは、とかく尋ねものしたる人をこそ、同じ事
 に思はめ。此處をも、など物心苦しうあつかひ立て給ふ。吾が大將にぞおはすめ
 る。うれへ歎きたる事ども、いとあやしき事なり。忽に、かの攝津守のもとに
 も言ひやらせ給ひてむ。とく物し給はで、今まで然りけること。かの人々、何處
 にととも、はかぐしう聞き置かずなりにしかばなむ、今に心には思ひながら、え尋

(語釋)
(一)「と」衍文歟

(二)「ものしたれ」にて此
儘我方に仕へよの意歟

(三)これはさかの娘ど
もなるべし。此處脱文あ
らんか

(五)「その妻は」歟

(考異)
(四)「と」一ナシ

ねざりつる。いとこそ嬉しけれと、かくてもものしたる」と宣はす。年若く、いと
 たちある下仕にてぞ仕うまつりける。今も田舎びず、由々しく、かはらかなる顔
 つきして、髪、細脛ばかりにて、時宗「かのあらぬ若き人々具し給へるが、みなみ
 な率て参り侍りつる」仲思「いとよきことなり。さやうの人々の、いとよう仕うま
 つりつべき君だちものし給ふ」と宣ひ、かの童へ召せば、時宗「然さふらふ」と申
 せば、仲思「なほよし。此處にまうで來」とて召し出でて御覽するに、いとをかし
 けにて、白くらくくじき顔したり。仲思「いと思ふやうなる者どもかな。遊は
 すや」と宣へば、時宗「二人は、笛をなむ吹かまほしうし侍る。いま二人は、舞を
 ぞ好み侍る。さやうの事もし侍りぬべしとて、かくいと生憎に、いみじき目をも、
 さまぐに見侍りつるなり」仲思「いとをかしき事かな。みな一所に置きて、さま
 ざま好むらむ舞もせさせむ」と宣ふ。時宗「かの近江椽に侍りし時持が妻は、朱
 雀院の御時、采女をなむし侍りし。そが妻は、上人と官なり侍りて、かうぶり賜

〔解釋〕
〔一〕「ども」は「と」歟

〔三〕申立てたらば

〔四〕他の方法にて目をか
けてやるべし

〔異考〕

〔二〕御代にも出て立ち申
さば―御代には出て立ち
て申さば

〔五〕さるべき―さるべき

〔六〕物などまづ―まづ物
など

はすべかりしほど、あさましく、後の人に横様に越えられ侍りて、賜はらずなり
にしこと」ども申せは、仲忠「いと易きことなり。今の御代にも、出で立ち申さば
ものしつべきを、今はあぢきなし。ことざまにて、いとよく願みむ。子ども、
京にあらば、家をも願みさせむ。誰もく、時々はかよひて住めかし。このわた
りにも、さるべき所ものせさせむ」と宣へば、時宗「限なく畏きこと」と申す。
仲忠「苦しからむ。物などまづ食へ」と宣ひて賜はす。仲忠「守のもとには、家もと
よりよく造りて取らせ、うちのもの、數によりて取らすべき由言ひにやらむ。又
かの國に、院方より領する所あり。今よりは、時宗に預け知らせむ」と宣ふ。か
んの殿、かいねりの綾のひとへがさね、織物のうちき、はかま、一くだり賜はす。
又きぬ十匹、俊隆「これは、かの國にあらむ人々にもものせよ。必ずく京に上れ。
さてのみなむ、思ふやうにあるべき」となむ宣はす。限なく、返すぐ悦び聞え
さす。

畫詞

こよは寢殿。時宗童へ四人。御前にあり、大將殿、もの宣ひなどす。

〔語釋〕
〔二〕汝は暫時京に留れ

〔五〕こなりけりと殿の内
なるべし

〔考異〕

〔一〕ちり給ふ―ちり給ふ
べき有様次の巻に見えたり

〔三〕知らぬ―知らず

〔四〕かよる―かゝる

〔六〕急ぎ―ひと

こよは犬宮の樓よりおり給ふ。
大將殿より、紅のうちき一襲、織物の御さしぬき。仲忠「これは、かよるありき
に入るべきものなめり」と宣はす。きぬ廿匹。仲忠「これは、國にあらむ人に物せよ」
とて。仲忠「馬につきたらむ者に」とて調布三十賜はす。守のもとに、やがて殿の
下家司そへて、くだし遣はす。仲忠「人をやりて、暫もあれ」と宣はすれど、時宗「か
く限なきことを、とくまかりて、聞かせ侍らむ」と申す。時宗「年頃、田舎に、む
づかしき目どもを見、又かくいみじう言ひ懲せられて、泣き歎きて佗しかりつる
に、覺えぬ物どもを賜はりたるよりも、まだ知らぬ、清らに光り給ふやうなる殿
の御容貌を、けぢかく、今は吾が物と見奉らむとするは、いみじき吾が幸か
な。禍は、忽にかふるものなりけり」殿の内めでたきを見るに、物覺えぬま
で嬉しくて、急ぎまかでぬ。童はさるべき人におほせ給ひて、仲忠「よく勞はりも

(語釋)
(二)仲忠が

(四)俊隆女の心

(五)京極より本邸に

仲忠權を下りて三條邸に歸ちんとす。其の準備、涼、嵯峨院に参りて七夕の夜の噂をなす。兩院大后宮以下争うて仲忠が權を下る當日京極に參會せんとす。

(考異)

(一)顔の「の」ナシ

(三)朔日にもなりぬ一ツでもリ

(六)給ふー給ひつ

のせよ」とて、やがて殿にとどめさせ給ふ。顔の清けに愛敬づき、らうくじきこと、殿上童とも言ひつべし。夜うさり召し出でて、笛賜はせて吹かせ給へる。田舎びず、いとなく吹く。四人ながら皆様々にいとよく吹きたり。いと嬉しきものかなと思す。舞せさせ給ふ。ましてこれは、明け暮れ心に入れたりければ、になし。人々、「いとをかしくさふらひける者かな」と興じ申す。
八月朔日にもなりぬ。九月上の十日の程に歸り給ふべきに、樂人召して、西東にて遊せさせむ、と思して、今よりかづけ物の事などせさせ給ふに、この童べのかたち整ひて、いと思ふやうに舞するを得給へるにつけても、見給ひける夢悲しうおほす。今四人の人々にあててせさせむと思す。いかめしき御莊どもに、きぬども召し集め、あや、織物、羅など殿中のしつらひ儀式忍びていとかめしう、然べき人々に仰せ給ふ。左の大殿の所々にも聞かせ奉り給はず。童べは今四人加へて、とのべさせ給ひて、夜晝しらべ整へさせ給ふ。八月十五日と、この御急ぎ

(語釋)
(一)仲忠が

(五)侍るは「は」侍るよりは一歟

(考異)
(二)ウリーナン

(三)聞き給へしー聞き侍りし

(四)あがり侍らましかばーあがらましかば

おほす。宮わたり給ふべし。内侍のかみ、犬宮の御方々の人々あはせて四十人、わらは下仕、例の扇、裳、唐衣、心ことにせさせ給ふ。犬宮、いよくひきかへたる様に大人しくおはす。琴は、たどかんの殿と同じさまに、これは今少し音は優りさまに弾き給ふに、今は限なく、この世に思ふ事なくなりぬとおほす。程は八月十日ばかりなりけり。
かくて源中納言、嵯峨院にまゐり給ひて、遠みだり脚病いたはり侍るとて、石山などにまうで侍るとてなむ」と御物語申し給ひて、遠云々して、いみじう世になき物の音を聞き給へし。珍らかなるまで、哀にかなしく侍りし。はじめよりは、いま少し心すごく、まだ聞き給はぬ音どもの侍りしは、なほ秘したることや數多侍らむ。いかでこれ聞召させ侍らむ。今すこし高く響きあがり侍らましかば、いといみじうなむ侍るべかりし。官位のごよなく侍るには、かく世の中の上下にすぐれたる、物の上ず物し侍るなむ、めでたき事に侍る。公の御前などにて、打解けて

(語釋)
(三)季英

(考異)
(一)讀しーそうし

(二)讀し侍りしーずんて侍りし

(四)などーなんど

(五)少しよくせさせよと仰せたるをーナン

(六)かみのいとーかみのことと

誦したる折侍らぬを、おほかたの聲、書讀じ侍りしよりも、聲の出づるかぎり、昔の詩ども誦し侍りしなどは、すべて涙留められずこそ侍りしか」院、嵯峨「いとおもしろく、哀なる事かな。いかでこれを、思ふ様に聞くべからむ」中納言、遠犬宮に、手の限、この二年をしへ調へて、此の十五日になむ、樂人ども集めて、左右と樂して樓よりおろすべく侍る。かの日興あることども侍りなむ」院の上、嵯峨「かの日こそ彼處に俄に御幸せめ。如何に」と宣はすれば、遠ある者の申すは、一院の、かの日ぞ、彼處におはしますべしなど申すなりし。さやうに侍らば、さる御心せしめ給ひてこそよく侍らめ」嵯峨「如何は。九月九日、右大辨に、さりぬべく文作らせて見むとてなむ、女の装など、少し物せさせよと、仰せたるを、二十くだりばかりは、少しよくせさせよと仰せたるを、まづ然ばかの家の琴聞かむ。内侍のかみの、いと聞かまほし。右大將いみじき人なり。天下におもしろく哀にあり難きことどもの留りたる家よ」など宣はせて、中納言まかで給ひぬ。

(語釋)
(一)以下仲忠の心

(二)新機々々と朱雀院へ申上げたらば

(三)「きこえ申して」は「聞えありて歎、一本きこえ給ひて」

(五)誤あらんか

(六)うるはしは「うるはしく」歎

(八)「家は」我「歎、自分の分として紫檀の酒床をつくらせての意なるべし

(九)「たり」は行歎

(考異)

(四)よりこなたーよりはこなた

(七)ながらーナシ

朱雀院は、大將に、必ずかの日行かむ、ことごとくしからず、中々知らぬやうにて物せられよ、騒がしきやうなり、右の大殿の、迎にもぞとあると思ふなり、と仰せられけるに、又嵯峨院返すく、忝く仰せられしを、然など啓し申さんに、人たご便なく言ひなしてむ、おのづからきこえ申して、然らば然りと思はむ、おはしまさむ様の用意せむとて、治部卿集の中にある、唐土よりあなた、天竺よりこなた、國々のかみを、その年頃の有様を、かの大將書かせ給へる屏風、例に似ず清らに、うるはし。皆ながら唐綾にかきて、縁の錦裏よりはじめて清らなり。寢殿に二所ながらおはしますべくして、御簾の帽額には、大紋の錦をせさせ給ひ、たかく捲き揚げて、御濱床に蒔繪して、家も紫檀のを造らせ給ひて、黄金の筋やり、螺鈿摺りたり、珠入れたり。大方の所の面白きよりも、御しつらひいとめでたし。

嵯峨院の太后の宮、「七十に餘りぬるに、萬の事聞き見るに、琴の音よきなむ飽か

〔語釋〕
（一）大后宮に

ぬ。大將の、何時にかありけむ、早う彈きしを、いとみじく世になく覺えし。
ましてかの内侍のかみの彈きたらむ、いかで聽かでは、あるべきにもあらず。御
供にて聞かむ」と聞え給へば、（二）「如何なるべき事にかはあらむ」とは宣へど、
止り給ふべきならず。内裏の女御にておはする、此の大后の宮御腹の若宮も、
承香殿いとよき事なり。ことにも聞き侍らむ。必ずおはしませ」と聞え給ふ。女一
宮は、女御、男君たちのかぎり七所、二の宮とおはすべし。源中納言、かの七月七
日のことをさへ、睦しき御中らひに聞え物し給へば、我もく、とまり給へるはな
く、おはすべし。御供の人までは、居べき所なし。寢殿の西の廂に大后の宮、北
の廂には大殿、大宮、その御腹の女御の君、今の女御はなち奉りて八所、大殿
の腹の女君だち五所、母上わたり給ふべき方なり。かく御方々、我もく、と宣へ
ば、「大將くるしう宣はむものぞ」と制し聞えさせ給へば、「あぢきなき事なり。然
るべく御暇得給ひて、聞き給はざらむにより、世に聞きがたきことを聞き侍らざ

〔考異〕
（二）給へるはなく給ふべきなく

（三）大將―大殿

〔語釋〕
（一）あて宮は聞きに行くとも其方は行くなといふ意歟

らむこそ」とて一人とどまり給ふべきならず。東の廂には、宮、内侍のかみ、院
の女御の御局とおほす。左の大殿の大殿腹の男君だち四人、宮ばら七人の男君だ
ち、「いとむづかしう責めらるゝを、然りぬべからむ物の間に」と切に覺しつゝ、
せめ聞え給へど、あるまゝに、逃れ聞えざるべき方なきまゝに、仲思、明きたる方
なきを如何せむ」と聞え給ふ。
かゝる事を藤壺聞き給ひて、左のおとどに、あて宮、只今、みづから聞ゆべき事なむ」と
聞え給へれば、宮に、正鬘さればこそ。此の事ならむ。いかに聞えむとすら
む。暇ゆるされ給ふべうはいとよし。定めて、聞召し忍びて車にてとあらば如何
せむ。すべていと苦し。大事の聞きにくき事ありぬべかめり。然ばわたりなむ。
彼方にはものせらるとも、此方にはなわたり給ひそかし」と聞え給へば、大宮「然
もありぬべけれど、久しくをかしき物の音も聞かぬを、さうくしく思ふに、内
侍のかみのひき給はむは、いかで、かゝる折ならでは聞かむ、と思へばなむ」

〔語釋〕
(一)自分一人だけ

(二)御許容の御様子はお

(四)今上が

〔語釋〕
(三)などーなど

正頼「こゝに斯く宣はすればこそ」とて歎く。参り給へり。居給ふまよに、あて宮、まろを彼處にまかせて、たどにあらむと思ひ侍りしを、かう離ちする給ひて、むつかしき事をのみ聞き、有り難う聞かまほしきことを、誰もく聞き見給へること。心に思ふことなく、あらまほしき目を見聞かむこそ、思ふやうなるべけれ。十五日、犬宮、内侍のかみ、樂して物し給ひ、院の上もおはして、かの手の限、さまざま弾き給ふべかなるを、後の宮もおはすべかなるに、一人しも、斯く交らふまじく侍るなむ、いとあさましく侍る」とて泣き給ひぬばかり聞え給へば、正頼「いと怪しく、けに有りがたき事を聞かせ給はど、いとよき事にこそ侍らめ。大后の宮も、必ずやおはしますらむ。時にのぞみて、あるまじなど人申さば、如何侍るべからむ。御暇は」あて宮、上は御氣色は侍り。昨夜いみじう聞えしかば、知らずなども宣はず。こればかりは、天下に宣ふとも、行かではえあらじ」と宣ふ折に、わたらせ給へり。おとど、隠に居給ひぬ。あて宮、明日の夜さり、必ず迎へ給へ」と

宣へば、正頼「さればよ」とて出で給ひぬ。

〔語釋〕
(一)正頼が

(二)あて宮が今上になれたりて

(三)早速行き給への意歎

(四)實忠

いとまめやかにむつかり申し給ひて、御暇強ひて聞え給へば、今上「はや。いとよかなり」とて、今上「出で給ひなば、やがて彼處に物し給へ。萬の人の思はむよりは、大將の朝臣の思はむぞをかしきや」あて宮、みな人も聞き給はぬに、獨りものし侍らばこそ、さも思ふ人も侍らめ。大后の宮よりはじめ奉りて、おはせむには」と申し給へば、今上「それはさしもあらじ。けにかの宮おはせば、さあるばかりに、宮ぞ、ものし給はむ。よし聞かむ。さもあらじとて、また内侍のかみの琴きかぬ人は、世にはあらずやあらむ」と宣はすれば、藤壺、大后、必ずおはせむなど人知れずおほす。

新中納言、今は人にもことに見え交り給はぬを、斯くなど聞き給ひて、實忠夜の御事ならば、忍びて参らまほしくなむ承る。とて、

實死じつしにかへりおもひ過ぎすにし世よの中なかのあかぬことこそ哀あはれなりけれ
もし然さるべくば参まゐりなむや。

とあり。見給みたまひて、よろづの事ことより如何いか様さまにして聞きかせ奉たてまつらむと思おもひ給たまひて、
仲忠なかつゆ悦よろこびて承うけたまはりぬ。わが佛ほとけ、え聞きえさせぬ程ほどに、いとく珍めづらしく、嬉うれし
き事ことは、いでやけに、

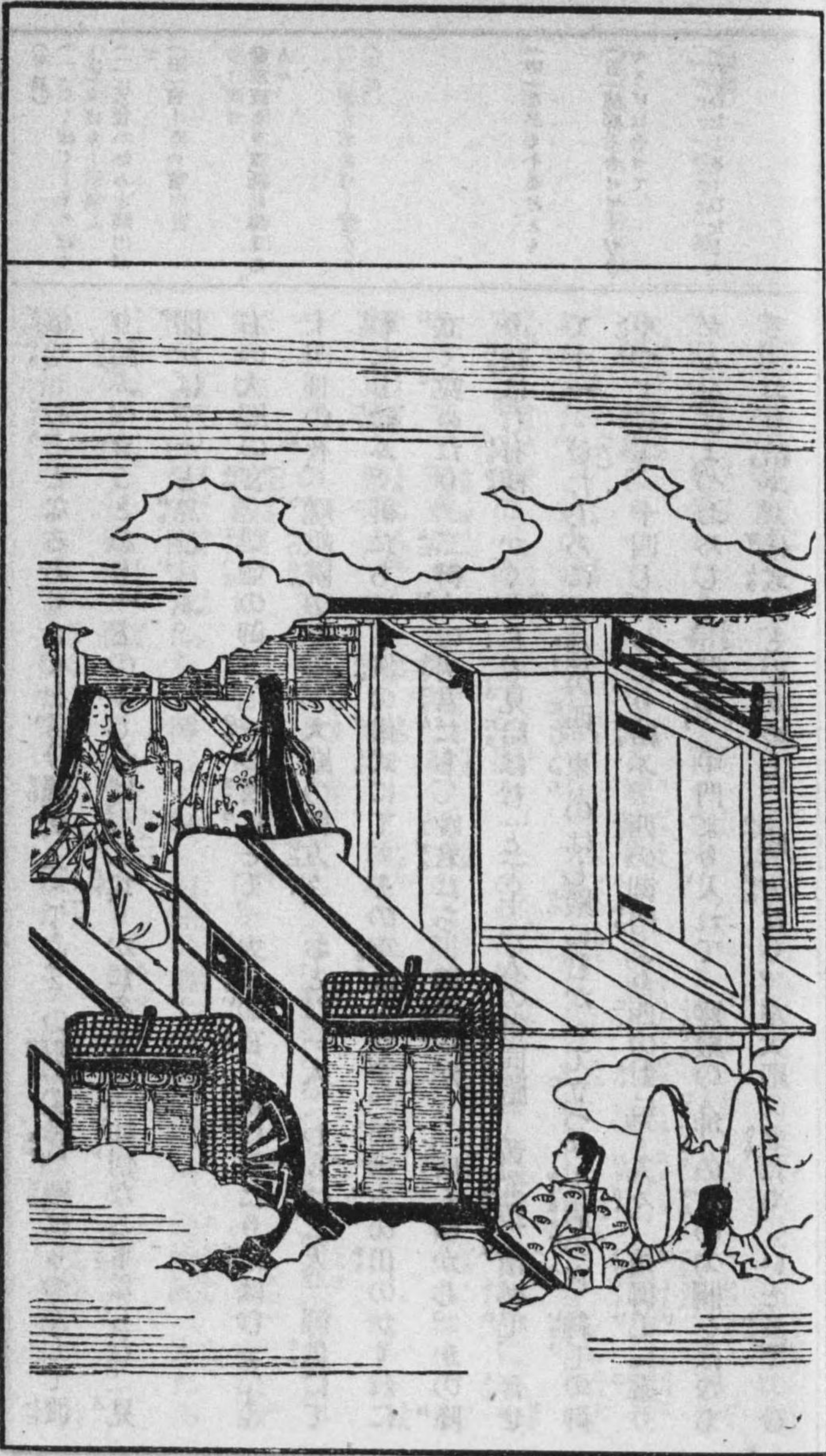
年としふれど誰たれも忘わすれぬうき世よにはなぐさむことの何なにかあるべき
まめやかに、世よの中なかの哀あはれに心細こころほそくおほえ給たまへば、しるしばかり、幼せきなき人ひとに、
月頃つきころものし侍はべりて、忍しのびたる所ところ、侍はべりがたくも、あながちにてもと思おもひ給たまふ
るを、と聞きえさせれば、馬うま檢所けんじょの法師ほうしの心地こころちなむし侍はべる。

と聞きえ給たまひつ。
世よに安やすからずのよしれば、御方々かたがたの北きたの方かたたち、御女みづめたち、宮みやたち、如何いか様さまにて
これこれを聞きかむと、おほし給たまはぬなし。忍しのびてとおほせど、院ゐん一所いっしょおはしますべき

(考異)
(一)過ぎにし—そめにし

(二)わが佛え聞え—わが
佛のきこえさせぬ

(三)馬檢所—馬見所—兩
けん所



(考異)
 (一)こくばくをこくばく
 (二)乞食かたる一賤山が
 (三)宮一この宮

御前夜より京極に集まる人々。

(四)なども一などとも
 (五)檳榔毛合せて一びりやうげは合せて
 (六)ひたしる一ひたし人

儀式、心ことなるありさまを言ひ騒ぎ、「こよばくの限なき宮、殿ばらつくして渡り給ふべきことあり」とのよしれば、^(一)乞食、かたるまで「如何なる事ならむ。見聞かばや」と思ひ言ふ。^(三)

右の大殿の宮、^(三)梨壺の御方、一つ所にとて、大后の宮、俄にわたり給はむとす。十四日の夜、嵯峨院の女御、大殿の御方々、おとな一人、わらは二人、御供にてわたり給ふ。御たちは、例の儀式にて、その車はおかず。南の方の山のかくれに立て並めたり。二御方の男君たち、姫君たち、御車ながら、「所もゆかし。かの降り給はむ有様、かくなども見給はむ」とて十一人の御同胞、黄金造檳榔毛、合せて十一、ひたしるにて、^(四)樓の西、東のはし殿にむかへて立つ。大后の宮、^(五)絲毛の御車つどけて、十四してわたり給ふ。西の御門より西の對に、人々、檳榔毛に乗りたるをばまづおろして、御車、中門より入れて、寢殿の坤の方の勾欄をはなちて、おり給ふ。儀式といかめし。曉方なり。左大殿の君たち、いと多く、ひ

(語釋)
 (一)なりしはなる歟

(五)御しとねは衍文歟

(六)誤あるべし

(考異)
 (二)驚きたまひ一驚きて

(三)四間に南に一四間を俄に南に

(四)一の宮一この宮

(七)おはす一居給ふ

き具して、御前仕うまつり給へり。儀式といかめしううち續きて、三條殿の右大殿の宮、梨壺わたり給ひぬ。西の對なり、^(一)かんの殿の人々も、みな坤の御堂の廂、渡殿にうつりて、西の對を嵯峨院、大宮の殿上人、^(二)藏人所にしたり。藤壺、わか宮たち、寅の時にまかで給へり。大將、思ひかけ給はぬに、^(三)驚きたまひ、俄に東の廂、^(三)四間に、南によりて二間を、一の宮の御方とおほしたるを、一つにて中をへだてて藤壺のおはし所にし給ひ、次の二間を、^(四)庇かけて宮の御方おはす。内裏、東宮の殿上人、いと多く参れり。絲毛のになき御車、檳榔毛十二、たどの二つあり。一の宮、大宮の御方々の人々、かたへは釣殿にうつりぬ。藤壺の女御の、^(四)對かけたる渡殿などに、東宮の殿上、一間をわけてしつらひ居たり。南の廂の御階の東は朱雀院の宮たち、御しとね、^(五)勾欄の端より西の廂は、嵯峨院、宮たち九所おはす。御裯、^(五)隙なくよそひ續けたり。母屋分けて、二つにしつらひて、^(六)はしたてり。さるべき大將たち、おとどばかりぞ、内にはおはす。上達部は、^(七)勾

(一)正頼の六の君

(二)嵯峨大后

(六)梨壺腹の皇子は何の感じもなけれど

(七)梨壺

(二)居給へる—居ためる

(四)聞かせ—聞き

(五)たとし—なく—さま

(八)おはせねば—おはせ

欄の簀子にぞ居給へる。太政大臣のも、「院の上のおはしませば、参りて聞かむ」と宣ふ。一の院は、嵯峨院おはしませぬと聞かせ給ひて、後に御對面あるべきにて、おはしませむとし給ふ。東の對は、一院おはしませむ。殿上、藏人所にせられたり。

明けゆくまゝに、御方々、南の方の池、中島、釣殿、坤の堂の方、左右の反橋、樓のさまなど見給ふに、限なくおもしろく、めでたしと見給ふ。北の方を見やり給へば、遣水をかしう落し、枝ざしをかしう、珍らかなる木ども、小松ども、遣水のこなたかなたに多かり。對などは、こなたには見えす。はるくと庭のたとしへなく廣く面白きに、昔生ひ、紅葉の木ども見ゆ。藤壺見給ふに、大殿は、いかめしう上臈しう造りたることこそあれ、見所を斯うはあべきならず。かなたこなたを見遣り給ふに、いとみじく面白く見給ふ。二の宮は何事をも思ほさねど、女御の君は、東宮おはせねば后にもなり給はぬを、心よからず思しよに、大將の

(三)嵯峨院が

嵯峨院朱雀院御幸。

(四)船屋敷

(一)言へる—言ひし

(二)さらさらしくして—さらしく—ナシ

(五)あらじかしそやかの—あらじはよかの

有様かたち、帝と申すともきしろひ難くおほしたるを、少したけくおほすに、今日の有様、此處のつくり様、人々のいみじう言へる、けにと思ひ聞え給ふ。

未の時ばかりに、嵯峨院おはしましたり。右大將参り給ひて、御階に御車よせて、右の大殿、大納言三人、中納言宰相五所、源中納言、宮たち、いとかめしう清らに、大人々々しくさらしくして、ひき連れておはします。七十二におはしませど、いと清らに、若く、只今ぞ五十ばかりと見え給へる。御髪白からず、御腰すこしうつぶし給へり。いとよく笑ませ給ひて、嵯峨「いとおもしろき所と、昔見しを、ゆかしきになむ物しつる。かの池のふなやは、此度は、長ぞ高くなりけり。いと哀に、たど同じやうなりや。我が見し同じ程を見し人あらじかし。そや、かの宮内の兼躬の朝臣有りける。覺ゆや」と宣はすれば、兼躬「然侍り。山の木ぞ高くなり侍りける」と申す。一院より、右馬頭なる人御使にて、朱雀右大將の朝臣の家に、わたりおはしましたり、と承るは、まことにや侍ら

〔語釋〕
（一）「びく」は「びん」なる
ムシ

〔異考〕
（二）知らねば―知らずな
む

（三）給ひつ―給へば

（四）居給ひぬ一院は―居
給ひぬ嵯峨院は御物語御
堂の御床の上にてし給ふ
一院は

む。内侍のかみの幼き人に琴教へて、今日もとの所へ歸り侍るを、かよる序な
らでは、聴きがたく侍るを、まことに御幸侍らば、参りてと思ふ給ふるを、
例あらぬことならば、びくなくや侍らむ。

とある御返事、

嵯峨承りぬ。こよにも、まだ聴き知らねば、ゆかしき人も侍り。兒のならひ給

ふらむ聴かまほしくて、物し給へるに従ひてなむ。まうで來つるを、對面も

おほつかなきを、必ず御幸あるべし。例はありとおほえ侍る。

と聞え給ひつ。大將御むかへに参り給ふ。左の大殿、右の大殿、それより外は、あ

る限御供に仕うまつる。すなはちおはしましたり。太政大臣のおとど、次に参り

給ふ。院の御子たち、この御腹の御子七所、清らに美しけにて、五所は御かうぶ

りし給へり。二所はまだ童にて、うち續きて居給ひぬ。一院は、清らにうるはし

く、そびやかにおはします。御覽じまはして、朱雀人々みな殘なく物するに、内

裏には、誰かさふらはるらむ」左のおとど、正朝大藏卿源朝臣、藏人少將信
方、さては六位の男どもなむさふらふ」と啓し給ふ。車、東面をきはにて、西
は三四町まで立てたり。次々の下人ども、路なく見ゆ。

午かぎりて、酉のはじめに樓よりおり給ふべし。樂人も皆平張にあつまりぬ。一
院御覽じて、右大將、左のおとどに、朱雀時やうくなりぬめるは、いづら、遅

し」と度々仰せらるれば左のおとど、頭中將、右近、藏人少將、こなたかなたに

まかりて、「はやとぞ仰せよ」と宣ふ。立ちて事の行事す。西の方の錦のひらばり

より大鼓をうちて、靜にやうく樂し出づ。八人の童、四人は孔雀の裝束す。四

人は胡蝶。左右に立ち出でて、いとをかしう舞ふに、吹物、彈物あてて賜はす。

宮たち、「手おそし」と宣ひて、吹き、彈き合せ給へり。院、大將を召して、朱雀か

の人々もはや物せられよ」とて、車よせて、かの西東の反橋に寄せさせて、一

院の上は氣色おはする御心にて、多くの大臣たち、大宮方々に見せざるに、藤

◎校降女、大宮樓を下る。
筆の仰言。

〔語釋〕
（一）誤あるムシ

〔語釋〕
〔三〕大宮の聲を俊隆女に用ひさせよ

〔四〕犬宮の事は我世話すべし

〔五〕誤りあらんか、一本「御かた」を「御くだ物」とかけり

〔考異〕
〔二〕心もなげに―心もとなげに

〔二〕ながら―給ひて

壺をうしろめたく思ふと、心もなげに、一つにては皆狭けなりと御覽じて、かの東の放出の母屋、二間を、屏風立てて、「犬宮、内侍のかみは、こよにもものせらるべきなり」と宣はすれば、喜びながら屏風立てしつらひ給ひつ。人々心ごとに見給ふ。左のおとど、正頼「遅し。はやく」と仰せらる。嵯峨院、「忝けれど、大宮の御輦、内侍のかみ。一院のは犬宮」と仰せらるれば、承りて、右のおとど、いと花やかに行ふ。左のおとど、正頼「内侍のかみの御車寄せさせ給はむや。正頼、犬宮に物すべし。右大將の朝臣、思ふとも、身を一つにはえ分けじ」と宣ふ。右大將、仲忠「こなたかなたに早々」と宣はすれば、蘇枋の裙濃の裳出だして、晝かき、縫物したる几帳ども、三十人のおとな取り續きて、童四人、繚のうへのはかま著たり。又犬宮の御方の人に、紫の裾濃に縫物して、唐組を紐にしたり。三十人、童の長これは少し劣りなる、ながくとある反橋の上に、さし續きたる、いとをかし。まづおとど御かた参りて、しもに、右のおとどに譲り聞え給ひて、犬

〔考異〕
〔二〕脇息とりて―脇息をとりて

〔二〕こよばく―こくばく―そこばく

宮おろし奉り給ふ。右大將抱き奉り給ひて、几帳のさき、童、こなたにも、襦、火取、薫物に銀、黄金の壺二つするもの、脇息とりて歩みたり。長とよのひ、髪長に一尺餘りたるが、容貌うつくしけなり。隙なくつどきたる几帳、色のうちき、裳の裾どものはづれたる、いとなまめかし。近き車どもよりも遙に見ゆるいとめでたし。左のおとど、几帳に添ひて、はつかに犬宮の御様體を見給ふに、いみじく美しけにめでたう見給ふこと、あて宮の兒におはせしにこよなう優り給ひて、あてになまめかしう、見驚くばかりいみじきものかな、こよばくの君たち、一二の宮ばかりこそは、品まさりては見給ひしかど、まだ小き程に、いと斯うは見給はざりき、これは、ゆよく變化の物と見給ふ。樂の聲、御前の御子たちよりはじめて、彈物吹物、聲しづかに等しくて、おもしろきこと限なし。嵯峨院、御扇して、拍子うたせ給ふ。一の院、時々唱歌し給ふ。かよる事又あらじと見聞えたり。

〔語釋〕
〔三〕「桔梗色」歟

〔考異〕
〔一〕「させーナレ」

〔二〕給ふー給ひ

〔四〕すきかけ玉虫のーすきかけ犬宮玉虫の

御車寄す。四位、五位殿上人、階よりおりて、牛かけて寄せたり。一院、朱雀かの車、異の隅の勾欄はなちて寄せさせよ」と頭中將に宣はすれば、左右大臣さきに立ちて歩み給へり。右大將、犬宮の御車ひき給へり。右大將、右のおとど、几帳さしておろし奉らむとするに、「例の儀式あるを」とて御氣色賜はり給ひて、まづかんのおとど下り給ふ。次に犬宮の御車寄す。左のおとど手かけ給へば、次々の人おりて寄せたり。几帳、夕日の隙影より、内侍のかみ、紅の黒むまで濃き唐綾のうちあはせ一かさね、三重のはかま、龍膽の織物のうちき、唐のこま、羅かさねたり。地摺の裳、村濃の腰さして、唐の織物の、あか色の二藍かさねて、唐衣著給へり。犬宮、唐撫子のからあやのうちき一襲、きかう色の織物のほそなが、三重がさねの御はかま。内侍のかみ、るざりよりて、下し奉り給ひて、御衣ひき繕ひなどし給ひて、るざり入り給ふすきかけ、玉虫の巢よりすきたる様に、あなめでたと見えたり。小き扇さしかくし給ひて、るざり入り給ふを、一院

〔語釋〕
〔三〕正頼の心

〔四〕さかのの孫ども也

〔考異〕

〔一〕かみの「の」ナレ

〔二〕装の「の」ナレ

●さかのの四人の孫人々に愛てらる。

几帳のほころびより御覽じて、いと美しとおほす。内侍のかみの様態、細やかになまめかしう、あな清らの人やと見えたり。たゞ今二十餘ばかりに見えて、裳の裾にたまりたる髪つやくとして、すそ細からず、又こちたからぬ程にて、引き添へられてみざり入り給ふを、左のおとど、几帳さし給ふまよに見給ひて、いとみじかりける人かな、年の程大將の妹といはむにぞよき、仁壽殿の女御には、様體けはひも勝り給へり、昔の心ならましかば、かよるを見過さましや、と妬うおほえ給ひ、辛くおほしたり。

この四人の童、一人はかたち、色いと白く美しけにて、舞も勝れてかしこくするを、御前よりはじめて、「彼はいとをかしき童かな」と興じ給ふ。院、朱雀いと小くて、かしこく舞ふものかな。彼、こよに召し寄せて、樂も靜に仕うまつらせよ」と宣ふに、左のおとど、正頼四人はこの家に侍る童なり」と啓し給へば、朱雀いとをかしく整ひて、いかで斯くあるらむ」と宣ふ。御子たち、御方々、これに目

〔語釋〕
（一）田舎形氣にて恥かしがりて逃げたるならん

（三）せめて二人だけも此弟宮たちに奉りたしと

〔考異〕
（二）いとをかしうーいとをかしう

をつけて、見興じ給ふ。御階のもと近くて、「更に、さばかりの程にて、かく舞ふなし」とめで給ひて左右大臣、袖脱ぎて賜へば、御子たち、殿上人、同じく脱ぎかけ給ふに、舞ひさして逃けてゆけば、「かれ留めよ」と召すに、恥ぢて参らねば、人々興じ給ひて大將に、「誰が子ぞ」と問ひ給へば、仲忠「しかくもの者どもの、兄弟の子どもにて侍り。鄙びて、斯くまかでつるなめり」と啓し給ふ。宮たち、上達部、「宜なりけり。時持は、いと清けに侍りしものなればにこそありけれ。聲いとかしこく出で侍りしものなり」と申し給ひて、召せば、参りたり。仲忠「笛なむよく吹く」と申し給へば、「いとをかしき事かな」とて賜ふ。四人ながらいとをかしう、吹かぬ笛なく吹きたてて、まだ小きも、顔かたち愛敬をかしけにて、かよる才をいと美しくすれば、院の宮たち、我もくと、得むと宣へば、左のおとど東宮の御弟の宮たちも、かよる事するを、然しもあらぬをだにもてなし給ふ、二人をだに、と思ひ給へど、同じやうなる宮たちの、乞ひ領じ給へば、えともかうも宣

〔語釋〕
（一）宮は東宮

（三）あて宮が

（五）二宮歎

〔考異〕
（二）をかしうーをかしう

（四）五の宮「の宮」ナレ

●朱雀院、嵯峨院琴の秘曲を盡さんことを俊隆女に迫る。俊隆女の煩悶。

はぬを藤壺、中にも勝りたる二人を、いかで宮、二の宮に奉らむ。容貌はまさるもまた有りなむ、小くてさまぐをかしく、宮たちもてなし給ふに、嵯峨院さへ、「二人は院にさふらはせむ」と宣ふを羨ましくおほして、二の宮の、御簾のもと近くおはするに、あて宮「かの笙の笛吹くは東宮に奉らむ。横笛吹くは我得む」と大將に宣へ」と聞え給へば、大將の居給へるに、はた斯くと宣へば、仲忠「いとよく侍るなり」と聞え給ふ。一院の五の宮六の宮、「我も得むとするなり。いかでか」と宣へば七の宮、「然ば、こよに得むとしつるものをば不益なり」と宮、「然ば、見てやあらむするや」と宣へば、仲忠「かの今四人さふらふも、いとよく侍り。それらをも」と申し給へば、「いな、それは舞もえせず、悪ければ、辛きなり」と宣ひて、かたみに幼くおはするどちぞ宣ふ。院の宮たち、あるは「上に申さむ」など宣ふ。院の上、いづれともなく美しく見奉り給ふ。かくて日暮る上程に、一院御床より下りさせ給ひて、内侍のかみの几帳のもとに

- (一) 昔時々ー昔も時々
- (二) 昔時々ー昔も時々
- (三) こよなくーはかなく
- (四) 御「は行なるべし」
- (五) ようーかう
- (六) はかなくーしうもー
- (七) 給かくし「は給へかし」歎
- (八) 「忘れねど」歎
- (九) 涼

おはして、朱雀あさましく、覺束なくもてなして、年頃も、自らこそとてなむ。
 今日(一)は、昔時々聞かまほしきことも飽かずなりしかば、ところせかましくとて車
 など物せし(二)かど、効なくて止みにき。今は心安きさまにてだに、如何にと人知れ
 ぬ志(三)もありき。こよなく思ひおとされたるばかり、世にくち惜しう妬きことは
 なくなむ。よしや思ふ心のうちこそ及ばざらめ、易かるべき物の音だに。身の爲
 は、かくもてなざるよこそつらけれ」と宣はすれば、内侍のかみ、俊隆女いと畏
 き仰せごを、明け暮れおろかならず思ひ給へながら、年頃は、宮、わか君たち
 の御事を、とかく見給へし程にこそ、時々もえ参り侍らで。御琴は、いとよう聞
 かせ給ふべかりけるは、ほれなくしうなりにて侍れば、はかなくしうも侍らじ。
 如何に侍らむ」と聞え給へば、朱雀いとかしこくも宣へるかな」とて、朱雀「かや
 うになむ教へつる」とて引き寄せてきかせ給かくし。かのほそをの曲の物「今三
 つ四つは」とありしも、更になむ忘れぬと
 中納言の朝臣、「七月七日の夜、また聞

- (一) のたまよへし「は」も
- (二) のし給ひし」歎

- (一) 心ばへるかたー心ばへ
- (二) なにかーなにかは

- (一) 心ばへるかたー心ばへ
- (二) なにかーなにかは
- (三) 心ばへるかたー心ばへ
- (四) なにかーなにかは

えぬ物の音なむありし」とものせしかば、すべて、りうかくの調にはじめて、か
 の七日の夜のこと、今宵きかせ給へ。いつか、又かよる夜の事あらむ。嵯峨の上、
 年頃ゆかしうせさせ給へる、残少き御世になり給ひたる、斯くておはしました
 るいと畏きことに、人知れぬ思ひ過しも心とどめておほされば、たゞ、今日やそ
 のしるし見ゆべき。何事も思されぬにつけても、有りがたう聞えしことども、の
 たまふへしことども、今日の夜の御心ばへにこそ、愈限なく覺ゆべけれ。大將
 の朝臣の悦なども、言ひてまし。なほさまなく心に心憂くこそ思ほゆれ。此の聞
 ゆることどもは、然思はましや。如何に」と宣へば、俊隆女「けに理と聞えさすべ
 き、疎ならぬことをこそ、なにか啓し侍らましか、とより外にと思ひ給へしなむ。
 まことに、琴はあまた侍りともおほえ侍らぬを、りうかく、ほそをばかりこそ。そ
 れは大將をりうに仕うまつりしを聞召され侍らむものを」と聞え給ふ。右のお
 とど心安からず見奉り給ふ。朱雀「左のおとどの心ばへいかに、なほたどならじ

〔語釋〕
(一)未詳

(五)俊隆

(七)雷鳴壺

〔考異〕
(二)みづしに―みつゝに

(三)責めさせ―めさせ

(四)入れて―入れ〕ナシ

(六)啓し―きこえ

(八)彈き給はずなむ―ひ
かすなむ―ひき給はなむ

はやと思ふに、右大將、心もとなくこそ覺ゆれ。かのりうかく、ほそを、又かの治部卿の朝臣の集の中に、今かみに書き消たれたりし、さいこくに思ひくすべしとありしみづしに」と度々責めさせ給ふに、いみじく清らなる、高麗の錦の袋に入れてあり。とり渡すに、匂ひたるが、えならず、奉り給ふ。朱雀「今一つあり」と仰せらるれば、ともかくもえ啓せず。

内侍のかみ、如何にすべきにか、と思ひ煩ひ給ふほどに、嵯峨院、近くおはしまし、大將の朝臣にもせし事ども、傳へ聞き給ひけむや。昔の人の、勘事、罪にあたるを、今は残なくなりたる身なるを、此の身にゆるし給はど、嬉しくなむ」など宣ふさま、らうくじく愛敬づかせ給へり。俊隆女「いと畏きこと」と啓し給へば、嵯峨院さらば、かのりうかくよりしてなん風、はし風などいふなむ。かんなりにて、大將中納言のひきし琴の聲なむあまたある心地せしを、空の雲の騒がしくらうがはしき事ありとて、彈きさして、残その世に彈き給はずなむ。いと聞か

〔語釋〕
(二)とく―解く 疾く

(三)「いかでかはと怪しくなるべし

(五)俊隆女の心

〔考異〕
(一)彌きたる―聞えたる

(四)申し―きこえ

まほしき。又はし風などは、仄に聞きて、ことさまに聴きたる人なし。もしそれによあらむ、と思ひあてに傳へ聞く様なむありし。それ、今宵聴かせ給はど、此の世にも、世々にも盡きす嬉しくなむ。これをきかせ給はで、後の永き世に、人にきかせ給はど、世中に恨となむすべき。

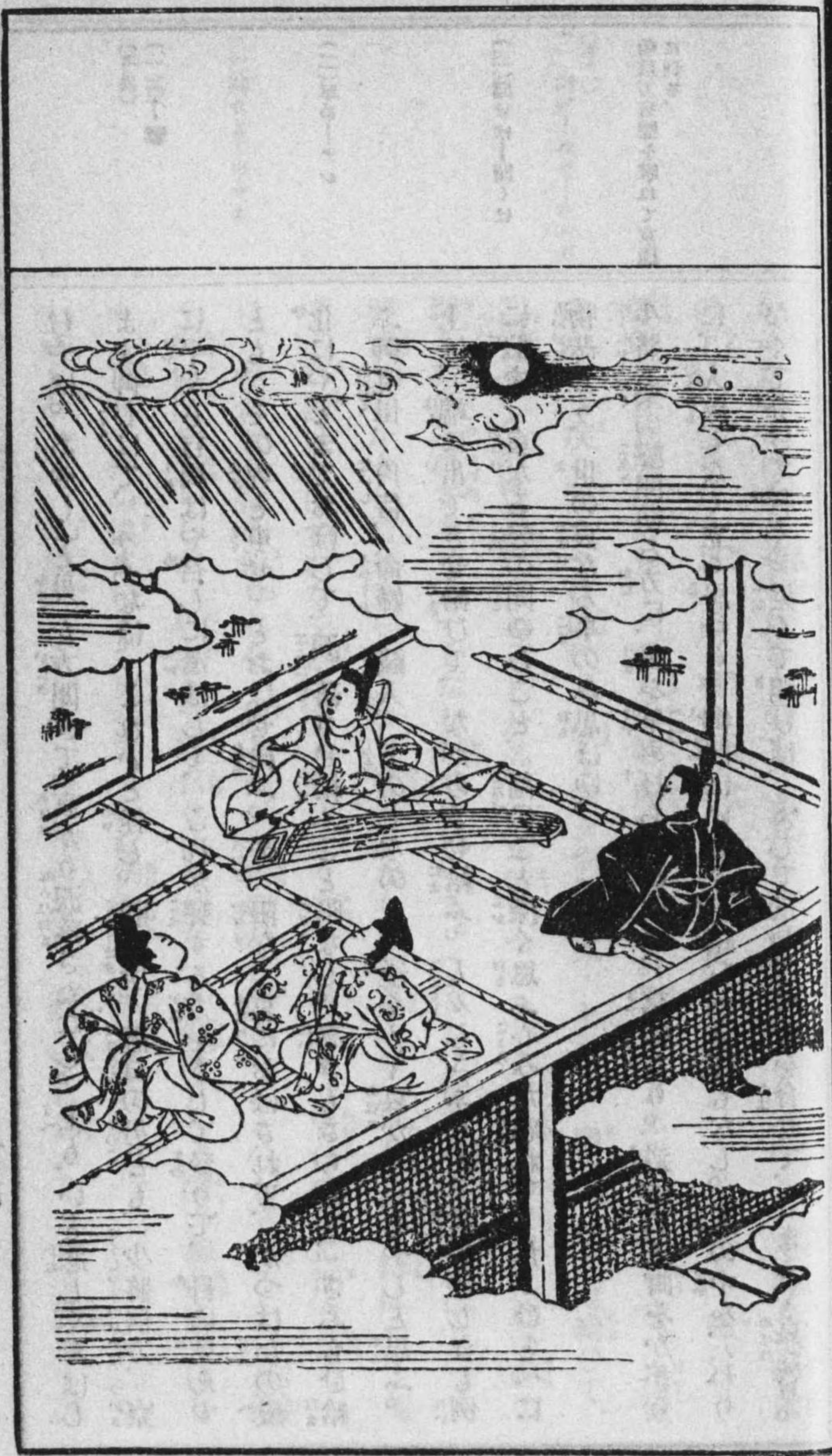
いまは身のかぎりと思ふするの世にもとの恨をとくもきかなむ
内侍のかみ、源中納言聞き給ひて、かく啓し給はむことのいかでかは、怪しく思ひ給ふ。御返し、

俊隆女「二葉にておもほえぬかな結び松うちとけてこそ人はひくらめなむ風は、數多しらべありとも思ほえ侍らぬ」となむ申し給ふ。朱雀院は、氣近くなつかしくて、萬の理なることを宣はせ、嵯峨院は、御年高く、かたじけなくおはしまして、古をかけて逃れがたく宣ふ。如何すべからむ、と思ひわづらひ給ふ。故治部卿は、ほそを、はしふ、二つの琴を立てて宣ひしやう、「世中今は

(考異)
(一)殿上人—殿上の人

(二)給へば異の—給へば
東異の

で來、星さわぎ、空のけしき恐ろしけにはあらで、珍らかなる雲立ちわたる。廂
 に居給へる人々、狭くて、人氣に熱かはしくおほえ給へる、忽に涼しく心地
 たのもしく命延び、世中めでたからむ榮をあつめて見聞かむやうなり。同じ調な
 がら、はるかに澄みのほりたる聲、心細く哀にて、上は空をひどかし、下は地の
 底をゆるがす。四方の山、林に聞きわかれて、悲しう哀なること、世の中は常なき
 ことも、忽に思ほえて、涙落つること留めがたく哀なり。帝よりはじめ奉り、そ
 こばくの上下、聞き給ふに涙落さぬなし。
 此の琴の音聞ゆること、響風に隨ひて、近くは内裏に、夜さりの威儀のおものに
 就かせ給はむとする程に、心ほそう悲しう、哀なる物の音、風につけて聞ゆるを、
 驚きあやしがらせ給ひて、今上殿上人、此の物の音は聞くや。何處にかあらむ。
 (一)いと怪しと仰せ給ふ。「然侍る。いとあやし」と申す。強ひて聞かせ給へば、異の
 方より聞ゆ。藏人の少將、面白くとも、京極の大將の家の聲、内裏まで聞え



〔考異〕
(一)空一覽

(二)早め一ナレ

(三)聞けば一聞くは

〔考異〕
信方琴聲を尋ねて京極に到る。

むやは。あやし」と男女方聞きて、哀がり涙落さぬなし。上も、いと悲しくおはします御心にて、今上なほ、これいと怪し。藏人所、瀧口の男ども、少將信方、寮に早からむ馬はや召しに遣はして、これが聲する方をさして参りて、目に見えずとも、その程と申せ」とおはせ給ふ。帝、限なく哀におほされて、かつは物の變化にやとまでおほして、涙落させ給ふこと限なし。高きもさらぬも、さふらひ給ふ御乳母、内侍、命婦、藏人、下のしなもの、泣くく哀がり、あやしと思ふ。上は、端に出でさせ給ひて、ながめさせ給ふ。人々もさふらふ。空のけしきも例に似ず、哀なる聲の聞ゆること、萬のこと深く思ふ心みな忘れて、たどひとへに物悲しう、世の哀なる事のみ思ほゆ。

少將、樂の聲聞ゆる方に、馬を早め打ちてゆけば、京極なり。道は二三町をかぎり、人際もなく立ち居たり。御門はいとど足踏むべき隙もなし。人の中を、わりなくて分けて行く。近く聞けば、まして三つ四つ聲を合せて、さまざま哀なり。

〔考異〕
(一)何ぞ一なぞ一なんぞ

(二)奏せよ一申せよ

いふかひなけなる姿したるものも、哀がり面白がり居たり。辛うじて参りて御階の下にて啓せむと思ふに、樂の聲、琴の響に聞きつけ給ふべくもあらず。強ひて、聲のかぎりを出だして、「藏人少將、藤原信方、内裏よりさふらふ」と申す。内侍のかみ、疾く聞きつけ給ひて、琴を弾きやみ給ふ。上たち、聞きつけさせ給ひて、「何ぞ」と問はせ給ふ。信方「しかく聞え侍りつるを、上聞召しつけて、此の聲の聞えむ所を尋て奏せよ」となむ仰せられつる。こなたに聞え侍りつれば」と啓す。御涙どもかませ給ひて、「いよく珍らかなりける事かな」と人々驚き給はぬなし。朱雀「内裏におほつかなく思さるらむ。疾く参りて奏せよ。昔ほのかに聞き侍りしに、飽かずおほえ侍りしを、然りぬべき折になど聞きて、ものして侍るを、耳近く哀に聞き侍りしが、内裏まで聞召しけるかな」と仰せらる。院の御前よりはじめ奉りて例の儀式にこと加へて、みな御酒など度々まるれり。しばし有りて、嵯峨院、さらに、嵯峨今宵なむ、露心地に思ふことなく覺ゆる。

(語釋)
(一)誤あるべし

(五)嵯峨院が

(考異)
(二)これを―かれを

(三)聲に合せて此の童べ
四人舞ひて侍らば―ナシ

(四)侍らば―侍らむは―
侍らむ

昔、内裏にて折節の節會、花の宴の折には、面白くかしこき文を興じ、よろづ思ふ事なくて、身をまかせて、年月を過し、をりくくの面白かるべき遊をし、琴弾かせしに、朝臣の世よりなむ、有りがたく勝れては覺えし。此の琴の聲になむ、世に心もなく物覺えつるに、今宵なむ、天の樂も斯くやあらむ、と覺ゆる」と宣ふに、源中納言、涼ほそを風は、大宮の産屋に、大將のたどいさよかかき鳴らしして侍りしは、たど面白くなむ侍りし。今宵聞き侍るには、いづれなれど、調ことにかはりて、又なくさまぐに哀に侍りけり。まして、七日の夜の琴は、いみじくこそは侍りしか。これをいさよかかき鳴らし給へらむ聲に合せて、此の童べ四人舞ひて侍らば、いかに面白くになく侍らむ」と啓し給へば、これに勝りて、けに如何ならむ、と思ほす。一院、哀なる事を心深くおもほす御心に、ましてまだ聞かせ給はぬ様の、いと珍らかに悲しう思さるゝに、世々を経とも忘れがたき人かなと、愈あさましき御心添ひて、朱雀さて、かのはし風をなほかき鳴らし給へ

と宣はす。

(語釋)
(一)俊隆女が

(二)「何とか」は「何とも」
歟

(四)はし風の琴を仲忠が

(五)「こと」を「の」を「衍文」
なるべし

(考異)
(三)なるに―なれば

(六)どもにも似ずしも」
ナシ

夜半ばかりになりゆく。切に、とかく啓して逃れ給ふを、責めて肯き給はず。朱雀「何かは、せぬわざくの事のあらむかし」とていと近くるざり寄せ給ふに、いとどむくつけく、世を何とか、今はまして思すまじき御心なるに、思ひ煩ひて、俊隆女「いと怪しく、さらに珍らかなる様の侍らぬを、あいなう侍るに、左のおとど、春日詣などに、みな聞きなしたるなむ侍らむ。大將に仰せごことを」と申し給へば、いとよく打笑はせ給ひて、朱雀疾くこそ、かく教へ聞え給ふべかりけれ」とて大將を近く召して、責めさせ給へど、疾に立たねば、「一院の御許されなめり。早う」と宣はすれば、内侍のかみ、扇をうち鳴らし給へば、立ちて、樓に昇りて、取りて参りたり。嵯峨院、やがて取らせ給ひて御覽するに、琴の様も例に似ず、清くめでたう、美しけなることを、昔より、同じ唐土にわたりて、持て上りたりし、彌行が琴どもにも似ず、治部卿の數多わたしたるにも似ず。御手すさびに、

〔語釋〕
〔一〕「あめれと上たちも」
歟

〔三〕女が髪に垂れたる髪を耳にはさむこと、常ははたらかんずるとききの仕度

〔四〕晋の王質が石室山に入り仙人の圍碁を見て斧の柄の朽るを知らざりし故事

〔考異〕
〔二〕ころ ころこくばく

〔五〕仙人一山人

〔六〕圓リーナ

緒を一筋鳴らさせ給ふに、ひときいと珍らかなり。怪しとて、次の緒をかき鳴らさせ給ふに、露ばかりの音もせず、聲もなし。いと恐ろしき物にこそあめれ。上たちも怪しがり給ひて、几帳の内へさし入れさせ給ひつ。
内侍のかみ、賜はりて、引きよせ給ふに、まづ涙落ちて、昔宣ひしこと思ひ出で給ふことどもあり。強ひて涙を念じ、心をしづめて弾かむとし給ふ。こよばくの御子たち、上達部見て、これを如何ならむと、心を惑はして思ほえ給ふ。御方方、あるは耳はさみをし給ひて、晝のやうなる御殿油を、おしはりて、端近く居給ふ。内裏の御使も、山中に入りて多くの年を過しけむ例のやうに覺えて、歸り参るべき心地もせて居たり。此の琴は、かの作り出で給へりし琴の中の、勝れたる一のひときにて山中の仙人の勝れたりし手は、樂の師の心とよのへて、深き遺言せし琴なり。唯、はじめの下れる師の教へたる調一つを、まづかき鳴らし給へるに、ありつるよりも聲のひとき高くまさりて雷いと騒がしく鳴りひらめきて、

〔考異〕
〔二〕雨よりも一雨のこと

地震のやうに土うごく。いとうたておどろくしかりければ、たど緒一條をしのびやかに弾き給ふに、俄に池の水たよえて、遣水より、ふかさ二寸ばかり水流れ出でぬ。人々あやしみ驚きぬ。一條はおもしろく、二條は悲しく、哀なる事はじめよりは勝れたり。此の音を聞くに、愚なるものは忽に心さとく明かなり、怒り腹立ちたらむものは、心和かにしづまり、荒く烈しからむ風も靜になり、病にしづみいたく苦しからむものも、忽に病おこたり 動き難からむものも、これを聞きて驚かざらむや、とおほゆ。いみじき岩、木、鬼の心なりとも、聞きては涙落さざらんや、と聞ゆ。源中納言、いとみじく、萬のこと覺えず、心にしみて悲しくおほえ給ふ。一院の上は、御目より、涙雨よりもしゆく落させ給ふを見奉り給ふに、けに如何にきこしめすらむ、と悲しくおほえ給ふ人々、多く、見まはし給へば、一人として、も、疎に思ひ、泣き給はぬなし。大將は、いまだ此年頃聞き給はぬに、親ともおほえ給はず氣恐ろしきまで、悲しうおほえ給ふ。

(語釋)
(三)誤あるべし

四人の童へ、細くやはらかなる聲の面白きを出だして、秋の野の蟲の鳴かむよりも哀なることをいふを、同じ聲に合せて舞ふに、愈哀がらせ給ひて、御扇して拍子うたせ給ふ。朱雀院の、

おもしろく哀にためしなき事をきよて苦しきはなにのなににせむ

といとめでたくをかしき御聲に合せて誦せさせ給へば、嵯峨院、

哀なることのしるしの見えざらば何をか後のかたみにはせむ

(考異)
(一)面白きを「を」ナシ

と聞えさせ給へば、人々めで聞ゆ。朱雀今しよし」と宣はすれば、俊隆女「日頃みだり心地の惱ましく侍るけにや」とて弾きさし給ひつ。朱雀院、なかく此度は、いよく飽かずおほえさせ給ひて、内侍のかみに、斯く、

朱雀の音のあかざりしより白雲のおりるて今日ぞうれしかりける

御返事、

俊隆女塵つもる山もなにせむ雲かよることのほかなる宿をうれしむ

(二)「ふを」を「ナシ

俊隆女、犬宮をしてりうかく風を弾かしむ。妙なる音。人々の驚嘆。

(語釋)
(二)朱雀が

(三)俊隆女の心

(五)調子の變るは河故ぞ

(考異)
(一)とは「は」ナシ

(四)りうかく風「風」ナシ

とは、身にこそ思う給ふれ」と聞え給ふ様のいとめでたければ、いかで萬に斯かりけむとおもほす。

犬宮に、りうかく風を、かよる大方の聲に合せて、弾かせ奉りて、試みむと思して、弾かせ奉り給ふ。院の上、朱雀「かはるなるは」と宣はすれば、俊隆女「りうかく風を、曉の調にもし侍る」とて我弾き給ふやうにて、弾かせ奉り給ふ。

曉になりけるに、いとみじく面白く、樂の聲、鼓の聲を、しばし整へさせ給ひて、みな一度におし入るとやうに消ちて、たゞ琴の聲のかぎり、上へのほりて、澄み響くこと、大將の御手よりはまさりたり。大將のみぞ、人知れずあ

やしと思ひ給ふ。源中納言の、萬怪しく、りうかくの聲は、曉なれど少しこそ

かはれ。此の斯うさまの音は、大將は同じやうにはえ傳へ給はざりけることかな

と宣ふを、近き程なれば、一院の上、朱雀「けにまだ聞かざりつ。萬の樂の聲みな消ち、琴の聲のかぎり、聲々におもしろう哀なるは、さる調をはなれてありける

(一)誤あるべし

(二)樂人等の申す也

(三)犬宮が強くなりと知らせんとて

(四)わきて一まして

(五)いと一ナレ

(六)見給ふ一見給はする

(七)給ふを念じさせ給ひて一給ふ念じて

には、かの樂にぞ。いま少し、樂の聲高く、仕うまつれ。あやしく樂の音のたれ
 (一) であるかな」とて遣はす。「樂の音、例かぎりあれば、曉に合せて仕うまつる」
 と申す。なほ琴の聲はさまざまの響あまたに別れて、面白うて、樂の聲はしづみ
 (二) て細う聞ゆ。ほのくくと明けゆくに、風の音はせで、空すこし霧りわたりすみた
 り。折の面白きに、琴の聲わきて哀なり。内侍のかみ、一院にかくと聞かせ奉
 (三) らむ。とて、俊隆女「いとようも弾かせ給ふかな」と聞え給ふに、おどろかせ給ひて、
 几帳のかたびらふと引き揚げて、御覽すれば、内侍のかみの彈き給ふにはあらで、
 燈影のあかきに、犬宮のいと白う美しけにて、彈き居給へるなりけり。早斯くな
 (四) りにけりと見給ふに、いとみじくかなしく覺えさせ給ふに、涙こほれさせ給ふ
 を念じさせ給ひて、朱雀「これは、此の兒の彈くなりけり」と宣はするに、「如何に
 (五) 如何に」と人々驚きて、哀に、「物のついではいみじかりけるものかな」と聞きさわ
 ぎ給ふに、けに「理」と聞えたり。「たゞの人は、一生を添ひ居て習ふとも、更にえ

(一)しちがーかしち

かくは侍らじ。これは、然るべくて彈き給ふなりけり」と聞ゆ。右の大殿此の中
 にすぐれて嬉しうおほえ給ふこと限なくて、兼雅「喜にも、涙とどめられず侍り
 ける」と啓し給ふをば、女御の君、一の宮の御心、いと哀にうれしくおほえ給ふ。
 嵯峨院「老は厭ふまじかりけり。いみじう聞かまほしと思ひし、昔の手をひき、
 末の世にかく有りがたき事の留まりぬること」と興じ給ひて、いとになく上手に
 吹かせ給ふ高麗笛を、これに合せて吹かせ給ふに、さらに兒の彈き給ふやうなら
 ず、手のなりにけることと、いみじく哀なるに堪へずと宣はせて、立ちて舞は
 せ給ひつよ、
 嵯峨ひめ小松ひきつることに忍びあへず白きしらがの新羅舞せむ
 (一) と宣はするに、右のおとど、
 兼雅雲の上のしたにもかよふ末の世にひきとどめつることの嬉しさ
 式部卿宮、

この世にはあらぬことと思ほゆる空にはひととき水もながれて

右大將

仲思ことの音の昔にすめる曉は水もながれて悲しかりけり

となむ。人々ありけれど書かぬなり。源中納言は、大將に、速何事をか思ひ給ふ

と聞え給へば、藤壺の御局を見やりて、仲思いかでなほ物をば思はぬぞ。心憂の

御心や」と宣へば、いらへ、速などかは。如何聞きなさむ」とて笑ひ給ひぬ。

朱雀院今宵の内侍のかみの祿に、いかなる事をせむ。犬宮に、いと上手に、同じ

ごと弾き給ふにつけても、いかで珍らかなることをせむ、とおほす。萬兩の黄金

も悪くおほして、嵯峨院に、朱雀世を去り侍りて、今宵の祿をこそ、え心のまよに

侍るまじけれ」と申し給へば、嵯峨けに、如何はあるべからむ。ことには、世を

さりて久しくなりたり。大將を、人より越して、大臣になして、ことにて大變

せさせたらむ。昔の靈も、少しうれしと見るべきを、かの正身には、正二位の加

(語釋)
(五)俊隆の體
(六)俊隆女

(考異)
(一)水も一水の
(二)書かぬなり一かぬ
さは本のまゝなり
(三)いらへ一いざや

嵯峨院の奏請によりて
俊隆に中納言を贈られ俊
隆女正二位に叙せらる。
朱雀院の奏請によりてさ
がの孫四人衛門尉にな
る。

(四)珍らかなる一珍らし
かな

(語釋)

(一)我その由を今上に申
上げん

(四)誤あらんか

(考異)

(二)それがし一ナシ

(三)はじめて一めして

(五)左右大臣左大將一左
大臣左大將一右大臣右大
將

(六)給へる一給ひつる

階をものして、珍らかなることをとどめ置かむなむ、かの身に榮あるべき。(二)に聞えむ」

内大臣に右大將藤原の朝臣それがし、内侍のかみ正二位に加階し給ふべし。

中宮、東宮、大臣家の大變に準へて、内侍のかみの家に大變ゆるされむ。數

のまよに女大變あるべし。その宣旨をはじめて、嵯峨院も奏しくだす。かの

日の設の物は、院よりおくるべし。次々の太政大臣、同じく傳へて用意せら

るべし。朱雀院の女一の宮を、男に準へて、四品の位賜ふべし。この由をお

ほせ給ふべし。

とかよせ給ひて、左右大臣左大將のをばかよせ給はで、つかさ位をこれに書きつ

けて、近う召して賜ふに、二三人は書き出でて奉り給ふ。右大將、その御氣色

を賜はりて、仲思仰せごとは、限なくかしこけれど、さらに此の度の大將の宣旨

は、承らじ。強ひて御願みさふらはど、忝く御幸せしめ給へる。畏まらむ

爲に、ところにかうぶりを賜はらむ」と度々啓し給へば、朱雀院は、嵯峨院へ、
朱雀「啓せらるよまよにも」と聞え給へば、唯御消息にて、左大辨召して、嵯峨院
内裏に奏せさせ給ふ。

〔語釋〕
〔一〕「まよ」は此京極の
舊邸をいふ歟

〔考異〕
〔二〕ことには思う―こと
に思ひ

嵯峨年高くなり侍りて、心地のほれぐしうなり侍るに、此の内侍のかみの家、
昔見給へしゆかしさにまうで来て、琴ひかせて聞き侍るに、珍らかなる事
どもなむ。故治部卿の朝臣、おほやけ人として侍りしあとだに、身を公に
したがへて、唐土の使にまうで、あたの風にあひて、多くの年月を経て、父
母の顔も相見ずして、悲しき目を見て、たましく歸り侍りて後、同じきやう
に、いくばくも侍らぬ程になくなり侍りにき。内侍のかみ、男ならましかば、
一度に大臣にもなさまほしくなむ。今宵のことには思う給ふる。これ、いと
いと易きことに侍るを、唯今宣旨くだし給へ。
と奏せさせ給ふ。嵯峨「そのかうぶりには、右大將の朝臣大臣に、とと思う給ふれ

〔語釋〕
〔一〕さかの孫

〔二〕右大辨忠澄が

〔三〕仲忠が大臣を辭した
る由を

ど、度々逃れ申せばなむ。故治部卿の朝臣、三位になむ侍りし。贈位の中納言にな
させ給へ」と奏せしめ給ふ。一院は、朱雀「嵯峨院の御幸侍るに、對面賜はらむと
てなむものし侍る。勞らむと思ひ給ふる童四人、左右の衛門尉に缺侍らむに、こ
れ同じうはなさまほしくなむ」と奏せさせ給ふ。事(一)のよしを奏す。委しく問はせ
給ひ、聞召して、今上(二)けにいと珍らかなりける人の琴の聲なり。輕々しからずば
參りても聞くべかりけるをとなむ覺えし」と宣ひて、嵯峨院の御返、
今上(三)畏まりて承りぬ。けに、難く例なきことに侍りとも、仰せられむことは、
いかで。ましていと易きことどもに侍り。

右大將のことを聞かせ給ひて、今上「なほ用意ある人なりや」と宣はせて、治部卿
を中納言になさせ給ひ、京極にかうぶり給ふ。内侍のかみのことも、奏し給ふま
まなり。朱雀院の御返、

今上かねて仰せられ、氣色承らましかば、自らも參り侍るべかりけるものを。

衛門のつかさどもは、行末の缺も心もとなく侍り。今も、唯仰せられむになむ。

〔語釋〕
〔二〕大將になきを「なるべし」

〔考異〕
〔一〕この事―二の事

〔三〕給ひつる―給へる

と奏せさせ給ふ。左大辨立ち歸り参りて啓すれば、宣旨の疾く下りたるを、院の上たちもよろこばせ給ひて、上達部の中に告げさせ給ひて、宣旨高く讀むを、内侍のかみ聞き給ふに、治部卿の所に、涙おち悲しくて、身の内侍のかみになり給ひしよりも嬉しくおほえ給ふこと限なし。右大將、この事の喜のよし奏せさせて、舞踏し給ふ。嵯峨院は、たちまちに、思す様に花やかなること、大將のなきを、なほ飽かず思さる。御方々より、童への舞ひつるに、かづけさせ給ふ物、いろく濃く薄くさまぐなる織物、かいねりのめでたく搗ちたる、朝ほらけに、いとくをかし。御方々、「世にまた類なく物し給ひける人かな」と宣はぬなし。犬宮の彈き給ひつるさまを、親宮の、かの五十日の餅まるりし程の、昨日今日とおほすに、いと哀なり。藤壺これをわが御子と思はましかばと思す。

〔考異〕
〔一〕この事―二の事

〔三〕給ひつる―給へる

院の上二所、左右大臣、宮たち、上達部おほん供にて樓御覽じにのほらせ給ふ。嵯峨院は、西の對よりおはします。上の御子たち、上達部左右別けて、御後に歩みつゞきたり。樓の芳しき匂、かぎりなし。御方々御覽じまはすに、をかしくなまめかしく、見所ある、樓の中のありさま、御覽じて、「いみじくをかしく、めでたくもしたるかな」と仰せらる。まして嵯峨院は、らうくじく、花やかにめでさせ給ひて、嵯峨の音を聞くと、こよの有様を見るとこそ、天女の花園もかくやあらむと覺ゆれ」と宣ふ。朱雀院、こまかに御覽するに、飽かずめでたければ、朱雀「けに、ことに、容貌よろしからざらむ人の、居るべき所の様にはあらざりけり」と宣はす。やんごとなき限、隙もなく、樓のめぐりの勾欄にさふらひ給ふ。山の高きより落つる瀧の、傘の柄さしたるやうにて、岩の上に落ちかよりて沸きかへる下に、をかしけなる五葉の小松、紅葉の木、薄ども、濡れたるに隨ひて動く、いとおもしろきを御覽じて、朱雀院、

樓の上(下)

〔語釋〕
〔二〕あかねば「歎

〔考異〕
〔二〕樓—櫻

〔三〕枝を見るかな—枝見
つるかな

〔四〕なるあはれ昔を—な
りむかしを

〔五〕奏し給ふ七八尺—申
し給ふ七八本—奏し給ふ
七八木

すむ人も宿もわかねばまどろして世をつくすべき心地こそすれ
右のおとどに、朱雀^(二)「羨ましの家のあるじや」と宣へば、いと疾く、
兼雅「やよもせば枝さしまさる木の下にたどやどりの木と思ふばかりを

今日よりは、ましていと畏くこそ」と啓し給ふ。心ばへ、哀なりと聞かせ給ふ。

嵯峨院、樓のかみにさし上りて、いといかめしき森のやうにて、櫻の木あり、

嵯峨「あはれ、此の木見るこそいと恐ろしけれ。昔十餘歳にて、春ごとに來つと、書

見るとて、見困じ—下りつと遊びし。いで、この樓なくば、及びなむや」とて、

嵯峨春きては我が袖かけしさくら花いまは木高き枝を見るかな
近うさふらひ給ふ源中納言、^(三)

涼かねてより雲かよりけるさくら花うべこそ末の木高かりけれ

宮内卿、年七十なる、思保「あはれ昔を思ひ出で侍れば、あの岩のもとの松の木は、

かの山に侍りしを、^(四)子日におはしまして引き植ゑ侍りしぞかし」と奏し給ふ。七

か



樓の上(下)

八尺ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼躬、

ひき植ゑし子の日の松も老いにけり千世のすゑにもあひ見つるかな

此の歌を、嵯峨院、いみじう哀がり給ひて、一院に、嵯峨「この返には、民部卿を

〔語釋〕
〔三〕右大辨に「なるべし
左大辨は季英

あまたの人望み申すなるを、この朝臣を、必ずなさせ給へ」と奏せさせ給ひつ。

〔四〕内侍のかみに大將」
なるべし

朱雀「これのみこそ、古人の留まりたるはあれ。いと哀なり」と申し給ふ。嵯峨「い

みじうおもしろき所なりや。時々物して、然るべからむ折に、左大辨に文作らせ

〔五〕俊隆渡唐中の作をあ
つめたるもの

て、聞かむ」など宣はすれば人々、「けにをかしう侍らむ」と啓す。

〔考異〕
仲忠、兩院以下に贈物
を奉る。還幸。

歸らせ給ひなむとす。朱雀院、大宮の御方に御對面せさせ給ふ。内侍のかみ、大

〔考異〕
〔一〕朝臣を「朝臣をば

將、仲忠いと忝き御幸を、いかど仕うまつるべからむ。唐土の集の中に、小册

〔二〕奏せさせ「申させ

子に、所々畫かき給ひて、歌よみて、三卷ありしを、一卷を朱雀院に奉らむ。

〔語釋〕
〔一〕金にて口のへり取り
たる

嵯峨院には如何」と宣へば、俊隆女「高麗笛を好ませ給ふめるに、唐土の帝の御返賜

〔二〕奏せさせ「申させ

ひけるに賜はせたる、高麗笛を奉らむ。上達部は、例の作法の御装あり。若

くおはします宮たちには、なべての様にはあらず、いかでをかしき様ならむ物こ

そよがらめ」と聞え給へば、仲忠然用意して侍り」とて、皆さまぐにまゐらせ

給ふ。からの色紙の畫は、一卷といへども、四十枚ばかりなり。柴檀の箱の黄金

〔語釋〕
〔一〕金にて口のへり取り
たる

の口置きたるに入れたり。御覽じて、朱雀「ここにこそ、今宵の物には、不死藥に

てもがな、と思へ。さても、これはいと見まほしく思ふものかな」と宣はす。嵯

峨院の御笛の袋は、色よりはじめて、いと清らにうるはしき錦の袋にて、璃瑠の

細き函に入れたる、透きて見えたり。人々興じ給ふ。上も好ませ給ふ物にて、い

と御氣色よし。式部卿の宮三所の大員には、女のよそひ、衣篋に入れたり。さて

の外は、例のことなり。御子たちには、銀の小鷹を作りて、黄金の透餌袋に入れ

て、皆ながら鈴つけて奉り給ふ。珍らかになまめかしうし給へり。嵯峨院、「飽

かぬ物の音を、中々になむ覺ゆる。いま一度だに、いかで必ずとなむ思ふ。それ

は、來年の櫻の花の折をなむ、ものし給はむにや」と宣はす。朱雀院近う寄せ

〔考異〕
〔三〕給へり「給へりとい
ふ

〔四〕宣はす「宣は

〔考異〕
〔一〕御志も「も」ナシ

〔二〕大殿は「は」ナシ

給ひて、朱雀いと飽かずのみ思ひきこゆるを、いかでか又、かやうにては聞ゆべからむ。犬宮の、いと美しう物し給へる喜は、聞えむ方なきに、なほ限なき御志もこもりたる身をこそまかせ奉らむと思へ」と、まめやかなる事ども、有りがたうおほえ給ふ様なれば、あはれにまめくしう宣ふを、御いらへ、今めかしからず、心恥かしき程に聞え給ふ。右の大殿は、^(三)とくも出でさせ給ひなむと、心安からずおほえ給ふ。嵯峨院、内侍のかみには、蒔繪の小辛櫃一かけに、女よそひ、又、女の装束三十くだり、皆裳、唐衣具したり。女房の中につかはす。朱雀院、衣篋一よろひに、唐綾、織物の夏冬のさうぞく、又女房の中に、女の装束二十くだり、わらは四人、下仕四人、織物のかさみ、繚の上のはかま具したり。左右の樂人、みな二人の御方々より祿賜ふ。事みな果てて、歸り給ひぬ。御方々、飽かすいみじかりつるものかな、常にかよる物の音を聞く、この人のかたち有様を、如何ならむとゆかしく、あかぬ心地し

〔語釋〕
〔一〕「親をも子をも」歟

〔二〕宣、ぬなしとなむ。宣はぬなし女大甕の有様、季英の辨の女にきん教へ給ふことなども多くあるべけれど、さのみは煩はしうて、さしあきぬ又事のついでに聞ゆべしとぞ。宣はぬなし次の巻に女大甕の有様大法會のことはあめりき季英の辨のむすめにきん教へ給ふことなど、残り一つにては多かめれば中よりわけたるなめりと本にこそ待るめれ

給ひてかへり給ひぬ。大將の御心はへもめづらかに、愈世になき様にて、^(二)親も子をももてなしかしづき給ふこととおほし宣はぬなしとなむ。^(三)

宇津保物語終

大正十五年十月十五日發

行 有朋堂文庫 (非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

終